

ひなたぼっこの研究者

たんぽぽ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

好奇心旺盛だが、引っ込み思案な少女。

『仲良し四人組』の一人である黄色がイメージカラーの少女は、ホグワーツで様々なことを学んでいく。

目次

第1章 賢者の石

| | | |
|------|---------------|----|
| 第1話 | ホグワーツ特急 | 1 |
| 第2話 | 組分け | 4 |
| 第3話 | 初めての授業 | 8 |
| 第4話 | 悪友 | 13 |
| 第5話 | 悪事の相談 | 16 |
| 第6話 | 悪事の研究 | 19 |
| 第7話 | 悪事の決行 | 22 |
| 第8話 | ハロウィーン事件 | 24 |
| 第9話 | 新たな友達 | 26 |
| 第10話 | マントの燃やし方 | 29 |
| 第11話 | クイディッチ | 31 |
| 第12話 | 必要の部屋 | 33 |
| 第13話 | ニコラス・フラメル | 35 |
| 第14話 | 透明マント | 37 |
| 第15話 | みぞの鏡 | 40 |
| 第16話 | 魔力 | 42 |
| 第17話 | 決意 | 44 |
| 第18話 | 悩みのお茶会 | 46 |
| 第19話 | ドラゴン騒動 I | 48 |
| 第20話 | ドラゴン騒動 II | 52 |
| 第21話 | 一位なハッフルパフ | 55 |
| 第22話 | 厨二病患者の対処法・理論編 | 58 |
| 第23話 | 厨二病患者の対処法・実践編 | 62 |

第24話 優勝は。 | 65

第25話 一年が過ぎた | 68

第2章 秘密の部屋

第26話 ドビー | 71

第27話 書店 | 76

第28話 ウィーズリー家 | 81

第29話 早めのホグワーツ | 84

第30話 友達 | 87

第31話 ひたすら点数を稼ぎまくる授業 | 90

第32話 ハロウィーンの悲劇 | 92

第33話 ミセス・ノリス | 94

第34話 不思議な屋台 | 97

第35話 不思議ちゃんの商品 | 100

第36話 クイディッチ ② | 104

第37話 クイディッチ ② | 107

第38話 協力の申し出 | 110

第39話 相談 | 113

第40話 解決策 | 116

第41話 決闘クラブ | 118

第42話 材料提供 | 122

第43話 後悔 | 124

第44話 目撃 | 127

第45話 再び後悔 | 129

第46話 潜入 | 132

第47話 バジリスクの魔眼 | 135

| | | |
|------|----------------|-----|
| 第48話 | 日記の破壊 | 138 |
| 第49話 | あちらの世界 | 141 |
| 第50話 | 二度目の決意 | 143 |
| 第3章 | アズカバンの囚人 | |
| 第51話 | 漏れ鍋 | 146 |
| 第52話 | 吸魂鬼 | 148 |
| 第53話 | 過去 | 151 |
| 第54話 | 新学期 | 153 |
| 第55話 | 買取とフラグ | 155 |
| 第56話 | ハロウィーンと罨 | 159 |
| 第57話 | クイデイツチ③ | 164 |
| 第58話 | クイデイツチ③ | 166 |
| 第59話 | クリスマスの前日 | 168 |
| 第60話 | バックビークとファイアボルト | 170 |

第1章 賢者の石

第1話 ホグワーツ特急

世の中には不思議なものが溢れている。

その中で、私が一番興味があるものが『魔法』というものだ。

魔法とは、常人に操ることは不可能で、とにかく謎に満ちたもの——二十一世紀の日本では、だいたいこの認識がされている。私はそんな魔法が大好きだった。

小学校中学年の時、私は『ハリー・ポッター』という小説に出会った。作者の描くその世界は詳細まで考え込まれ、奥が深く、イギリス魔法界という社会が裏で築き上げられていても全く違和感がなかった。とにかく私は魔法に惹かれ、出来る限り呪文を覚えたり、ホグワーツから手紙が来たりしないかなと思ってみたりもした。まあ、手紙は来なかったのだが。

『魔法』が大好きだった私。そんな私は、様々な出来事を経た後、こうして魔法使いのタマゴになったのだった。——転生という形をとって。

そう、私は『ハリー・ポッター』の世界に転生したのだ。

少し語ってしまったが、とにかく私は偶然手に入れたこの第二の人生を大いに楽しもうと思う。

*

「こんにちは、相席よろしいでしょうか」

コンパートメントをコンコンと礼儀正しく叩き、顔を覗かせた少年に対し、私は「はい。もちろんです」と当たり前障りなく返した。——

—お分かりだと思うが、ホグワーツ特急での恒例行事である。

向かい側の席に座った彼は、これまた礼儀正しく自分の名を言った。

「ジャスティン・フィンチフレッチリーです。マグル生まれで、今年新入生です」

「私の名前はリズ・フォーリー。私も一年生です」

「ああ、同い年なのですね。少し安心しました」

多分、同学年と比べてかなり小柄である私が一年生であると思当は付けたものの、少しは不安に思ってくれていたようである。とにかく、もう少し肩の力を抜いてもいいだろう。

「リズは魔法使いの家系に生まれたのですか？」

マグル生まれと言っていたこともあり、若干血筋を気にしている部分もあるのだろう。少し不安そうにジャステインは問い掛けてきた。

「はい。私は聖二十八一族という、歴代純血の家系に生まれました。だからと言って、優秀だとは限らないんですけど」

相手が不安に思わないよう、最後の一言を付け足しておく。

「そうなんですか。なら、魔法界のことにも詳しいんですか？」

「えーつと……それなりに」

「なら、『組分け』について教えて頂けませんか」

組分けか。ホグワーツの新入生が入学する前に、自分が所属する寮を決める儀式。長年の伝統なのか、まだホグワーツに入学していない者には暗黙のルールのように知らされないことが多い。

どう言おうか迷っていると、救いの手が天から差し伸べられた。

「ああ、組分けの儀式ね。私もその会話に加わっても良いかしら？」

コンパートメントの入り口には、一人の女の子が立っていた。

「えつと……？」

ジャステインが私の気持ちも代弁するように言葉を発すると、少女は私の隣に座りながら自己紹介をしてくれた。

「私はスーザン・ボーンズよ。新入生。組分けの話をしているってことは、あなたたちも同学年なのね？」

「僕はジャステイン・フィンチフレッチリー。あなたの言う通り、同学年です」

「わ、私はリズ・フォーリー。一年生です」

「よろしくね、ジャステイン、リズ。堅苦しいから敬語は使わなくてもいいのよ？」

「僕のは癖ですから」

そこで会話が一旦途切れ、スーザンが新たな話題を切り出した。

「リズは組分けの仕方について知っているの？」

「は、はい。『ホグワーツの歴史』という本に書いてありました」

前世の知識もあるのだが、それ以外に知る方法がないのかと入学前に模索した結果、『ホグワーツの歴史』というハーマイオニーお馴染みの本で見事発見したのだった。

「——ですが、お教え出来ません。そもそも、魔法族出身の新生までもが『組分けの儀式』の内容を知らないのは、それを経験した在校生、または卒業生が敢えて伝えないからなんです。その心は、新入生へのサプライズというもの。偶然知ってしまった私のようなパターンは仕方がないですが、それ以外には伝えるべきではないと思うんです」

「そうね。それなら納得よ」

「実際に体験するまで楽しみにしておきましょうか」

私の言葉に二人は納得してくれたようで、私は少しほっとした。内心では様々な喜怒哀楽が渦巻く私ではあるが、基本的に人と付き合うのは苦手。というよりも、人との距離感が上手く計れないのだが、この二人は気を使ってきているのか、本当に流れるように言葉が出てくる。この二人となら上手くやっていけるかもしれない。

私は珍しく、自分から話題を振った。その内容はもちろん——

「お二人は、どの寮に入りたいですか？」

定番のこれに尽きる。

第2話 組分け

「——フォーリー・エリザベス！」

組分けの儀式。

ホグワーツ特急で仲良くなったあの二人は、隣り合って座りながら私の組分けを見守っている。

どうか、二人の待つ寮へ行けますように。

私は心からそう願いながら、組分け帽子を被った。

『ほう。おもしろい』

頭の中に響く、知性に溢れる声。これが組分け帽子の声なのだろう。

『なるほど。学ぶことは好きだが、レイブンクローに行くことは望んでいない』

その通り。

『また、血統から見ては資格が充分にあるものの、スリザリンへ入ることとは望んでいないのだな。確かに、君のような性格ではやっていけないだろう』

だから、私が望む寮を。

『グリフィンドールへの資格は『勇氣』。君は、確かに勇氣に憧れを持ってはいるが、君の本質はそうではない』

私の望む寮の名は——

『良いだろう。君は真の友に巡り会える。君の行く寮の名は——ハッフルパフ!!!』

テーブルから歓声があがった。

私は帽子を頭から取ると椅子の上に置き、黄色のネクタイが溢れるテーブルへと駆け寄った。

「リズ！ 同じ寮で良かったわ」

「リズ、おめでとうございます」

私が望む寮はハッフルパフだとあらかじめ話してあったスーザンとジャステインに加え、既に組分けされている一年生や上級生も口々に祝ってくれる。

グリフィンドールやスリザリン、レイブンクローにはない、暖かな安心感。これを私は求めていたのだった。

*

「僕はザカリアス・スミス」

「僕はジャステイン・フィンチフレッチリーです」

「私はスーザン・ボーンズ。この子はリズ・フォーリーよ」

ザカリアスという少年を加え、私達はホグワーツで初めての食事をとっていた。

「皆さんはもう、授業の予習をしたのですか？」

というジャステインの問い掛けに対し、

「私はまだよ」

「僕もまだだ」

「私は少しだけ……」

と、なぜか私だけ違う答えを返していた。あれ？ みんな予習してないの？

「僕はパラパラと教科書を見た程度ですが……魔法界では予習とはどのようにやるものなのでしょうか？」

「マグルとさほど変わりはないと思います。魔法使いと言ってもマグルと同じ人間ですから、基本的な生活の仕方は変わりません」

「なるほど。では授業もあまり変わりはないと？」

「進行の仕方はほぼほぼ変わりないと思いますが、魔法を学ぶため、実技は多いはずです。実際、呪文学——一年生は『妖精の魔法』の授業ですが、教科書には様々な呪文と、その使い方が書かれています」

「そうでしたか。僕も頑張って予習しないと」

「一年生の初め頃はそこまで頑張らなくても良いと思います。みんな成り立ての魔法使いですから、まずは初歩から入りますから」

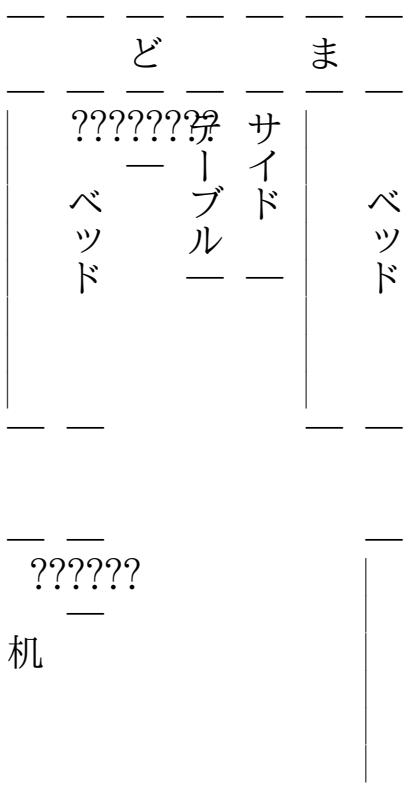
「なるほど。ありがとうございます」

スーザンとザカリアスは、私達のやり取りを呆然と聞いていた。

「私も予習とか考えた方が良いのかしら……？」

「学習の姿勢を考え直した方が良いのかもしれない……」

そこまで考えさせる内容では無かったと思うのだが。



上のように左右対象に配置されているために、どちらの方が良い、というような事がないため、私は安心してもう片方をとった。ちなみに、上の図に書いてある以外にも、本棚や数人で囲めそうな小さな丸いテーブルやクッション、クローゼットなどもある。ちなみに扉は図の右の方にある。

私服や制服をクローゼットにかけ、教科書や本などは本棚に並べる。もちろん、明日使う教科書は移動時に役に立つカバンに、羽ペンやインク瓶、羊皮紙と共に入れておく。他の文房具類は、机の引き出しにしまっておいた。手早くパジャマへと着替え、私達はそれぞれのベッドに入る。

「おやすみ、リズ」

「おやすみなさい、スーザン」

私達は挨拶を交わすと、それぞれ夢の世界へと飛び立っていった。

第3話 初めての授業

目を覚まして一番最初に見たものは、淡いクリーム色の天井だった。

私はサイドテーブルの時計を見て、朝食まで一時間ほど時間があるのを確認すると、眠たい目をこすってベッドから出た。

パジャマから制服へ着替え、ネクタイをしめる。しかし、なかなか思うようにネクタイがしめられず、鏡の前で苦戦していると、目を覚ましたらしいスーザンが声を掛けてきた。

「おはよう、リズ。どうしたの?」

「おはようございます、スーザン。ネクタイがしまらなくて……」

髪を手ぐしでとかしながら起き出してきたスーザンは、私が手こずっていたネクタイをいとも簡単にしめてみせた。

「はい、出来上がり」

「ありがとうございます。助かりました」

私は鏡で一応制服姿を確認すると、机に置いてあるカバンの中身をチェックした。うん、大丈夫。

その間に身支度を済ませたスーザンは、私と共に部屋を出て談話室へ向かった。

「おはようございます、リズ、スーザン。よく眠れましたか?」

最初に私達に気が付いたジャステインが、礼儀正しく私達に尋ねる。

「おはようございます、ジャステイン、ザカリアス。朝までぐっすり眠れました」

「二人は朝からいつもの調子だな……」

ザカリアスが目をこすりながら呟く。スーザンに至っては、

「今日は大音量目覚まし時計のお陰で六時台に起きれたけど……明日からは無理そうだわ」

「目覚まし時計の音なんてしましたっけ?」

「対象者以外には音が聞こえない魔法が掛けてあるのよ」

なるほど。さすが魔法界。便利だな。と思ったものの、後に続いた

「でも十分間も丸々それを聞かされたら調子が狂うわね……」という言葉聞いて、絶対に使用はやめようと考え直した。そうか、他の人に音が聞こえないということは、自分が止めなければ永遠に大音量が鳴り続けているということなのだ。つまり、私が起きた六時ちようどから、スーザンが起きるまでの十分間、目覚まし時計は精一杯仕事をしていたということ。そりゃ調子も狂う。

「では、まだ初日ですし、早めに大広間へと向かいましょうか？」

昨日だったらスーザンが明るくみんなをまとめてくれるのだが、あいにく今日は調子が狂っていることもあり、必然的にジャステインにその役がまわった。私達はその言葉に賛成し、談話室の席を立つ。

寮の入り口では、監督生の女子生徒が立っていた。

「おはよう。あなたたちも早めに大広間に向かうのかしら？　それなら、この地図を持っていくと良いわよ」

代表してスーザンがお礼の言葉と共に地図を受け取ると、そこには『ハツフルパフ新入生御用達・ホグワーツの主要教室案内図』とあった。主要、ということは全ての教室が書かれている訳ではないのだろう。念のため確認してみると、確かに北塔の最上階には古い学の教室が見当たらなかった。

「大広間はここね。寮と近くて良かったわ。さあ、行きましょう」

いつの間にか調子を取り戻したらしいスーザンに先導され、私達は大広間へと向かった。

大広間のハツフルパフのテーブルには、既に数人の上級生が座っていた。その中で、一年生と思われる二人組を発見すると、私達は彼らに近付いていく。

「おや、君達も一年生かい？　良かったらここにおいでよ。一緒に朝食をとろう」

お言葉に甘えて私達は席に着いた。早速、二人組の男の子の方が話し出す。

「僕はアーニー・マクミラン。こちらはハンナ・アボットだ。君達は？」

「私はスーザン・ボーンズよ」

「僕はザカリアス・スミス」

「ジャスティン・フィンチⅡフレツチリーです」

「私はリズ・フォーリーです」

「よろしく。君達は授業の予習は済ませたかい？」

「いいえ。けど、リズとジャスティンはやっているみたいね」

スーザンが答える。

そのまま、初めての授業について話は及び、朝食の時間は流れていった。

「おつと。そろそろ僕達は失礼させて頂くよ」

先に朝食を食べていたこともあり、アーニーとハンナは先に席を立った。

「さあ、私達も行きましようか」

再び地図を頼りに、呪文学の教室へ向かって歩く。グリフィンドールの最初の授業は変身術だったから、最初は寮監の授業なのかとも思ったが、それならスリザリン生が辻褄が合わない。グリフィンドールの生徒達は、変身術の授業を受けた後、スリザリン生と一緒に魔法薬学を受けていた。つまり、スリザリン生の最初の授業は魔法薬学では無いということ。つまり、ハッフルパフの最初の授業が薬草学でなくとも充分納得がいく。

そんなことを考えているうちに教室に到着し、既に最前列に座っていたアーニーとハンナの隣の列に私とスーザンが、そしてその後ろにジャスティンとザカリアスが座った。

しばらくすると、全てのハッフルパフ生の一年生が席に着席し、先生を待っていた。教師はフリットウィック先生。若い頃は決闘チャンピオンであったことから、魔法の腕はかなり高いと見える。

「はいはい、皆さん、静かにして下さい。私が呪文学の教師、フリットウィックです。さあ皆さん、教科書と羽ペンを出して下さい。まずは呪文の基礎の基礎から教えたいと思います」

そして話し始めたフリットウィック先生の話は、とても興味深いものだった。

まずは、魔法は杖を振って呪文を唱えれば簡単に使えるものでは無

いということ。変身術ほど複雑でも難しくも無いが、キチンと理論を学び、正しく杖を振ることが必要不可欠だと言えるのだ。

そこで私はふと考えた。何故『無言呪文』が存在するのに、呪文を唱えなければいけないのか。深く考えてみるのもいいが、今は授業中だ。素朴な疑問を教師にぶつけてみるのも悪くはないだろう。

そう考えた私が静かに挙手をする、すぐに先生は気が付いた。

「質問ですか、ミス・フォーリー？」

「はい。今先生は魔法には呪文が必要不可欠だとおっしゃっていましたが、この世には無言呪文というものが存在します。無言呪文は呪文を必要としませんが、何故呪文を言わずに魔法を使うことが出来るのでしょうか」

フリットウィック先生は、私が無言呪文について知っているのに驚いたようだが、逆に聞き返してきた。

「ミス・フォーリー、無言呪文についての説明は出来ますか？」

「はい。無言呪文とは、声を発さずに魔法が使うことが出来ます。そのメリットは、呪文を唱えなくていい分発動が早いこと、決闘などでは相手に何の呪文を使うのか悟らせずに済むこと。デメリットは、声を発さずに魔法を使うため、威力が落ちることです。普通はベテランの魔法使いが使用します」

「その通り。ハツフルパフに五点。無言呪文は、本来の声に出して呪文を唱える魔法が出来ないと使えません。何故なら、使う魔法のイメージが出来ていないからです。そもそも呪文とは——」

フリットウィック先生の話が長くなってしまったのでまとめると、
・そもそも呪文とは、使用する魔法に集中出来るよう古代に編み出されたもの。

・それが改良され、呪文を唱えれば比較的簡単に魔法を使うことが出来、更にその精度が上がった。

・無言呪文とは、古代に使われていた呪文を用いない魔法である。ということだった。

「とても良い質問でした、ハツフルパフに更に五点あげましょう。それでは、まずは一番簡単な呪文から試してみしましょう。呪文はこうで

す。『ルーモス、光よ』」

フリットウィック先生が呪文を唱えると、その杖先にポツと光がともった。

「これは、杖を振ることのないとても簡単な呪文です。さあ、やってみましょう」

『ルーモス、光よ』」

まず先陣を切ったのは、私の斜め後ろに座っているザカリアスだった。呪文を唱えたにも関わらず、魔法の光はともっていない。

「ザカリアス、先ほどの私の質問を思い出してみてください。魔法に集中し、イメージすることが大切なんです」

「リズは出来るのか？」

「はい。『ルーモス』」

私の杖先に、小さな光がともった。

「魔法というものは、変幻自在なものです。イメージ次第で、呪文を用いた魔法も少しずつ変えることが出来ます。例えば――」

私は光を強くしたり弱くしたりしてみせた。また、杖を少し大きめに振ると、光が杖先から空中へと離れていく。

「こんな感じに、イメージしてやってみてください」

「難易度高くないか？」

「僕もそう思います。先ほどの話から察するに、それは無言呪文というもののようですし」

「キチンと練習さえ積みめば、このくらいなら誰にでも出来ます」

「そうなのね。私もやってみなきや。『ルーモス、光よ』！」

私の発言のお陰かはわからないが、授業が終わるまでに、全員がこの魔法を習得することに成功した。

第4話 悪友

ホグワーツに入学してから一週間が経った。

私はその間にスーザン、ジャステイン、ザカリアスと更に仲良くなり、アーニー、そしてハンナとも緊張せずに話せるほどになった。

そこまで至ってから、私はやっとハリー・ポッターのことを思い出した。まったく、『ハリー・ポッター』の世界なのに今の今まで忘れていたなんて、ハリポタ命！　な生前の私には口が裂けても言えない。口が裂けたら言えないけど。

で、とにかくハリー、ロン、ハーマイオニーの顔は早めに確認しておいた方が良さだろうということで、私は現在スパイになりきって大広間で昼食をとっている。

お寝坊のスーザン、そして休日は遅くまで寝る主義であるザカリアスは、まだ寮の自室で寝てる。ジャステインは、きつと今頃図書室で魔法薬学のレポートを前にうんうん唸っているだろう。私？　昨日は金曜日だったので、夜遅くまで掛かって既に仕上げてある。

お、ハリーとロンが入って来た。あの様子を見るに、多分遅めの朝食兼早めの昼食をとるつもりで来たのだろう。ダーズリー家で早起きには慣れているハリーはまだしも、ロンなんて眠そうな目をこすっているのだから。

十分ほどで食べ終わった二人は、何やらしゃべりながら大広間を出ていく。私もそれに合わせ、読んでいるふりをしていた本を閉じ、カバンにしまつてさりげなく二人の後を付いていった。

多分二人は談話室へ向かうのだろう。私はハツフルパフ生なので、そのまま付いて行ったら怪しまれてしまう。原作ハーマイオニーによると、ダンブルドア校長の魔法のお陰で校内では『目くらまし術』が使えないので、私はこの一週間頑張つて研究した魔法を使った。

その名は『光による目くらまし術』。

本来の目くらまし術は、その対象を透明に変えるという、本当に魔法的な魔法だ。それに対し、こちらは自然エネルギーのひとつ、光を一時的かつ部分的に操り、私に光が当たらずに通り返けるようにする

魔法だ。人間は、光が反射することによって物を見ることが出来るので、そこから発想を得た魔法だ。ただし、その魔法を編み出し、擬似的に習得してからまだ二日も経っていない。魔法を掛けた状態で動く、私がいる場所が揺らめき、バレてしまう。だから、誰の視線も無いときを狙ってひたすらダッシュし、なんとかグリフィンドールの場所を発見することに成功した。

その瞬間、私は後ろから声を掛けられる。

「誰かと思ったら、ハッフルパフ生じゃないか」

「君、そんなところで何をやってるのかな？」

そっくり過ぎる二つの声。その声の主がわかった瞬間、私は透明マントの上をいく存在を思い出した。『忍びの地図』。プロングス、パツドフード、ムーニー、ワームテールが生み出した、ホグワーツの地図である。

そうだ、三年生の時にハリーに譲渡される前は悪戯好きな双子が所持していたのだ。私の存在などバレバレだ。

——ここまでの思考、約0.2秒。そして、思わず逃げようと動いてしまったのが運の尽きだ。

「お、今一瞬見えたぞ！」

「さあさあ、姿を表せ！」

こいつら、絶対楽しんでるな。そう察した私は、自分の姿が揺らめくのも気にせずに双子に近付き、人気の無いところへ引っ張っていった。

「——で？」

「ハッフルパフの一年生が、グリフィンドールに何の用かな？」

息ぴったりの双子、フレッドとジョージに向かい合うようにして、姿を表した私は立っている。

「その前にひとついいですか？」

「なんだい？」

「その手に握っている羊皮紙なのですが」

予想外の言葉に、思わずギョツとする双子。私はニヤツと笑ってみせる。

「――交渉といこうか」
私が忍びの地図が実際に動いているのを見るのに、十分と時間は掛
からなかった。

第5話 悪事の相談

「——という魔法になります。まだまだ改良が必要な魔法ですが、いずれ悪戯をする上でかなり重要となる魔法でしょう」

「……理論はよくわからないが、役に立つということとはよくわかった」
フレッドとジョージ、略してフレツジヨとの交渉を終えてから、場所が変わって図書室。私は先の魔法の説明をしていた。

私達が行った交渉で、向こうの要求は「自分達の悪戯に手を貸して欲しい」というものだった。私は「悪戯には手を貸すが、一切の責任を持たない。また、自分の研究などでたまに手伝って欲しい」と要求した。互いの利害が一致した私達は、ガツチリ握手を交わし、悪戯の相談をするために図書室へ来たのだ。

「まず、あなた方の目的は『悪戯専門店の開業』で間違いありませんね？」

「何故それを知っているのかはあえて聞かないが、その通り」

「そのためには、様々な悪戯グッズの開発が不可欠ですね。とりあえず、一度大きな悪戯を全校生徒に仕掛け、反応を見てみるのはどうでしょうか？」

「それには賛成だ。結構はいつにする？」

「とりあえず、ハロウィーンの日にするか？」

ジョージがハロウィーンの日を提案したので、私は慌てて却下した。クイレルのせいでトロールが侵入する日だ。悪戯に水を差され、中途半端な結果に終わってしまうだろう。

「ハロウィーンの日は、皆悪戯にある程度警戒しているでしょう。あえて前日にやるのはどうでしょうか？」

「それもいいな。あと一ヶ月もないから、早速試作品を作り始めないと」

「では、お二人はこのドでか花火をお願いします。残りの細々としたものや前座は私が担当しますので」

「そんなに出来るのか？」

「実際の製作には手を貸していただくでしょうが、試作品程度なら一

人でも出来ると思います」

既に、ハリポタの五巻の映画のフレッジョから発想は掴んでいる。それを形にすれば良いだけの話だ。

「それでは、また来週にお会いしましょう」

「次は試作品を持ち寄って、だな」

「リズの楽しみにしてるよ」

*

さて、中々に厄介なものを背負ってしまった。

『ペリキュラム』

そつと眩くと、杖先から火花が飛び散った。これは、原作四巻の『トライ・ウィザード・トリーナメント三大魔法学校対抗試合の最後の課題で、代表選手が救出を必要とする時に火花を出し、外野に知らせる魔法だ。これを何とか操り、自動的に発動させないといけない。

前世に読んだファンタジーの小説では、魔力を何かに注ぎ込み、その器を割ることによって魔法を発動させることが出来た。その本では、魔力を注ぐのに最適なのは宝石だったが、ガラスでも良かったはずだ。ガラスでも良いなら、氷でも良いのか？

というわけで、試してみた。

『グレイシアス、氷よ』

うる覚えの呪文だが、あっているはずだ。

初めてやった呪文の出来は散々だった。手に乗る程度の、中が空洞の球体を作ろうとしたのだが、形はぐにやぐにや。綺麗な円を作ることが出来ない。空気の抵抗が原因？ それともイメージが足りないのか、氷の厚さが薄過ぎるのか？

変身術の授業を思い出してみると、初回の授業ではマッチ棒を針に変えていた。その呪文を使うことがわかっていた私は、事前に練習していたために一発で成功させることが出来たが、初めてやってみたときはぐにやぐにやの針だった。とにかくイメージが大切だと思った私は、マッチ棒の直線に沿って杖を動かしながら何度も練習した。

今度は、小さな円を描くように杖を振りながら呪文を唱える。

『グレイシアス』

今度出来たのは、厚さ三ミリほどの平べったい円の氷。綺麗な円形になったのは良いが、これでは立体ではない。まずは、氷を薄くすることより球体を作る方が優先だろう。

私は再び杖を構えた。

第6話 悪事の研究

私は見事、氷を思い通りに操ることに成功した。今じゃ氷細工なんて朝飯前である。

フレツジョとの悪事の契約を結んでから一週間、私達は再び図書館に集合していた。

「まず、俺達は完成形の極小版の花火を作ってみた」

「見た目の派手さは俺達が保証する」

「だが、問題点がひとつ」

「俺達が杖を使つて魔法を発動しないと、花火は出ない」

交互に報告するフレツジョ。私も自分の研究の成果を報告する。

「私はまず、杖に頼らず魔法を発動させる方法を考えてみました。情報の出所は極秘ですが、理論上は氷の中に魔力を閉じ込められるのではないか、という結論に至り、まずは氷の球体を作成しました。その時の注意点は、氷は出来るだけ硬く、そして純度を限りなく高くすることです」

ローブのポケットから、手のひらサイズの氷の球体をひとつ取り出す。

「これは、『魔力』ではなく『魔法』を閉じ込めた球体です。ルーモスによつて生まれた魔法の光が閉じ込められています」

「リズの言う魔力と魔法の違いとは何なんだ？」

「魔法が発動する時です」

「時？」

「はい。私はこれに魔法を閉じ込めました。既に発動している光を、氷の中に入れたんです。だから、光は氷から透けて見える。しかし、魔力はまだ発動していない、魔法の源です。氷を割った瞬間、魔力は魔法に変化するんです。例えば用いると、氷を割った瞬間、魔法の光が出来る、ということでしょうか」

「で、それは出来たのか？」

「いいえ。今図書館中を総力上げて探しているのですが、まだ魔力そのものを操る方法は見つかっていません。ハロウィーン前日まで、お

よそ三週間。もしかしたら、魔法を閉じ込めたもので決行することになるかもしれません」

「魔法を閉じ込めることのデメリットは？」

「量産に時間が掛かること、そして実際に氷を割ってみて思い通りに魔法が動いてくれるかわからないことです」

「じゃあ、あと二週間で何とかしてみせてくれ」

「一週間で何とかしてみせます」

「さすがリズ。俺達も花火の発動についてももう少し考えてみるよ」

「では、次の集合はどうしましょうか」

「何事もなければ一週間後、またここで。何かあればふくろう便をお互いに送ろう」

「了解しました」

*

そういえば、ハリーがクイディッチの選手になったらしい。

クイディッチの初戦は確か、ハロウィーンの翌日だったか。対戦相手はスリザリン。結果はわかっているが、ハリーの勇姿を見に行ってみようか。

——そうだ、クイレルwithヴォルデモートが試合を妨害するんだったか。そしてスネイプのマントはお亡くなりになる。

ハリポタ原作を読了している私としては、スネイプ先生は尊敬すべき人物だ。愛のために生きる。それが出来る人間は、どれだけいるだろうか。というわけで、クイレルwithヴォルデモートのマントも燃やすことに決定した。スネイプのマント？ 残念だが私には救えない。

ちなみに、クイレルwithヴォルさんのターバンの下は、ホグワーツ生全員にとっては永遠の謎となっているようだ。フレッジョが「クイレルがハゲの方に賭けないか？」と言ってきたが、何とも言えない事実であることを知っている私は丁寧にお断りしておいた。だって、あれってハゲに入るの？ 確かに髪は無いけどさ。

最終的に、考え事をしながら図書館中を血眼になって本を探していく私を見かねて、図書館の司書であるマダム・ピンスが声を掛けてく

れ、魔力を操る本は禁止の棚にしかないことが発覚した。

第7話 悪事の決行

ハロウィーン前日の二日前。私は寮の自室で魔法in氷を大量生産していた。

既に花火を閉じ込めた球は出来上がり、山積みになっている。今作っているのは、光を閉じ込めた球体。パステルカラーの赤、黄色、青、緑の作成も既に完了しており、今はキラキラした感じの光を球体に閉じ込めている。

どれも完成品だが、最終的な目標から考えるとまだ試作品の段階だ。私達は、今回は『試作品のお披露目会』という目的であることを確認し合った。だから、まだ悪戯グッズに頼るだけではなく、自分の手で魔法を使っても構わないことを。

スーザンが帰ってくる前に、全ての球を『検知不可能拡大呪文』という、対象を『四次元ポケ○ト』のような物にする呪文を掛けた自分のカバンにしまう。

* 早く決行日になって欲しい。

「今日の天気は晴れ」

「悪戯決行」

「合言葉。山」

「海」

なんていう馬鹿なやりとりをフレツジヨと交わし、私はいつも通り、スーザン、ジャステイン、ザカリアスと共に夕食の準備が整っている大広間へ向かった。ちなみに、合言葉を『山、海』にしたのは、「山と言ったら川じゃなくて海でしょ！」という私の単純な思考からである。ちなみに②、合言葉は別に必要ない。

夕食は、朝食、昼食と違って、皆ほとんど同じ時間にとるため、全校生徒を対象とした悪戯には最適だ。現に、ほとんどの生徒と先生が揃っている。ミートソースパスタを食べながら、呑気にそろそろかなあ、と思っていると、悪戯は突然始まった。フレッドが大広間の入り口に現れ、私が用意した球を大広間の真ん中へ投げ込んだのだ。

バーーーーー！！！！

いきなり、大広間の上空に花火が打ち上げられた。続けて、連続で花火が打ち上がっていく。私はテーブルの下でひとつの球を足で蹴り割った。

この球には、私が作り、学校中に仕掛けた球を割るための呪文が閉じ込められていた。それが割れたので――

パーーーーー！！！！

学校中の球が割れ、中から光が飛び出し、自由気ままに飛び始めた。ここまでで生徒&先生方は大混乱。そして悪戯はフィニッシュを迎える。

大広間の天井に、ドデカイ『10』が浮かび上がった。それは『9』、『8』と減っていき、『5』になるころには全校生徒がこのカウントダウンを声を揃えて叫んでいた。

「4！ 3！ 2！ 1！」

ゼロ。

特大の花火が打ち上げられ、七色の光が飛び散り、バックに大きな氷の造形が出来、大きな炎が燃え上がった。この本格的過ぎる悪戯に、生徒達は総立ちになって拍手をする。私？ ドヤ顔を隠して特大の拍手を送っている。

これで悪戯完了――ではない。

氷の造形はハロウィーンの日23時59分59秒にならないと消えない魔法が掛かっているし、もし消失呪文を使われても、更に造形が大きくなるだけだ。学校中を飛び回っている光はクイディッチの試合が終わるまで消えない。これで反応を伺えるだろう。

さて、明日はハロウィーンだ。さりげなくハリーとロン、ハーマイオニーの様子を見守ろう。

第8話 ハロウィーン事件

ハロウィーン当日。私はフレツジヨから忍びの地図を借りてきていた。

以前、偶然廊下ですれ違ったネビルからパクった——借りてきた、グリフィンドールの一年生の時間割表のコピーで確認すると、今日の呪文学の授業は五時間目。六時間目、そして夕食の時間を地下の女子トイレで過ごすことになるのだろう。ちなみにネビルからパクった本物の時間割表は、後日こっそりカバンの中に滑り込ませておいたので問題ないだろう。あ、パクってない。借りたんだった。

まあ、今朝のうちに地下の女子トイレには『一時間ごとに綺麗になる魔法』を掛けておいたので、きつとハーマイオニーも快適に使えるだろう。このためだけにこの魔法を開発した私は、徹夜のせいで超眠い。

六時間目が終わり、夕食前なう。私は^{スーザン ジャスティン ザカリアス}S・J・Zに「忘れ物したから先に大広間に行つて」と告げ、地下へ向かった。ちゃんと^{ハリー・ロン ハーマイオニー}H・R・Hがトイレでvsトロールを繰り広げるか確認するためである。

女子トイレの前の石像の陰に隠れてしばらくすると、クイレルwithヴオルさんがトロールを連れてやってきた。そしてトロールを野放しにすると、さっさとどこかへ消えて行った。忙しそうだ。

クイレルwithヴオルさんが消えてから約十分後。ずっとブヒブヒ言いながら辺りをさまよっていたトロールが女子トイレに足を踏み入れ、同時にハリーとロンが姿を現した。

「トロールだー！ 女子トイレに閉じ込めよう！」
君達の目的はハーマイオニーの搜索だろう。何トロール閉じ込めようとしてるんだ。

そうツツコミたくなつた私は、念のため手で口を押さえつつ、様子を伺う。

「きやあああああああ!!!」

ハーマイオニーの悲鳴が聞こえた。ハリーとロンが顔を見合わせ、

女子トイレのドアに飛び付く。そして、原作通りに戦い始めた。

ハリーが投げたパイプを、偶然トロールが掴む。それを、トロールは邪魔に思ったのか『ポイ』し——ロンの背中に激突した。

もう一度言おう。パイプが、ロンの、背中に、激突した。

ええええええええええ!!! 原作と違う!! 何それ!! 何そ

の展開!? ロンってトロール退治の重大な役目担ってんじゃない

!! 気絶しちやっただよハリー大ピーンチ!!!

そんなわけで、私は後先考えずに女子トイレに飛び込んだ。

『アクシオ、ロン!』

トロールに踏み潰されたら大変なので、気絶しているロンを呼び寄せ呪文で回収。そして、私は最近使いまくったせいで精度が上がりまくっている呪文を唱えた。

『グレイシアス!』

杖先から水色の閃光が飛び出し、まずトロールの足を凍らせた。そして、氷の面積はどんどん広がっていき、三十秒後には巨大トロールの氷の像が出来上がっていた。ちなみに、トロールを閉じ込めている氷は、硬度MAX・厚さ三十センチ・純度MAXというものである。硬度と厚さは良いが、純度よ、お前はいらん。

急に入った助けに啞然としているHハリーとハーマイオニーコンピは放っておき、私はロンの様子を確かめた。怪我はなく、気絶しているだけ。え、痣もないの? どんだけタフなの?

念のため治癒呪文を掛けておき、パイプから漏れている水を凍らせることよってせき止めた私が立ち去ろうとした瞬間、数人の足跡が聞こえた。

あ、詰んだ。

第9話 新たな友達

「一体、これはどういうことなんですか」

シーンと静まり返った女子トイレに、マクゴナガル先生の怒りで震えた声が響く。

ハリーが何やら言おうと口を開いたが、その前にハーマイオニーが言った。

「私のせいなんです、先生。私、トロールの退治の仕方を本で読んだことがあったので、退治出来ると思って来たんです。そしたら、私がないことに気が付いたハリーとロンが助けに来てくれました。ロンがパイプに背中をぶつけて気絶した後、その女の子がトイレに飛び込んで来て、トロールを凍らせてくれました。そして、ロンの怪我を魔法で治してくれたんです。三人がいなければ、私、今頃死んでました」

いや、もともと怪我してなかったから、念のために治癒呪文を掛けただけだよ？ 治したわけじゃないからね？

「あなたの言い分はわかりました、ミス・グレンジャー。何故、ポッターとウィーズリーがここにいるのかも。では、ミス・フォーリー、何故あなたはここにいますか？」

H・R・Hを見張つてたからです、先生！ —— などと言うわけにもいかず、私はもともと用意してあった言い訳を口にした。

「私は、夕食の前に、魔法薬学の教室に忘れ物をしたことに気が付いたんです。それで、みんなには先に行つててもらつて、取りに戻ろうとしました。途中で悲鳴や轟音が聞こえて、気になって来てみたらトロールがいて。後は既に説明された通りです」

「ミス・フォーリーの忘れ物なら、我輩がちようど届けに行こうとしていたところです。彼女の言っていることに嘘はないでしょう」

と、手負いのスネイプ先生が私の羽ペンを差し出しながら言った。私は礼を言いながらそれを受け取る。嘘つきまくってるけどね！

わざと羽ペン置いて来たけどね！

「ミス・グレンジャー、あなたには失望しました。ポッターとウィーズ

リーも、教師に相談するという手があつたでしょう。しかし、トロールと対峙し、生き延びていることは奇跡です。その奇跡に対し、一人五点与えましょう。——そして」

え、まだ続きがあるの？

「トロールを封じ込めた技術に対し、ミス・フォーリーには十五点与えます」

マジか。それは嬉しい誤算だ。

「ポッター、ミス・グレンジャーはウィーズリーを医務室へ連れて行きなさい。ミス・フォーリーは寮へ戻ると良いでしょう。きつとパーティの続きをやっているでしょうから」

そう言い残し、教師群は去っていった。

「あの、フォーリーさん」

「な、何でしょう？ グレンジャーさん」

唐突にハーマイオニーが声を掛けてきた。

「あの、私、ハーマイオニー・グレンジャー。こちらはハリー・ポッターとロン・ウィーズリー。みんなグリフィンドールよ。今日は助けていただいてありがとう」

「いえ。困ったときはお互い様ですから」

「どうしてロンの名前を知っていたの？」

ああ、呼び寄せ呪文を使ったときのことか。

「『ロン』と呼ばれているのを聞いたことがありましたから。フルネームは知りませんでした」

「えーと……君の名前は？」

いつの間にか起き出してきたロンが尋ねてくる。

「リズ・フォーリー。ハツフルパフの一年生です」

「よろしく、リズ。僕達のこともファーストネームで呼んでくれて構わないよ」

「こちらこそ、ハリー。ですが、その前にロンは、ハーマイオニーに言うことがあるのでは？」

「どうしてそれを？」

驚く三人に向けて、ウイंकをひとつ。

「秘密です」

そして、女子トイレを後にした。

第10話 マントの燃やし方

さて、ハロウイーンの騒動の翌日、つまりクイディッチ初戦の日である。

私は昨日、晴れて憧れのH・R・H（ハリー・ロン・ハーマイオニー）と言葉を交わすことができ、なおかつファーストネームで呼びあうことを許されたことにより、絶好調だった。スネイプ先生のマントが燃える日だというのに。こちらこそ、ロンとは言葉を交わしてないとか言うんじゃない。

とにかく、クイディッチだ。

クイディッチとは、魔法界特有にして大人気のスポーツのことであり、使用する道具はスニッチ、ブラッジャー、クアツフルという三種類のボールと箒、バット二本である。スニッチは小さな羽のついた金の球で、素早くコート中を飛び回る、一番厄介なボールだ。これを『シーカー』というポジションの人が探し、キャッチした方のチームに百五十点が与えられ、同時に試合は終了する。ブラッジャーは二個使われる黒い暴れ玉であり、試合中は容赦なく選手を襲う。それをバットで撃退するのが二人いる『ビーター』である。そして、ここまでは個性的なボールだったが、最後のクアツフルは実に普通のボール。真っ赤に塗られ、持ちやすいような凹凸が軽くついた、タネも仕掛けもないボールである。三人いる『チェイサー』が、三つある相手のゴールにクアツフルを入れると十点獲得出来る。そして最後は、マグルもお馴染みの『キーパー』。三つのゴールポストの周りに待機しており、クアツフルがゴールに入るのを防ぐ。なお、クイディッチは全ての選手が箒に乗って行われ、更に言うなら、基本的に上空二十〜三十メートルで行われる競技である。落ちたら大変だ。ハリー頑張れ。

まあ、そう言うわけで、私はS（スーザン）・J（ジャスティン）・Z（ザカリアス）と共にクイディッチ競技場へと向かっていた。

もちろん、手に持っているのはグリフィンドールの応援グッズ。グリフィンドールかスリザリン、どっちを応援するかと聞かれたら、ハッフルパフ生は迷うことなくグリフィンドールを選ぶので、私としては嬉しい限りだ。

「リズがすごくはしゃいでいるわ……」

「何か良いことがあったんでしようか」

「悪いものでも食べたのかもしれないな」

そこまではしゃいで見えるのだろうか。というかザカリアス、君は私に何か恨みがあるの？

私は、ハリー H・R・ロン H ハーマイオニー と話すことが出来て嬉しかったただけなのだ。

生前、ハリポタ命!!! だった私なのだから、このような反応は至極当たり前なのだ。クイレルwithヴォルさんのマントが燃える日だし。いや、燃えるんじゃないやなくて燃やすんだけど。あ、そうだ、クリスマスには匿名で、スネイプ先生に新しいマントとシャンプーを贈ろうかな。喜んでくれるに違いない。

いやー、今日も楽しいなー。

*

我ながらすごいのはしゃぎようだったと思う。

競技場に入ってからリー・ジューダンに会い、グリフィンドールが勝つ方にかなりのお金を掛けた私は、教員席にスネイプ先生とクイレルwithヴォルさんの姿を発見して反省し直した。二人の水面下の激しい攻防戦を見届けるという使命を果たさなければいけないのだ。それ以上にハリーの勇姿を見ることも重要だけど。

そして、無事に席に腰掛けた瞬間、私は気付いてしまった。クイレルwithヴォルさんのマントは、どうやって燃やしたら良いだろうか。どのタイミングで席を離れ、ハーマイオニーに見つからないようにマントを燃やせばいいだろう。悪戯グッズを使えば出来る？

いや、誰かしらに投げ込むところを見られてしまうだろう。要検討だ。検討時間は約一分。

……よし決めた。これで行こう。

第11話 クイドイツ

試合が始まった。ハリーは体を慣らすために辺りを飛び回っていた。クイレルwithヴォルデモートの方を伺うと、ハリーに視線を固定したまま動かない。そろそろ始まるだろう。

ハリーがスニッチを見つけて今にも飛び出そうとした瞬間、それは来た。

箒がブンブンと動き回り、ハリーを落とそうとする。

「どうしたのかしら？」

「原因を特定して来ます」

スーザンの疑問に対し、間髪入れずに答えると、私は席を立ってダッシュで教員席へ向かう。途中でばったりとハーマイオニーに会った。

「リズ！ スネイプの仕業よ！」

「そうですか。成敗にはお伴します」

何とすんなり付いていくことが出来た。今朝の日刊預言者新聞を確認してくれば良かった。きっと今日の占いの欄は、さそり座が一位だっただろうに。

『「ラカーナム・インフラマレイ、服燃えよ！」』

随分と凝った魔法を使うな。燃やすだけならインセンディオで充分だろうに。というわけで、

『「インセンディオ！」 おーっととととと、スネイプ先生にやるつもりがクイレル（withヴォルさん）先生にやってしまったー。クイレル（withヴォルさん）先生のマントも燃えてしまうー』

「リズ、何やってるのよ。行くわよ」

ハーマイオニーの目はスネイプ先生のマントに固定されていて、クイレルwithヴォルデモートのマントが燃えていることに気が付いている様子はない。スネイプ先生とクイレルwithヴォルさんも、呪文の方に気を取られている。君達は揃いも揃って自分の興味あることしか考えないな。

まあ、気付かれていないことを良いことに、私達は素早く撤退した。

「で？ 原因はわかった？」

「何というか……一心同体の二人組ですね」

「何よそれ」

「さあ？」

間違つてはいないはずだ。

それはともかく、呪文による妨害が無くなり、再び元の体勢に戻ったハリーは、今までの時間を取り戻すべく辺りを見回し、

——シユツ!!!

風になって飛んで行った。本当に残像しか見えない。こんな天才をファイアボルトに乗せたら、それだけで結果が決まってしまうだろう。

何が言いたいか。それは、ハリーがスニッチを飲み込むという大きな伏線を見ることが出来なかったということである。

競技場が一旦静まり返った後、ハリーがスニッチを吐き出した。

「ハリー・ポッターがスニッチを取った————!!! グリフィン
ドールの勝ちです!!!」

スリザリン側が何やら抗議しているが、それもすぐに止むだろう。

既に『賢者の石』のハロウィーンは無事攻略できた。残りの大きなイベントは『みぞの鏡』の『クリスマス』、『賢者の石防衛戦』程度。特に関わらなくても原作通りに進行するはず。私は魔法の研究と悪戯グッズの改良に専念しよう。

第12話 必要の部屋

ハロウィーンとクリスマスの間はこの時期はクイディッチ・シーズ
ンだ。私的にはハツフルパフを応援に行ったり、たまにハリーの勇姿
を見に覗いたりする程度のこの時期は、何かにハマるのにうつつつ
だ。

さて、『ハリー・ポッター』は、初期はそこまでもないが、魔法に
よる戦いが登場する。私はその戦いに巻き込まれるのは、多分六年生
の最後に起きる、ダンブルドアが死ぬ戦いだろう。ダンブルドア軍団 D Aには声が
掛かるなら参加したいとは思うものの、一緒に魔法省に押しかける程
仲のいい関係にはならないだろうから、回避不可能な六年生まで私は
一応安全なのだ。

しかし、考えてみれば、四年生ではヴォルデモートが復活してしま
う。そこから魔法界は、水面下とはいえ激しい戦いが行われる危険な
場所になる。何かの拍子に自分や友達が死んでしまったらたまらな
い。私は自分で訓練することにした。

必要の部屋。

必要の部屋とは、バカなバーナバスがトロールにバレエを教えよう
としているタペストリーの向かい側の壁に、人知れず存在している部
屋だ。その部屋の前を『呪文の訓練が出来る場所が必要だ』と念じな
がら三回往復する。すると、そこには願い通りの部屋が現れるのだ。

部屋を出現させるのに成功した私は、羊皮紙に習得すべき呪文を書
き留めた。

・ 武装解除呪文

・ 盾の呪文

・ 守護霊の呪文

欲張りのし過ぎは良くない。まずはこの三つを習得しよう。

そうは言っても、武装解除呪文は二年生、盾の呪文は三年生、そし
て守護霊の呪文はベテランの闇払いでさえ使うのが難しい呪文だ。

選択は欲張っているが、少なくとも武装解除は今年度中に使い物になつて欲しい。

『エクスペリアームス、武器よ去れ』！」

特に何も考えずに呪文を唱え、杖を振ってみると、当たり前だが何も起こらない。今度は、いつの間にか現れていた的に当てようと、赤い閃光が的に向かつて一直線に飛んでいく様子をイメージし、杖を振る。

『エクスペリアームス』！」

パツと閃光は出たが、上手く的に当たらない。

的に向かつて当てるのが先か、それとも命中率は低くても呪文の効果が出るようにするのが先なのかはわからない。手探りでいくしかないのだが、的に当たらないことには効果が出ているかわからないので、ひとまず十中七、八は当たるように練習する。

それが完了したら、次は武装解除をイメージしながらの練習だ。

『エクスペリアームス』！」

的の持つ杖がパツと弾かれるように飛んだ。

「魔力を強くしてみたらどうなるか……。『エクスペリアームス』！」

杖に魔力を流し込むイメージでやってみると、
バーーン!!!

的が吹っ飛んで壁に当たり、壊れた。

「あれ？　強過ぎたのかな？　『レパロ、直れ』」

気を取り直してもう一度。

『エクスペリアームス』！」

手加減をしつつやってみると、今度は成功した。

「次は、精度と命中率を上げないと」

こればかりは、何度も繰り返し練習するしかない。

こうして、必要の部屋は私の第三の家になったのだった。

第13話 ニコラス・フラメル

「ねえリズ、ニコラス・フラメルって知ってる？」

何故このようなことになったのか。

ハグリッドがニコラス・フラメルのことを漏らしたため、好奇心旺盛な^{ハリー}H・R・^{ロン}Hが図書館で調べているというのはわかる。うん、ここまででは。

しかし、何故私が尋ねられているのかわからない。

「リズってほら、よく図書館にいるじゃない？ だから、何か知ってるんじゃないかと思って」

確かに知っている。私は不老不死に興味ないので錬金術方面の本は読んだことがないが、生まれた時から知っている。生まれる前もだけど。

考えても始まらないので、私は自分への妥協案を出した。私が選んだのは、教える、知らないふりをするのどちらでもない。三つ目の選択肢、ボケる、だ。

「確かにニコラス・フラメルのことは知っています」

「本当!？」

「はい。しかし、少し時間を下さい。私も詳しいところまでは理解していないので、それを調べてから——」

「いいのよ。どんな人なのか教えてくれれば」

「いえ！ 中途半端な知識を教えるのは良くないことだと亡くなったおばあちゃんに言われました。きつちりお教えします」

私は言いたいことだけ言うと、バツと図書館へ走って行った。

多分、長い間隠しておくのは無理だろう。だから、詳しく教えて恩を売っておこう。

*

昔、『硫黄』と『水銀』を融合すれば賢者の石が出来ると考えられていた。しかし、どのような手段を使っても賢者の石が誕生することはなく、当時の錬金術師達は考えた。曰く「第五の元素を使えば融合出来るのではないか」と。もちろん第五の元素は見つかるわけがなく、

失敗に終わったと言うが。

しかし、私には第五の元素の正体がわかった気がするのだ。それは、『魔力』。水、火、風、土に続いて魔力があったとしても、魔法使いからしたら違和感はない。そもそも元素とは、万物の元となるものなのだ。魔力が元になって魔法は使えるのだし、そんな雰囲気もするし、この仮定で問題は無いだろう。

しかし、ここで問題が発生する。魔力の操り方は禁書の棚の本にしか載っていない。どう考えても独学で出来るわけがないのだ。

そこで私は考えた。誰にも見つからずに禁書の棚に忍び込む方法を――。

*

「――以上がニコラス・フラメルに関する説明となります」

「リズ、話が長いよ……」

「で、リズ、お願いをひとつ叶えれば良いのよね？　何を頼みたいの？」

そう、私はニコラス・フラメルのことを教える条件として、ひとつ『お願い』を叶えて欲しいと要求したのだ。私がお願いしたいのは、『一晩透明マントを借りること』である。クリスマスにハリーが手に入れるはずであるため、それを借りて禁書の棚に忍び込む算段であった。

「いえ、お願いは後に取っておくことにします。安心して下さい、あなたがたが不利益になることでは無いと思いますから」

「なら良いけど……。ありがとう、リズ」

去っていく^{ハリー}H・R・^{ロン}H^{ハーマイオニー}の背中を見つめながら、私は興味本位で賢者の石を生成してみることに決めたのだった。

第14話 透明マント

クリスマス休暇。ハツフルパフ生で今年ホグワーツに残ったのは、私ひとりだけだった。

だから。

「あなたはハツフルパフ生でしょ！ 寮には入れないわよ！」

「そんな堅いこと言わないで下さいよ。クリスマスじゃないですか」

「確かにクリスマスだけどそれは関係な——」

『『グレイシアス』』

既に私の十八番となっている呪文で、グリフィンドール寮を護る絵画、『太った婦人^{レディ}』を凍らせていく。

「ちよ、やめなさい！ 濡れちゃうわ！ わかった、開けるから早

く溶かして！」

「ありがとうございます」

こうして私は、グリフィンドール寮への潜入に成功した。

談話室でクリスマスプレゼントを開けているハリーとロンに声を掛ける。

「メリー・クリスマス。プレゼントはたくさん届いたようですね？」

「メリー・クリ——って、リズ!? ここはグリフィンドールだよ!?

何で居るのさ!？」

「クリスマスなんだし良いじゃないですか。ハツフルパフは私以外帰っちゃってて寂しいし」

「あ、リズのプレゼントあった」

ハリーが声を上げた。

ガサガサなる包装紙を剥がし、出てきたのは。

「ピッキングセット？」

「はい。お役に立つかと思って」

「……ダーズリーのところに戻ったら、大活躍しそうだ……」

それを見越して贈ったのである。

「僕のは……」

「悪戯道具セットです。目には目を、歯には歯を、悪戯には悪戯を、と

いうことで」

「フレッドとジョージに使う前提なのか……」

「いえ。ハリーにでも良いと思います」

「良くないよ!!」

慌ててハリーが叫んだ。

「冗談です」

ハリーは最後のプレゼントを開けた。

「何だ、これ？」

流れる水のような生地で作られた、マントのようなもの。そう、

「これ、透明マントだ……」

ロンの言う通りである。

ハリーが羽織ってみると、見事透明に。実物を見ると、やはりすごいと感じる。

「ハリー、少し貸して下さい」

「いいよ。けど、何するんだい？」

「本物かどうか調べるんです」

「本物？」

「はい。『吟遊詩人ビードルの物語』に出てくる、『死』の透明マントかどうかです」

杖をマントに当て、呪文を詠唱する。この呪文は、魔法界の童話に出てくる透明マントかどうか判断するための呪文ではない。マントの仕組みを調べるための呪文である。

「……わかりませんね。しかし、デミガイズの毛で作られたチープな透明マントではないと思います」

「ハリーすごいよ！　でも、誰から贈られてきたんだろう？」

「答えはこれに書かれているのではないでしょうか」

さつきはらりと落ちたメモをハリーに渡す。ハリーはそれを読むと言った。

「これは父さんの形見みたいなんだ。賢く使いなさいって」

「へー」

「あ、そうだ。思いつきました」

「え、どうしたんだい？」

私は出来る限り今思いつきました風にハリーに向かって言う。

「折角の透明マントですし、ハリー、それで禁止の棚に忍び込んでもらえませんか？」

第15話 みぞの鏡

・ハリー side

リズにニコラス・フラメルについて教えてもらうことへの条件は、一つリズの頼みを聞くことだった。だから僕は、こうして透明マントをかぶり、夜のホグワーツを歩いている。

リズの指示は、こうだ。まず禁書の棚に忍び込み、『魔力と魂』という本を探す。見つけたらそれを急いでリズの袋に入れる。

リズから預かった袋は巾着程度の大きさで、到底本が入るとは思えなかったが、何とかっていう呪文が掛けてあるらしく、簡単に言えば『四次元ポケ○ト』のようになっていっているという。本を入れた後でも薄っぺらな状態が保てるから、それをすぐにポケットへ突っ込めとのことだった。そうしたら何をしても良いという。折角だから、ニコラス・フラメルについて調べてみようかな。

ちなみに、ロンには今日は遠慮してもらった。初めてマントを使うから使い勝手がわかりにくいし、今日は僕一人で試してみることになったのだ。……本音は、父さんの形見を最初に使うのは僕が良かったというのもあるけど。

図書館に到着した。

リズにはあらかじめ場所の見当がついていたようで、指示通りの棚に行き、本を探す。暴れ出したり叫んだりする本もあるかもしれないらしいので、極力関係ない本には触らずに探すこと、数分。目的の本を発見した。それを袋に入れ、ポケットへ押し込むと、僕はランプを持ち直した。ニコラス・フラメルの錬金術の本を探すためだ。

今わかっていることは、四階の右側の立ち入り禁止の廊下にある部屋にいる、三頭犬フラッファイは、ニコラス・フラメルの賢者の石を守っているということだ。ハグリッドから漏れ聞いた情報によると、他の先生が仕掛けた罫もあるようだ。

スネイ——

バタン！

どこかでドアが閉まる音がした。驚いた僕は、机に置いていたラン

プをひっ掴もうとしてなぎ倒してしまう。

カシャン！

静かな図書館に、ガラスが割れる音が響いた。間髪入れずに管理人のフィルチの猫、ミセス・ノリスが本棚の向こう側から現れる。ミセス・ノリスはこちらをジッと睨んだ後、素早く身を翻してかけて行った。きつとフィルチに報告に行くのだろうか。

ミセス・ノリスがいなくなった瞬間、僕は走り出した。図書館はとても広い。一時的に隠れることの出来る場所はあるだろう。

「——わかつているだろうか？」

「な、何のことやら」

ねつとりした低い声が聞こえた瞬間、僕はピタリと足を止めた。スネイプがクイレルを脅している。僕はスネイプに気が付かれないうちに、そつとドアが半開きになっている部屋に滑り込んだ。

部屋の中には、ひとつの大きな鏡が置いてあった。透明マントを脱ぎ、鏡の目の前に立つと、鏡に二つの人影が現れる。

一人は、くしゃくしゃの黒髪にハシバミ色の目をした男性。もう一人は、赤毛に緑色のアーモンド型の目をした女性。僕には見覚えがあり過ぎる人々だ。

「母さん……父さん……！」

後ろを振り返ってみても、父さんと母さんはいない。僕はそつと鏡に触れた。

第16話 魔力

私はハリーに禁書の棚から取ってきてもらった本、『魔力と魂』の解説を終え、実践の段階に入っていた。

魔法使いは、空気中に存在する魔力を体の中に取り込み、魔法に変換することで魔法を使う。空気中の魔力を自分の魔力——エーテルに変換する器官がどこかにあるようだが、今は関係ないので置いておく。魔力器官は人によって様々な大きさであり、その大きさによって所謂『魔力の強さ』が決まるようなのだ。

間違いなく純血の家系とされる聖二十八一族とマグル生まれの魔力器官を、特殊な検査で比べてみたことがあるそうだが、結果は純血であろうとマグル生まれであろうと変わらず、個人差があるとのこと。しかし、魔力器官の大きさは遺伝することが多いらしく、純血の方が魔力器官が大きい確率が高いという。

さて、『魔力と魂』には、魔力器官の大きさを調べる簡易的なテストの仕方が載っていた。大雑把にしかわからず、間違っている可能性も高いようだが、とにかくやってみよう。

十分後。

上から、SS、S、A、B、C、D、E、Tとランクがある中で、私は下から三番目のDであった。Tじゃなかっただけマシだ。しかし、これからは魔法の使い方についてよくよく考えなくてはいけない。何が言いたいかという点、大きな魔力を必要とする魔法を使うには工夫が必要だということだ。

私は杖に魔力を溜めておくことを思いついた。まずは意識的に魔力を取り込む練習をしてから、その魔力の流れを杖に流し込む。そして魔法を発動させないまま、また新たに魔力を取り込み、杖に流し込む。

やってみて気が付いたのだが、これはかなり大きな魔法を使うことができる代わりに溜めの時間が非常に長くなる。実際の戦場では、溜めを行なっている時間は自分の身を守ることができない。これは最終手段に取っておいて、また別の方法も考えなくてはならない。

次に思いついたのは、空気中の魔力を上手く使うことだった。空気中の魔力を集め、その魔力に少しの自分の魔力^{エーテル}を注ぎ込むことで、自身はほとんど魔力を使うことなく魔法が使える。理論は完璧なので、まずは魔力をどう集めるかを考えないと。

呼び寄せ呪文を試してみたが、魔力は呼び寄せられないようだ。となると、魔力だけを集めるというのは難しいかもしれない。そこで、空気ごと魔力を集めてみることにした。しかし、空気を操る呪文は存在しない。よって作ることに決めた。

『ハリー・ポッター』の呪文は、基本的にラテン語である。『空気』をラテン語に直すと……『アエール』。はい呪文完成。だが、呪文を作っただけでは魔法は使えない。それがハリポタなのだ。

どの呪文にも魔法式が存在する。呪文が難しければ難しいほど魔法式は複雑になり、多くなっていく。逆に言うと、簡単な呪文は単純な魔法式で済むと言うことである。例えば『ルームス』などは、光系の情報を組み込んだだけの魔法式になっている。

空気……というよりも、『気』を操る呪文は、最低でも『気』、『操る』の情報は必要になるだろう。後は試行錯誤を繰り返すのみだ。

第17話 決意

気が付いたらクリスマス休暇終了目前になっていた。何とか呪文は完成させることができたが、無言でかつ素早く『気の呪文』を使う練習はなかなか進まない。空気がちゃんと操れているかどうか、感覚以外での確証がないからだ。本当に使うときは、別の呪文と並行して使わなければいけないのに。

ああ、そういえば賢者の石を作ってみよう的なことを考えていたのに、何でこんなことになってるんだろう。しかも魔力自体を操る練習もしてないし。やりたいことがあるのは嬉しいが、多すぎるのも困りものだ。

まず気の呪文がもう少し使えるようになってから賢者の石に役立つようなことを『魔力と魂』から抜き出してきてそうだいつ本を返そう魔力を操るのは気の呪文が終わってからでいいよねそういえば授業の予習もすっかり忘れてた少なくとも魔法薬学と変身術はやっておかないとああ忙しい忙しい——

頭の中がこんがらがってきたので、とりあえず紅茶を飲む。うん、おいしい。

考えてみれば、私が苦勞して魔法の勉強をしているのは、全てハリーのためなのだ。ハリポタファンの一人として、セドリックにもシリウスにも死んでほしくない。そのために私は努力しているのだ。

魔法界が笑顔溢れるステキな場所になってほしい。そして、それに少しでも貢献したい。——それが私の一番の願いであり、希望であり、夢なのだ。

魔法を研究して楽しむのもいい。しかし、それより先にやっておくべきことがある。

今年。今年は、何もしなくてもまだ大丈夫。しかし、来年はそんなわけにはいかない。来年は、ホグワーツの創設者の一人、サラザール・スリザリンが作り、隠した『秘密の部屋』が開かれ、スリザリンの怪物であるバジリスクが解き放たれる。そして、ミセス・ノリス、コリン・クリービー、『ほとんど首なしニック』、ペネロピー・クリア

ウォーター、そしてハーマイオニーとジャスティンが石にされる。死なないとはいえ、石になっていた時間は戻って来ない。何としてでも救わなくては。

とりあえず、一年生が終わってしまう前に、三階の女子トイレに住み着くゴースト、『嘆きのマートル』と接触しておくべきだろう。そして、原作では石になってしまった人達が石にならないように、光の操作の呪文を完璧にし、蛇を見れないよう呪文を掛けておくべきだろう。

失敗は許されない。彼らが石になったら悲しむ人がいる。出し惜しみはできないのだ。とにかく、図書館へ行こう。

——私の、夢のためにも。

第18話 悩みのお茶会

休暇が終わり、再び勉強に追われる日々が始まった。

そんな中、私は今、何をしているか。——答えは、厨房にお邪魔している。

この前、私の生きる目的を確認したものの、ずっと研究を続けていては体を壊してしまうし、すぐ煮詰まってしまうだろう。だから、適度に息抜きをした方が効率がいいのだ。

屋敷しもべ妖精に無理を言つて、今は使っていないという厨房の一角を借り、レッツ・クッキング。濃厚でしっとりしたチョコブラウニーを作る。焼き上がり、粗熱がなくなつてから食べやすい大きさにカットし、紅茶を淹れる。出来上がったものに保温呪文を掛け、厨房から近いハツフルパフ寮の談話室に運んだ。

今日は休日なので、「たまにはみんなでお茶会でもしませんか?」という私の言葉に賛成し、いつメン+αが集まっていた。

「お待たせしました。チョコブラウニーはいかがですか?」

「あら、それ手作りなの?　すごいじゃない」

「おいしそうですね。さっそく頂きましょうか」

スーザンとジャスティンが言いながら、ブラウニーと紅茶を配るのを手伝ってくれる。ちなみにここに集まっているのは、スーザン、ジャスティン、ザカリアス、アーニー、ハンナである。

紅茶を口に含んで湿らせてから、ブラウニーを一口。うん、おいしい。

周りを見ていると、やはり皆幸せそうな顔をしていた。やっぱり、魔法界が笑顔溢れる場所になるには、スイーツが必要みたいだな。カフェを開いてみるのはどうだろう。もちろん、やるからには中途半端には終わらせないが。

そう言ってみると、なぜかみんな賛成してくれた。

「リズのカフェなら喜んで行くわ。リズが作るものって、心が暖かくなるのよね」

「リズなら魔法界一おいしいケーキを作れるんじゃないか?」

とまあこんな感じである。

お世辞が嫌いな私でも、身近な友人からの褒め言葉はやはり嬉しい。将来やりたいことリストにパティシエを入れておくことに決めた。

よし、息抜き完了。研究に戻ろう。

・スーズン side

「……チョコブラウニーが売り切れるなり、すっ飛んで行ったわね、あの子」

あの子とはもちろん、リズのことである。

リズは結構背が低いいため、私達三人の中ではかわいい妹のような認識だ。人見知りで知らない人とは思いつ通りに話せないことがわかっていいるから、余計に無理していかないかと心配にもなる。私達はホグワーツの中で誰よりもリズと仲が良いと自負しているが、それでもリズの親友と名乗れるほどではない。リズは私達に当たり前のように敬語を使っているが、リズの独り言は普通にタメ口だ。私達に気を使っているのか、それとも距離を置いているのか……。きつと両方だろう。あの子は、私達に言えない何かを隠している。そして、何かを見据えて行動している。

リズは頭が良い。きつと、私達が一生かかっても辿り着けない高みに向かって一生懸命進み続けているのだろう。しかし、それを私達が知ることはない。

リズが、本当の意味で心を許してくれることはない。

「……リズのことを見守るしかないでしょうね」

何となく、私が考えていることがわかったのだろう。ジャスティンが、そう返してくる。

ザカリアスも、リズの魔法によって冷めることのない紅茶を口の中に流し込み、ぽつりと呟く。

「一言、相談してくれても良いのにな。悩んでいるなら」

寮の部屋で、リズが何やら試行錯誤を繰り返していることは、私達の中では周知の事実だ。

「とにかく、私達も出来ることをやりましょう」

第19話 ドラゴン騒動 I

「リズ、ドラゴンよ」

図書館で本を探していると、ハーマイオニーがドアップになって報告してきた。うん、ニコラス・フラメルのことがあつたから覚悟はしていた。していたけど、何で私に聞くの？

ため息をつきつつ、私は後ろの方の本棚を指差した。

「隣の通路の左の棚、上から三段目、右から三冊目。『ドラゴン全集』ドラゴンの孵し方から老後まで」

それだけ言うと、面倒めんどうごとに巻き込まれないようにすぐに図書館を後にした。

・ハーマイオニー side

「……と言うわけで、リズの言う本を借りてきたわ」

私はハグリッドの小屋で、ハリー、ロン、ハグリッドを前にして言う。

ロンが私から本を受け取り、表紙を開いた。

『ドラゴン全集』迷いドラゴンの飼い慣らし方から老後まで』

「表紙と題名が変わってないか？」

「気にしちゃダメよ。次のページに行きましょう」

ページをめくると、目次になっていた。

『一、そもそもドラゴンとは

二、ドラゴンの孵化の仕方とコツ

三、ドラゴンの種類と特徴

四、ドラゴンについての法律の抜け道

』

「——って、抜け道!？」

「マジか。抜け道あるのかよ」

「というか、この本の作者って誰なんだ？」

ハリーの疑問に答えようと、ロンが本を閉じて表紙を見る。そして、一瞬目を瞑った後、一箇所を指差した。

「どうしたのよ?」

「見ればわかるさ」

その言葉通り、私とハリーとハグリッドは著者名を見、目を瞑ってこめかみをぐりぐりした。

『ミステリズ・ガール著』

ミステリズ・ガールなんて聞いたことがないが、少し考えればすぐわかる。

まず、この単語は元は『ミステリアス不思議・ガールちゃん』だったのだろう。しかし、ミステリズになっている。そして、私達にはリズという友人がいる。これの著者は、たぶんリズだ。

「そういえば、私は「ドラゴンよ」って言っただけなのに、すぐにこの本を持っていくように教えてくれたわね」

「まさに不思議ちゃんだな。よくわかってる」

「とにかく、読み進めよう」

まだ目次を見ている最中だった。もう一度、続きを読んでいく。

五、もしもパブでフードをかぶった怪しげな男に賭けで勝ち、違法にドラゴンの卵を手に入れたら

「ブフォツ!!」

突然、ハグリッドが口に含んでいたお茶を噴き出した。

「ハグリッド、大丈夫?」

「い、いや、問題ねえ。ただ、あまりにも心当たりがあったもんで……」

「まさか、パブでフードをかぶった怪しげな男に賭けで勝って卵を手に入れたの?」

ハリーが、炉にかけてあるドラゴンの卵をチラッと見ながら聞く。

「ま、まあ、そうとも言うな」

「過去のことを振り返ってもしようがないわ。これを読みましょう」
『五、もしもパブでフードをかぶった怪しげな男に賭けで勝ち、違法にドラゴンの卵を手に入れたら

この章を読んでいるあなたの元にある卵は、もう孵化寸前か既に孵化した状態でしょう。この時点では、もう既に卵の状態でドラゴンを

手放すことは出来ません。孵化した赤ちゃんドラゴンが手元にある前提でお話します。さらに、ドラゴンがノルウエー・リτζジバツグだと仮定した上でお話しさせて頂きたいと思います。

「思いつきその通りじゃないか」

「黙って、ロン。とにかく読まなきゃ」

ノルウエー・リτζジバツグに限らず、ドラゴンの赤ちゃんの成長はかなり早いです。具体的な例を上げると、ホグワーツの『禁じられた森』の側に建つ家くらいの大きさに成長するのに二週間もかかりません。その家が木の家だとすると、たぶんその頃には焼け落ちていくとでしょう。

「だってよ、ハグリッド」

ドラゴンを無断で飼うことは一七〇九年のワーロック法により、違法です。まず、これを読んでいるあなたは相談できる相手がいなくて困っているでしょう。しかし、ご安心を。この『ドラゴン全集』迷いドラゴンの飼い慣らし方から手放し方まで『があれば、きつと何とかなるはずですよ。』

「急に本の宣伝を始めたな」

「しかも題名がまた変わってるし」

ドラゴンの卵を手に入れたあなたは、ドラゴンへの愛が溢れて止まない優しい方なのでしょう。きつと、『禁じられた森』の奥深くに住むと言われる人狼に捧げるような残酷なことは出来ないはずですよ。

「うん、その通りだ」

ならば、処rげふんげふん手放し方として、最適なものがあります。

『今処理って言いかけたよな』

『すなわち、『食べる』という手段です。』

「「へ？」」

『まず、ドラゴンの毒と血を抜きます。そして——』

「うがあああああああ!!!」

「ハグリッド!! ショックなのはわかるけど、机に頭を打ちつけるのはやめよう!! 壊れるから!!」

「さすがに食べるのとはどうかと思うのだけど」

『そうですか? 見ず知らずの人に食べられるよりは、愛する主人に食べてもらう方がノーバートにとっても良いと思っただけですけど』

「ドラゴンの名前まで予測してたのね。あなた何者?」

『ただの本です』

『著者の話をしてるのよ』

『ミス터리ズ・ガールと申します。ちなみに出版社は『虎七味社』です』
「聞いたことないわね」

『私がごく最近作りましたから』
「ハーマイオニー、何で本と普通に会話してるんだ! 手伝ってくれ!」

『ああ、頭部に強い衝撃を与えるとハグリ——ドラゴンをこよなく愛するあなたにはちょうど良いと思いますよ』

「やってみるわね」

グアン!!!

「……ふう。ありがとう、ハーマイオニー。ちったあ落ち着いた」

「そうみたいね。一応、他の方法が載っているかもしれないから、続きを読んでみましょうか」

「そうだね。リズ——じゃない、これはミス터리ズ・ガールのブラックジョークだったのかもしれないし」

第20話 ドラゴン騒動 I I

・ハーマイオニースide

「さて、動物をこよなく愛するあなたが落ち着いたところで、『ドラゴンを食べる』という手段が却下された場合の処理の仕方をご紹介しましょう」

「今度こそ処理って言い切ったな」

「体が大きく獰猛で、一般的には『怪物』と呼ばれるとっても愛らしい動物をこよなく愛するあなたの友人の中には、ドラゴンに関わりのある仕事をしている方の知り合いがいらっしゃるのではないでしょうか。その方に手紙を出し、真夜中に天文台で箱に詰めたノーバートを引き渡すのがよろしいかと思えます。」

「僕の兄のチャーリーだ。チャーリーはドラゴンに関係のある仕事をしてる。チャーリーに手紙を出そう」

「そうね。ハグリッドもそれで良いわよね？ ドラゴンを食べちゃうわけにはいかないし」

「ああ」

「さすがにドラゴンを食べるといふ手段は取りたくないのだろう。ハグリッドはしぶしぶ頷く。」

「解決策が見つかって、私達は舞い上がっていたのかもしれない。だから、最後に書かれている一文を気にも留めなかった。」

『天文台から寮に戻る際は、透明マントをお忘れなく。』

この、大切な一文に。

*

「——っていうことがあったのよ」

「寮からは一人五十点、計一五〇点の減点。さらに、後日に罰則もあり、ですか」

『ドラゴン全集くドラゴンの孵し方から老後までく』のお陰で、原作とは違ってロンは怪我をせず、一緒に天文台へ行ったようだ。ロンが怪我をしなかったために、ドラコ・マルフォイがこの騒動に関わることも無かったようだが。

とりあえず、天文台で引き渡すところまでは成功したようだが、私の……ミステリス・ガールの最後の忠告までは読まなかったようである。

「そうよ。お陰で私達はグレイレイハツフルの嫌われ者だわ」

スリザリンを除く寮をそのように略すのはいかかと思うが、私は愚痴には付き合う主義なので、とりあえず紅茶を出した。

「ありがとう。……何とか手っ取り早く点数を稼ぐ方法は無いかしら」

「それは難しいですね。けど、それが書いてある本なら知っていますよ」

「本当!？」

「ただし、薦め難い本ですが」

「それでも構わないわ!」

ええ……。本当に薦めたくないんだけどなあ。そこまでして名誉挽回したいか。ならいいか。

「手前から二番目の通路、マダム・ピンス側の本棚、一番下の段の左端。『スクイブのためのクイックルスペル解説本』の隣にある『ホグワーツにおいて点を荒稼ぎする方法く絶体絶命編く』がよろしいかと。ただし、実践できるとは限らないですけどね」

私は大きいため息をつく、司書のマダム・ピンスに見つからないうちに紅茶を片付け、図書館を後にした。

・ハーマイオニー side

あつた。出版社は……『虎七味社』で、著者はまた『ミステリス・ガール』ね。どれどれ……。

一、教師に錯乱の呪文を掛ける。二、教師に服従の呪文を掛ける。三、脅す。つて、無理に決まってるじゃない。リズーーーーーッ!!!

・ s i d e o u t

だから言ったでしょ、オススメ出来ないって……。

第21話 一位なハツフルパフ

ハーマイオニーが言っていた通り、三人はグリフィンドール、レイブンクロー、ハツフルパフ一の嫌われ者になっていた。レイブンクローとハツフルパフからも嫌われているのは、スリザリンが寮杯を手に入れないということを楽しみにしていたからだろう。まあ、温厚なハツフルパフなので、そこまで悪口も言わないようだが。

仕方がない。スリザリンを追い越すほどの点を私が取れば、ハリー達への悪口なども少しは収まるだろう。一肌脱ぐか。

具体的に何をするかというと、

- ①授業では秒速で手を挙げて点をもらう。
- ②学校中を綺麗に掃除する。
- ③積極的に先生の手伝いをする。
- ④溜め込んでいた授業外のレポートを、私に害のない範囲で提出する。
- ⑤トレローニー先生に「……(ボソツ)」しつつ煽てまくる。ちなみにインペリなんかではなく、コンファンなんかなので安心して下さい。

一週間後。

「マジかよ……。ハツフルパフが一位になってるし……」

ザカリアスが大広間の脇に飾られている砂時計を見ながら呟いたのに便乗し、私も砂時計を覗き込む。

寮の点数は、砂時計にもついている宝石の量でわかる。グリフィンドールはルビー、レイブンクローはサファイア、スリザリンはエメラルド。原作には書いていなかったが、ハツフルパフはトパーズのようだ。

ザカリアスの言う通り、トパーズ<<<エメラルド<<サファイア<<ルビーになっていた。ちよつとやり過ぎたか。

「リズー」

名前を呼ばれたので振り返ると、ハーマイオニーが『ホグワーツにおいて点を荒稼ぎする方法<<絶体絶命編<<』を手に目の前に立っ

た。ハーマイオニーの登場にザカリアスがあからさまに好ましくない表情を浮かべたので、私は点数を見ている人全員に聞こえるように言う。

「おはようございます、ハーマイオニー。見ての通り、スリザリンが優勝出来る確率はかなり減ったようですね。あなたが責められる必要も減ったのでは？」

「え？ ええ、ええ、そうかもしれないわね……」

ハーマイオニーが困惑したように言う。たぶん、ハーマイオニーは私……誰かが点を荒稼ぎした方法を問い詰め……知りたいだけで、自分のことは全く考えていなかったようだ。

私の言葉で周りは納得したような表情を浮かべ、朝食をとり到大広間へ向かった。この話が広まるといいんだが。

そう考えていると、スーザンが私の肩をポンと叩く。

「この話、広めておくわね」

さりげなく読心術擬きを披露したスーザンに呆然としつつ、私はハーマイオニーに引つ張られるままにどこかへ向かった。

*

「ハーマイオニー。朝食前なので短く簡潔に」

「あなた違法なことやってないでしょうね？」

「やってないです失礼ですね」

トレローニー先生に錯乱の呪文は掛けたが。……いや、なんでもない。忘れて。

錯乱の呪文は違法ではないので悪しからず。

「でも……。こんなに一気に点を稼ぐなんて、どうやってたら……」

「あの、なんで私がやった前提で話してるんですか？」

「ハツフルパフにあなた以外でこんなことする人がいる？」

「そりゃ一人くらいは………いるでしょう」

「その一人があなたなんじゃないかしら？」

上手いこと言われてしまった。

「違法なことしてないのね？」

「はい。信じてもない神に誓ってやっていません」

「信じてないなら誓う意味ないじゃない……。まあ、信じるわ。あと、」

ありがとう。

それだけ言い残して、ハーマイオニーは去っていった。

……。さて、朝食を食べて、授業の前に少し研究を進めましょうか。

第22話 厨二病患者の対処法・理論編

気の呪文を練習するときは、紙吹雪を撒いてから呪文を使えば良いのでは。——という天からの声が聞こえたので、実践してみることにした。

結果。成功した。自分でもびっくりするくらいに空気の操作が出来ていた。おかしーなー私魔法ランクはDなのにー。

よくよく考えてみると、私は操作系の魔法が得意なのかもしれない。なら、早速実践に移ってみよう。

『マジカルポア・フリペンド、魔力よ撃て』！

黄色の閃光が一瞬で的を貫いた。

ハリーは赤。ヴォルデモートは緑。それぞれが寮のシンボルカラーの呪文を得意としている。そして私はハッフルパフ、……黄色。

基本的に争いが嫌いな私ではあるが、これが戦いにおいて私の十八番となる呪文なのかもしれない。

だって、この魔法にはほぼ私の魔力^{エーテル}は使われておらず、九割が空気中の魔力で構成されている。さらに、呪文は回転をかけつつ一直線に進んでいた。ここまで出来て、どこが十八番じゃないんだろうか。

……『吸収呪文』を練習しようか。

* 学年末試験直前につき一日二十三時間体制で勉強中。

* 学年末試験中につき全力で解答中。

* 学年末試験終了につき総力上げて自己採点中。

・ハリーside

「スネイプが賢者の石を狙っていることは確実だ。そして今日、ダンブルドア先生はいない。賢者の石が狙われるのは今日だ。先生はテストの採点で忙しいだろうから、僕達が食い止めるしかない」

「……そうね、ハリー。でも、待って。リズの協力が必要だわ」

「その通りだ。ハリー、リズにはなんでもお見通しなんだ。もしかし

たら罾のことも知っているかもしれない」

「……仕方ない。本当は秘密にしておきたいけど、行ってみよう」
十分後。

「まさか追い出されるとは思わなかったわ……」

「ハーマイオニー以上に試験に熱心だったなんて……」

「しかも追い返すための魔法が無駄に高度……」

試験の自己採点を図書館でしていたリズは、声を掛けたら顔を上げて聞く体勢になったものの、「賢者の石」と言った瞬間に僕らの体は逆さまに浮かび上がり、図書館の外に放り出された（床にはクツション呪文が掛けられていた）。さらに図書館に入ろうとすると、急に床に一ミリ未満の氷が張られ、滑って進みにくいし、強風が図書館の方から吹いてきて向かい風で中々進めないし、外から声をかけようと口を開いた瞬間に手作りと思われるマフィンが放り込まれるし、散々だった。ちなみに、強風が吹いてきたときに『虎七味社』の本が一冊飛ばされてきたので、ロンが死にもぐるいでキャッチしていた。ロン曰く、これが無いと意識ある状態で帰って来れない気がしたらしい。

寮の談話室に戻って虎七味社の『帝王^{ザオ}とか名乗^ルる厨二病患者^トへの対処法①』を読む。著者はやっぱりミステリズ・ガール。

時間がないので目次はさっさと飛ばし、第1章から読む。

『第1章 厨二病患者の実態』

「これは飛ばそう」

『第2章 厨二病患者が必要としているもの』

「賢者の石だな。これもパスだ」

『第3章 厨二病患者は寄生虫であった!』

「ミステリズ・ガールは何を考えているのかしら。ザ・クイブラーになりかけてるわ」

『第4章 厨二病患者の本名と知られざる過去』

「次」

『第5章 厨二病患者の暴走による被害者一覧』

「……」

「ハリー、気持ちはわかる。けど次だ」

『第6章 厨二病患者の協力者は意外と身近にいる!?!』

「スネイプね」

『第7章 厨二病患者を狙う罘』

「これだ。これに賢者の石を守る罘が載っているはずだ」

厨二病患者が必要としているもの①である賢者の石は、たくさんの人によって守られています。罘は、全部で七種類。魔法界では『7』という数字はとても強力だと考えられています。きつとアルバなんとかダンブなんとかさんも、厨二病患者さんと同じ思考を働かせ、罘を七つと決めたのでしょうか。

一つ目の罘は、三頭犬、ケルベロスことフラツファイーさんです。フラツファイーさんは、大変な暴れん坊さんですが、音楽を聴くと眠ってしまうという一面もあります。

二つ目の罘は、『悪魔の罘』と呼ばれる魔法植物です。大変危険な植物ですが、反面弱点は陽の光や炎などと魔法使いや魔女なら簡単に対処出来ます。もし、悪魔の罘に着地してしまつたなどという事態が起きたら、『ルームス・ソレム』という呪文がオススメです。炎の呪文を使用しても対処出来ませんが、仲間が焼け死ぬ可能性もあるのでご注意ください。

三つ目の罘は羽のついた鍵です。この鍵は何千羽が飛んでいます。次の部屋へ進める鍵は一つ。厨二病患者さんの協力者が既に先を行っている場合は、その鍵の羽は折れているでしょう。厨二病患者さんより先にその罘にいる場合は、扉と同じく錆びた鍵を探すといいたいでしょう。ちなみに箒に乗ると、鍵が一斉に襲い掛かってきますが、これを読んでいるあなたがホグワーツで百年ぶりに選ばれた最年少シーカーなら問題ないでしょう。

四つ目は、巨大チエスです。頑張つて！ 今朝の占いによると、チエスが得意な方は自分の身を犠牲にする可能性があるのです、気をつけてね☆

五つ目はトロール。適当に大きな花火でも打ち上げてあげればそつちに気を取られるでしょう。

六つ目はナゾナゾです。知性溢れる魅力的なあなたがいれば大丈夫！ 自信を持って！

七つ目は『みぞの鏡』。アルバなんちゃらダンプなんちゃらさんが用意した、自分の望みを映す鏡です。ただし、この中から賢者の石を取り出すには特別な条件が必要です。百年ぶり最年少シューカーなあなたなら取り出せるかもしれません。

さあ、厨二病患者を厨二病から救うため、行くのだ！ 勇者よ！』

第23話 厨二病患者の対処法・実践編

・ハリサイド

ミステリズ・ガールに応援されてしまった僕達は、急いで賢者の石を守る部屋へ向かった。虎七味社の本は、僕のローブの内ポケットに入れてある。

フラツフィーを音楽で眠らせ、悪魔の罫を呪文で対処し、鍵を捕まえて次の部屋へ行く。巨大チェスはロンが死にもぐるいで頑張ったお陰で怪我一つすることなく攻略できた。トロールは、気絶していたようだがちょうど起き出してきたので、本の付録としてついていた氷のボールを投げると、ボールが破裂して盛大な花火が打ち上がり、その隙に次の部屋へ進んだ。そして、ハーマイオニーがナゾナゾを解き、僕は一人で次の部屋へと進んだ。

「……クイレル先生」

みぞの鏡の目の前に立っていたのは、あろうことかクイレル先生だった。

「僕、あなたは味方だと……スネイプだと、思っていたのに……」

「スネイプ？ 確かに、スネイプはかなり邪魔してくれた。だが、もう遅い。私は賢者の石を手に入れ、ご主人様に差し出す」

いつもどもっているクイレルらしくない、野太い声。

「お前ももうすぐ死ぬのだ。お前の父親と母親のようにな。……ああ、手前の部屋で待っている友人も殺してやろう」

「ダメだ！」

ロンとハーマイオニーを殺させるわけにはいかない。僕は反射的に飛び出していた。杖から飛び出すのは、デタラメな呪文ばかり。クイレルはそれを全て防ぎきった。

「ぬるい」

クイレルが杖を一振りすると、僕は地面に叩きつけられた。

「ぐふっ……」

頭を強くぶつけた。血が流れ出るのを感じる。ああ、僕は死ぬのか……。

「『アバダ——』」

「あ、ちよつと待つて！」

ハーマイオニーの声が聞こえた。

「そつちは行つちやダメだ！」

ロンの声も聞こえる。

「……え？」

二人は手前の部屋で待つていたはずなだけど……。僕はクイレルと顔を見合わせた後、部屋の入り口の方を向いた。

入り口は炎で遮られていたのだが、そちらを見て
……言葉を失った。

*

・ダンブルドア side

医務室で、ハリーに全てを聞いたのじゃが……。

「……歳のせいかな、耳が悪くなったのかもしれない。もう一度説明してくれるかの？」

再び説明を受けたわたしは、当時のハリーと同じく言葉を失った。

ハリーによると、急に炎の壁が二つに割れたかと思うと、そこから一匹の非常に愛くるしいアナグマが出て来たそうじゃ。さらに、その後からはミスター・ウィーズリーとグレンジャー嬢が。それだけでも驚くべき事態なのに、さらに事は起こった。

アナグマがハリーの髪の毛を数本抜いたそうなんじゃ。

そして、痛がるハリーを置いて、アナグマはとことことクイレル先生の元へ向かうと、ぺつと髪の毛を吐き出したそう。ハリーにはリーのアゲの加護がついている。クイレルとヴォルデモートが呆然としている間に、髪が触れた場所から体が焼けていき、ヴォルデモートはクイレルを捨てて煙のような状態でどこかへ逃亡したらしい。

さらに、アナグマはヴォルデモートが消えた事を確認した瞬間、ポンという音を立てて本に戻ったそうじゃ。

その本をグレンジャー嬢から受け取ったが、虎七味社という出版社の『あつたか靴下百選』という本で、アナグマ要素がある部分は時々入っている靴下を履いたアナグマの挿絵くらいじゃったので、わたしは

不思議に思つてハリーに見せてみたのじゃ。そしたらハリーは、元は『帝王ザオとか名乗ルる厨二患者モへの対処法①』じゃつたと言う。一体誰の仕業なんじゃろうか……？

第24話 優勝は。

「二年が過ぎた」

しんと静まり返った大広間に、ダンブルドア先生の声が響く。

「今年の寮杯の結果は、四位、グリフィンドール三一〇点。三位、レイブンクロー四二六点。二位、スリザリン四七二点。一位、ハッフルパフ六三九点」

ハッフルパフから歓声上がる。私が一週間で入れた点数のお陰もあるが、ハッフルパフが優勝出来る可能性があるとわかった瞬間、ハッフルパフ生は取り柄である真面目さを表に出し、積極的に点数を取りに行っていたのだ。その努力が認められる。これほど嬉しいことはない。

ちなみに、私がトレローニー先生に錯乱の呪文を掛けて稼いだ点数は、後からトレローニー先生にお願いしてなかったことにしてもらった。だから、この点数はハッフルパフの実力だ。

「しかし、最近のことも勘定に入れなくてはなるまい」

合計で一七〇点グリフィンドールに入るんだったか。でも余裕で勝てる。全員そう思っているのか、特に表情を変えずにダンブルドアの言葉を待つ。

「近年稀に見る最高のチェスをみせてくれたことに対し、ロナルド・ウィーズリーくんに百点を与える」

……………え？

「次に、火に囲まれながら冷静な論理を用いて対処したことを讃え、ハーマイオニー・グレンジャー嬢に百点を与える」

……………え？

「そして、その強い精神力と並外れた勇気を讃え、ハリー・ポッターくんに百点を与える」

……………え？

「勇気にも色々ある。敵に立ち向かうことも勇気じゃが、味方に立ち向かうにも大きな勇気がある。その勇気を讃え、ネビル・ロングボトムくん……………三十点を与えよう」

ここ数分でグリフィンドールが獲得した点数は三三〇点。合計で、ハッフルパフより……一点多い。

…………… (ブチッ)。

「さて、わしの計算違いでなければ、飾りつけを変え——」

「ダンブルドア先生、ひとつよろしいでしょうか？」

*

・マクゴナガル side

「ダンブルドア先生、ひとつよろしいでしょうか？」

そう言つて立ち上がったのは、ミス・フォーリー。ハッフルパフの優秀な生徒です。

優勝を目前で阻止されたのに怒りを表すのかと思いきや、違うようでした。

「このような形で遮つてしまつて申し訳ありません。もちろん、グリフィンドールの優勝にケチをつける気はありませんからご安心を。……その上で私の質問に答えていただけますか？」

優勝にケチをつける気はないと聞いて、一瞬立ち上がりかけたグリフィンドール生も座りました。

「ミス・フォーリー。今ではないと駄目なのかね？」

「はい。どうしても今お聞きしたいのです」

「……言つてみなさい」

ミス・フォーリーは、いつもの優しい微笑みに強い芯を感じさせる表情で口を開きました。

「グリフィンドールの加点前の点数は三一〇点。追加された点は三三〇点で間違いありませんね？」

「そうじゃの」

「もちろん、ダンブルドア先生は、ハリー達の行動を正当に評価した上でこの点数をお与えになつたのですよね？」

「そうじゃとも」

「グリフィンドール生の今までの努力を遥かに上回る点数を？」

ここまで来て、ミス・フォリーの言いたいことに気がつきました。そう、今回ダンブルドアが四人に与えた点数は、もともとグリフィ

ンドールが稼いだ点数以上のもの。それは、他のグリフィンンドール生がかわいそうなのは、というミス・フォーリーの意見なのでした。」

「正當に評価なさった上での点数ならば、私から申し上げることはありません。遮ってしまつて申し訳ありませんでした」

ダンブルドアの様子を伺つてみると……ダンブルドアらしからぬ、苦い表情を浮かべていました。

宴が始まりましたが、始終何とも言えない微妙な空気が漂っていました。

*

「うぐつ……ひつく、うう……ごめんね、リズ、リズは……ひつく、あなたに頑張つてたのに……」

私の隣で泣いているのはスーザン。私は入学当初から比較的点数を取りに行つていたので知っているスーザンは、たぶん影ながら頑張つていたのだろう。その努力を潰したのは、ダンブルドアだ。私は死後、初めて怒りを覚えた。

「大丈夫です、スーザン。来年は、そうですね……七〇〇点取りましようか」

「……うん！」

「……別に、一点差じゃなくても良かったでしょうに」

ジャステインが呟く。

その通り。

「……まあ、宴を楽しもうじゃないか」

珍しくザカリアスが重くなりかけた空気を引っ張り上げ、楽しく宴を終えることが出来た。

第25話 一年が過ぎた

・ダンブルドア side

エリザベス・フォーリー。先生方から、時々噂を聞く生徒。

噂はもちろん悪いものはなく、普段からハツフルパフらしく予習復習を欠かさないだとか、指名されてもスラスラ答えを述べるし、自分から積極的に質問をしたりもするという模範的な生徒だという。イースターの休暇回りには、授業で軽く触れたことについてのレポートなども自主的に各教科の先生方に提出したりもし、その内容が深く、あのセブルスまでもを唸らせたという。

これがスリザリン生なら少し警戒したじやろうが、ハツフルパフ生で闇に堕ちる生徒は滅多にいない。友人も作れているようじゃし、今後の成長が密かに楽しみな生徒の一人じゃった。

皆、彼女は純粹にグリフィンドール生のことを想ってあの疑問を投げかけたのだと思っておるが、実は違う。あの場は何もなかったが、あの強い目を見て咄嗟に開心術を使ってしまったわしは知っている。彼女は、わしが正当に評価していないことを知っている。

あの目は、怒りでも憎しみでもない。わしへの哀れみじゃった。

彼女は自身に開心術が使われていることを知っていながら、抵抗しなかった。それどころか自らを曝け出してみせた。

哀れみの感情を知って動揺したわしを、もう充分だと判断したのかすぐに追い払ったが、わしは彼女にどう弁明することも出来ない。ハリーがいつか敵に立ち向かうときの心の支えになるよう、本来の評価を二倍ほどにもして点数を与えた。じゃが、それを言うわけにもいかん。

なぜミス・フォーリーは知っているのかはわからぬ。じゃが……。
見守るしかない、ようじや。

*

「リズー」

ホグズミード駅へ向かう馬車を待っている間、私は誰かに呼ばれた。誰なのかはわかりきっているが。

「何ですか、ハーマイオニー」

「あ、えっと、その……ごめんなさい」

何を思ったのか、謝ってきた。

「私達、リズがあの本を渡してくれたから賢者の石を護れたのに……。私、あれは正当な評価じゃないと思うわ。だから、」

「わかってます」

「ダンブルドア先生に言って……え？」

「あれが正当な評価でないことは、私がダンブルドア先生の次にわかっていきます。だから、大丈夫。謝らないで」

「え……でも……」

たぶん、正義感の強いハーマイオニーは、ダンブルドアに訴えて優勝を取り下げてもらおうとでもしたんだろう。だが、それは無用だ。「スーザンや他のみんなも、あれを乗り越えて来年の優勝を目指すと言っていました。今あなたがそれを言っても侮辱と取られますよ」

「……」

「ダンブルドアも、私が正当ではないと思っていることを知っています」

「え？」

「だから、大丈夫です。あなたは喜んでればいいんです」

私はダンブルドアに、ダンブルドアの開心術を通じて気持ちを伝えている。だから良いのだ。

「……ありがとう」

「いえ。ただし、来年は負けませんから」

「受けて立つわ！」

ハリーとロンの元へ走っていくハーマイオニーを見送りながら、私は心の中でため息をつく。

原作を読んだときの私はグリフィンドール視点だったのだから、あの点数を与えられて喜んでいられた。だが、原作スリザリン生はどうだろう。あんなタイミングで加点され、悲しくなかっただろうか。悔しくなかっただろうか。……惨めじゃなかっただろうか。

ダンブルドアがグリフィンドール鼻肩じゃなかったら。ダンブル

ドアが、事件が解決した段階でグリフィンドールに加点していたら。
ダンブルドアは、たぶん将来のハリーを想って劇的な優勝を味わわせただろう。だが、その噛ませにされた原作スリザリンは？
ハツフルパフは？

ダンブルドアはハリーとヴォルデモートのことを考えるあまり、他の人達を大切にしながらも、無意識に蔑ろにし過ぎていた。別にグリフィンドールを優勝にしなくていい、ハリーは強い精神を持っている。ヴォルデモートに打ち勝つことが出来る。

ごめんなさい、ダンブルドア先生。あなたのこと、

……嫌いに、なっちゃいそうです。

第2章 秘密の部屋

第26話 ドビー

さて。

「ただいま〜」

「……」

いつものこと。

「夜ご飯何時にしようかな〜」

「……」

いつものこと。

「おやすみなさい」

「……」

うん、いつものこと。

私には両親がいない。それどころか、保護者すら存在しない。……まあ、転生して「この人が第二のお母さんだよ」とか言われても素直に甘えられないだろうし。

お父さんは、魔法薬の実験で私が生まれる数ヶ月前に死亡。お母さんは、私を生んですぐにということになっている。実際には、私がこの世に存在し始めた瞬間に消えたんだけど。

周りに話し相手がいなかったため、声が出なくなることを危惧した当時一歳の私は、クマのぬいぐるみに向かっておしゃべりをするこゝろで声の出し方を忘れないようにしていたのでした。ぱちぱち〜。

……はあ。

そういえば、ハリーはドビーのせいでダーズリーで居場所がなくな……今更か。ダーズリー家で監禁状態になる。ごはんはヘドウィグとスニプの残りを半分ことかだっけ？ やだわー。元日本人としてそんなのやだわー。

よし、何か差し入れしに行こう。ついでにドビーに会えるといいな

♪

*

ピンポーン。

「はい、どちら様……あれ？」

ハリーの伯母、ペチュニア・ダーズリーが玄関先に出た瞬間、ホグワーツで準備しておいた『錯乱薬』を頭に振りかけて差し上げた。これがダーズリー家への手土産がわり。

で、さっさと家に取り込んだ。入って直ぐの階段を上りながら『透明薬』を飲み、姿を消す。

「……こつちなな」

どちらがハリーの部屋なのか迷ったが、映画では部屋の側面に窓があったため、奥の部屋だと当たりをつけて入る。ヘドウィグがいたので正解だろう。

「うわっ！ ドアが勝手n」

「黙れ小僧！」

ハリーが大声をあげた瞬間に一階から怒鳴り声が聞こえた。早っ。透明薬の解毒剤を飲み、姿を現してハリーに挨拶する。

「よっ」

「よっじゃないよ何でいるの!？」

ハリーが小声で叫ぶ。いいじゃないかいたって。

「もしかして今日ってドリル会社の商談があったりします？」

「そうだけど……何で知ってるの？」

原作知識で。

「まあまあ、とりあえず落ち着いて下さい。本当は手紙を送ろうかと思っただんですが、届かなそうだったからやめたんです」

「それはいつもの勘？」

「はい」

「……そういえば、よく上げてもらえたね」

「え？ 勝手に上がりましたが」

「……リズ、魔法界にはないかもしれないけど」

「不法侵入は魔法界でも違法です」

「……」

ハリーがもう諦めたという表情を浮かべた。開心術を使ってみた

ら、実際に諦めていた。……そうだ、ただおしゃべりするために来たわけじゃなかったんだった。

「そういえば、誰かから手紙は届きましたか？」

「……届いてないよ」

「そうですか。じゃあ、ドビーって知ってます？」

「知らないけど」

「ドビーというのはm」

バチン！

大きな音とともにドビーが姿を現し、キーキー声でしゃべろうとする。

「ドビーめは——」

「はいはい黙ってこれを食べよう」

私はポケットからカップケーキを取り出すとドビーの口に押し込んだ。ドビーはフガフガ言っていたが、すぐに諦めてもぐもぐし始めた。

「……リズ」

ハリーが何が言いたいかわかったので、即座に紅茶と共にカップケーキを出す。愛情たっぷりだから、たぶん美味しいと思う。

マルフォイ家のことをハリーにしゃべろうとしたらドビーが現れるだろうと考えていたのだが、予想通りにドビーが現れた。とりあえず、私の目的はハリーが安全にホグワーツへ行くことなので、今のところはドビーを見張ってればいいだろう。

ごつくんと最後のひとかけらまで飲み込んだドビーは、私の顔を伺った。

「ドビー、ハリーに迷惑をかけちゃうから、静かにね？」

「……ドビーめは、ハリー・ポッター様をお救いしたいのです」

「僕を？ どうして？」

「ハリー・ポッター様は魔法界を救つぐぎやごふっ」

ドビーが叫び出そうとしたので、再び口の中にカップケーキを突っ込む。ドビーが変な声を上げたが、気にしない方向で。

「(もぐもぐ……ごつくん) ハリー・ポッター様は魔法界を救った英雄

なのです！（小声）

「え、でも僕を救うって……どういふこと？」

「今年秘密の部屋が開かれるとか何とかじゃないですか？」

「なぜ知っておられるのですか、えーと……」

「リズ」

「リズ様？」

私が短く名乗ると、ドビーは律儀に名前を呼び直した。

「それを聞くのは六年早いよ、ドビー」

「意外と短い」

ハリーのツツコミを意図的にスルーして、私はドビーの目を見る。

「ドビーはハリーをホグワーツに戻させたくないんだよね？」

でも、大丈夫。ホグワーツにはダンブルドア先生がいる。もしどつかのMさんがダンブルドアをホグワーツから追い出したとしても、私達がダンブルドア先生のことを信じている限り、本当の意味でダンブルドア先生がホグワーツからいなくなることはない。それに、

私は「ホグワーツに戻らせたくない」と聞いて騒ぎ出そうとしたために秒速でカップケーキを詰め込んだハリーを見る。

見ての感想は、うん、ガリガリ。

「ここにいたらヴォルさんに殺される可能性は減るだろうけど、たぶんそれより先に餓死するだろうね。それでもいいの？」

「……」

「わかった。秘密の部屋に関しては私が解決するよ。別にM氏の目的はハリーを殺すことじゃないし、部屋を開くための手段は私が早いうちに回収してダンブルドアに渡しに行くよ。それでいい？」

「ですが」

「（カップケーキを構えつつ）それでいい？」

「……いいです」

「……そこ、脅したとか言わない。」

「じゃ、ドビー、早いうちに帰った方がいいよ。あと、この部屋で魔法を使ってハリーを退学に追い込もうとしても、ハリーがこの家から追い出されて路地で死ぬ可能性があるから辞めた方がいいよ。じゃね」

『姿くらし』を閉じ込めた氷を割り、私は家に戻った。

第27話 書店

二年生の夏休みの水曜日の書店。これが何を意味するかを知っている人は、たぶんこの世界にはいないだろう。

『サイン会

ギルデロイ・ロックハート 自伝『私はマジックだ』

本日午後12:30〜4:30』

フローリシユ・アンド・ブロッツ書店内の上階の窓に掛かっている大きな横断幕を見て、私はため息をついた。あんなものの授業を一年間受けるなんて耐えられない。耐えられないから、点数を稼ぎまくってやろう。

指定の教科書をかき集めてきてレジのカウンターの上に積み上げると、書店員は何も見ることなくすらすらと値段を述べた。全部同じだからかと思いきや、地味に一年生から七年生までのセットの値段を覚えていくらしい。すごいな。

財布からガリオン金貨を取り出し、支払いを済ませると、ちょうどハリーが傍迷惑なサイン会を開いているロックハートに引きずられて写真を撮られていた。

私を見つけたハリーが、ロパクで何やら伝えてくる。

(た、す、け、て)

残念ながら私にはハリーは助けられない。けれど、日刊預言者新聞に載ってしまうことを防ぐことなら出来る。

素早くカメラマンに近付き、飴玉サイズの氷をカメラの中に仕込む。こんな時のために、数時間後に溶け始める氷を用意しておいたのさ。たぶん、カメラマンがオフィスに帰った頃にはカメラは壊れてしまっているだろう。あとで日刊預言者新聞にふくろう便で弁償しよう、そうしよう。

「お久しぶりです、ロン、ハーマイオニー。何をしていますのですか？」

「あら、リズ！ あなたもロックハートさんのサインをもらいに来たのね？」

「残念ながら私は流行に流されるような人間ではありませんのでサイ

ンはもらいません」

「さすがリズ。僕のママもロックハートにお熱なんだぜ？」

「ロン！ やめなさい」

ウキウキしているハーマイオニーと赤毛の女性を呆れるように見たロンが言うと、赤毛の女性がロンの頭を軽くはたく。

「あ、ママ、この子がリズだよ」

「こんにちは。ロンからよく話は聞いてるわ。あなたはハツフルパフなのよね？」

「はい。ウィーズリー一族は代々グリフィンドールのようですが、ハツフルパフも家庭的でいいところですよ。——こちらはロンの妹さんですか？」

若干わざとらしくかったかもしれないが、ジニーに話を持っていく。

「そうよ。ジニー、挨拶なさい」

「ジ、ジニー・ウィーズリーです。その……リズさん、私、スリザリンになっちゃったらどうしよう」

魔法族の子供の一番の悩み、『スリザリンになったらどうしよう』。初対面の私に相談してしまうほど、今のジニーは切羽詰まっているのだろう。……そうか？

自分の結論に疑問を持ってしまった私は、それを解決すべくジニーに問いかけた。

「どうして私に聞いたのですか？」

「……ロンが、リズの勘はよく当たると言ってたから……」

なるほど。そういうことか。

私はそれっぽく見せるために、少しの間目を瞑る。そして、目を開くとジニーに微笑みかけた。

「大丈夫。私の勘が当たっているなら、あなたはグリフィンドールになります」

そうそう原作から外れた性格の持ち主ではないだろうし。

明らかにほっとしているジニーの向こう側から、ふと思いついたようにウィーズリー夫人が問いかけてくる。

「リズちゃん、そういうえびご両親はどうしたの？」

「両親は十一年前に亡くなっています」

「！　　ご、ごめんなさい、思い出させてしまって……」

慌てた様子のウィーズリー夫人に向かって微笑む。

「大丈夫です。私が生まれたばかりのことですし、誰かに殺されたわけでもないのです。名前を言われても『ああ、あの人か』程度にしか思いませんし」

「そ、そう、それならいいのだけれど……」

「気にするならママ、」

「リズをうちに招待したらどうだい？」

そつくりな二人の声を聞き、私は後ろを振り返る。

「お久しぶりです、フレツジヨ。今日もいい悪戯日和ですね」

「そうだな、リズ。ロックハートにクソ爆弾ぶちまけてくるか」

「フレッド！　　ジョージ！」

「冗談さ、ママ」

君達以心伝心？　それとも開心術掛けあってるの？

素朴な疑問が湧いてきたが、ウィーズリー夫人が向き直ってきたので考えるのをやめる。

「あの二人の言う通り、うちに来ないかしら？　　少し狭いけど、楽し

く過ごせると思うわ」

「良いんですか？　　ご迷惑なんじゃ……」

内心行く気満々だが、形だけ遠慮してみせる。

「そんなことないさ！　　おいでよ、リズ」

ロンがそう言ってくれたので、私は誘いに乗った。

「……では、お言葉に甘えて」

*

「有名人のハリリー・ポッター。ちよつと書店に行っただけで一面大見出し記事かい？」

「これって皮肉なんでしょうか、事実を言っているだけなんですか」

「コイツのことだから皮肉に決まってるだろ」

私の呟きにロンが返す。

「おや、ウィーズリー、君がこの店にいるなんて驚いたよ。君の両親はこれから数ヶ月飲まず食わずかい？」

ロンの顔がさつと赤くなる。

ここまででお分かりだろうが、嫌味なマルフォイクンのご登場である。地味に見るのは初めてかもしれない。ちよつと前髪が後退しつつある金髪オールバックなフォイクン。よし、覚えた。

「それで君は、ハッフルパフのリズ・フォーリーかい？ 成績が優秀ならスリザリンに来るべきだった」

「何だと！」

「まあまあ、ロン、落ち着いて。えーと、あなたはスリザリン生なんですか？」

「は？」

初対面なんだから相手のことを知っているのは不味いだろうと思いい、知らないふりをしてみせたのだが……だめだったらしい。

「マルフォイのことを知らないのか!？」

「スリザリンの嫌味な野郎だよ！」

「今のにハリーを当てはめるとしたら、グリフィンドールの眼鏡な野郎になりますね」

「それじゃ悪口になってないだろう!？」

「スリザリンという単語が悪口だというのは初耳です。あのマクゴナガル先生が堂々と悪口を言っていたとは……!？」

「そういう意味じゃないよ！」

知ってる。ちよつとボケてみた。

「えーと、マルフォイさん？ これからよろしくお願いします」

「リズ、マルフォイに挨拶する必要なんてないよ」

ハリーまでそれを言うか。

「スリザリンだからですか？」

「うん」

残念ながら、私の敬愛するスネイプ先生はスリザリン出身だ。よつて反撃タイムスタート。

「私はグリフィンドールの大半の方々とは違い、スリザリンというだ

けで相手のことを決めつけたりはしません。グリフィン・ドールに色々な性格の方がいるのと同様、あなた方が敵視しているスリザリンスも十人十色。自称闇の帝王に下った者がどうたらこうたらとあなた達は言うでしょうが、それならグリフィン・ドール出身のシリウス・ブラックはどうかなのかという話になります。ですから、私は寮に囚われず、本人の性格を重視して人付き合いをします」

はい論破。

ルシウス・マルフォイとアーサー・ウィーズリーがかち合って大人気ない喧嘩を見せてくれたが、私はハツフルパフらしく中立の立場を貫いた。

第28話 ウィーズリー家

「朝よー！　起きなさいー！」

ウィーズリー夫人の掛け声で、ウィーズリー家の朝は始まる。

既に私がウィーズリー家を訪れてから三日が経っていた。初日、ウィーズリー夫人が起きる頃を見計らってベッドを抜け出し、家事の手伝いを申し出た私は、あつという間にこの家族に馴染むことができた。

ウィーズリー夫人が各部屋を回って子供達を起こす間、私はキッチンに立って大量のソーセージを焼き、トーストの焼け具合を確かめ、自家製の卵を使ってスクランブルエッグを作り、新鮮なミルクをコップに注いだ。

そして、さっと杖を振るって全てテーブルに並べる。

未成年が魔法を使うと『臭い』というシステムの所為で魔法省に感知されてしまうが、それは周りに魔法使いの大人がいない場合だけ。大人の監督下なら、学校外でも魔法を使うことができるのだ。

朝食が終わった後、ハリー達は箒クイディッチ狂を持って出掛けていき、ウィーズリー夫人は買い物へ。アーサー氏は職場の魔法省へ向かったので、家の中にいるのは私とジニー、そしてパーシーだけだ。

ジニーに背を向け、飴玉の形の小さな氷を口に入れ、静かに噛み砕く。スウツと家の中の埃や汚れが消え、窓もピカピカに磨かれた状態になった。家で使おうかと思っウチてホグワーツから持ってきたものだが、時間短縮に有効活用出来る。

「ジニー、仕事は終わりましたから、自由にして良いですよ」

「わかったわ。教科書を持って来るから、問題を出してくれる？」

「はい。羊皮紙と羽ペン、インクも持って来てくださいね」

私がそう言うと、ジニーは部屋に引き返していった。ジニーにホグワーツの勉強を教えつつ、昼食で食べるデザートを作るので、手早く準備を整える。もちろん、ウィーズリー夫人から許可はとっている。「じゃあ、変身術からお願い出来る？」

ジニーに口頭で変身術の基礎を教える。本当はホグワーツに

入ってからでも良いのだろうが、ジニーは『リドルの日記』に操られ、授業に集中出来ない一年間を送る可能性がある。だから、私はホグワーツの授業の予習という名目で、出来る限りの授業の内容を教えているのだ。

スイカを一口サイズに切り、スプーンの裏で潰す。この時、少し食感が残るようにするのがコツ。潰したスイカをバットに入れ、レモン汁を少量垂らし、冷蔵庫にしまう。ちなみにこの冷蔵庫は純粋なマグル製品ではなく、空気中の魔力をエネルギーとして動く魔法製品のようだ。一時間ほど経ってから一度冷蔵庫から取り出してぎつくりかき混ぜ、再びしまい、さらに一時間ひやしてからもう一度かき混ぜる。氷を透明な器の形に操り、それにシャーベットを入れれば『夏にピツタリ☆スイカシャーベット』の完成だ。

冷蔵庫にシャーベットをしまっておき、買い物を終えたウィーズリー夫人が昼食の用意を始める。私はジニーと共に手伝った。

「早くホグワーツに行きたいなあ」

「グリフィンドールの寮って、真っ赤なイメージがあります」

「ほぼその通りよ。カーテンやら布団やらカーペットやら、全部真っ赤なの。初めて入ったときは目がチカチカしてたまらなかったわ」

「慣れたんですか？」

「違うわ。魔法で勝手に着色したのよ」

用意が出来たと同時に男衆が帰宅したので、その流れで昼食となった。

皆が昼食を食べ終わった頃、私は立ち上がった。

「皆さん、デザートを作ってみましたのですが、いかがですか？」

もちろんウィーズリー夫人に味の保証はしてもらっている。

みんな揃って食べると言うので、私はトレーに人数分の器を乗せて運んで来た。

「おいしいー」

「これ、リズが作ったの？」

ハリーの問い掛けに頷く。

自分のシャーベットをスプーンですくい、一口。うん、おいしい。

ホグワーツに着いたら忙しくなるだろうから、今はこの平和を楽しんでおこう。

第29話 早めのホグワーツ

キングス・クロス駅。

「遅れちゃう！ ロン、早く！」

「ハリーが先に行け！」

二人は短くそんなやり取りを交わすと、ハリー、ロンの順に九と四分の三番線ほホームへ向かうための柱に向かって勢いよく走って行った。

ガッシャーン!!!

壁としての仕事を立派に果たしている柱に思いつきりカートをつけ、跳ね返されてしまう。飛ばされたヘドウィグのカゴを回収しながら、私は辺りを見回してドビーの姿を捜すが、見つからない。たぶんもう帰ったのだらう。せめて通れるようにしてから帰れよ。

仕方ないので、こんな事もあるうかと用意していた氷を二つ三つ割り、ポケットに手をつ突っ込んで羊皮紙と万年筆を取り出す。ちなみに氷の中身は『マグル認識不可呪文』、『目くらまし術(効果は半径三メートルのみ)』、『耳塞ぎ呪文』だ。

騒ぐハリーとロンの口にマドレーヌを押し込み、万年筆を動かす。

『九と四分の三番線が出入り不可能につき、ホグワーツ特急に乗り遅れました。対処をお願い致します。リズ・フォーリー』

ちやうど書き終わったところで、ホームの時計が十一時になる。ごっくんとマドレーヌを飲み込み、再び騒ぎ始めた二人を見て、私は羊皮紙の最後に一文を付け足した。

『P.S. ハリー・ポッターとロン・ウィーズリーも一緒です』

危ない危ない、忘れるところだった。

「ハリー、ヘドウィグ借りますね」

吹っ飛ばされてご機嫌斜めなヘドウィグをなだめすかし、念のため用意しておいた超高級ふくろうフーズを与えてから羊皮紙を足にくくりつけて飛ばす。超特急でマクゴナガルに届けるように言ったから大丈夫だろう。

「リズは何で落ち着いてるんだ！　　ホグワーツ特急に乗り遅れたんだぞー！」

「はい。ですが、魔法によるゲートが何故か閉じてしまっているからであり、こちらに落ち度はありません。ですから、ホグワーツにふくろうを飛ばして迎えが来るのを待てばいいだけの話です。ヘドウィグに手紙を託したので、しばらく待てば誰かが来るでしょう」

「……あれだけの短時間でそこまで考えたのか」

「はい。ちなみに、あなた方が持ち前の無鉄砲さを遺憾なく発揮して、ウィーズリー氏が秘密裏に魔法を掛けた車で、七人のマグルと一台のカメラに証拠として残りつつホグワーツに飛んで行き、貴重な魔法植物である暴れ柳に多大な損害を与え、罰則を受けるルートもシミュレートしました」

「……………リズがいて良かった」

そうでしょうとも。そのために私はハリーとロンの後ろでホームに入れるか見張っていたのだから。夏にウィーズリー家に滞在した理由の一つでもある。

バチン、という軽い音がして、フリットウィック先生が現れた。スネイプ先生だったら二人が不機嫌になるだろうから、私としてはほっと一安心だ。

「ミス・フォーリー、非常事態でありながらの迅速な対応は見事でした。さあ、ホグワーツへ行きましょう」

フリットウィック先生がカートに杖を向けると、荷物は全て消えた。たぶん先にホグワーツに送られたのだろう。

こうして、私達は安全にホグワーツへ向かったのだった。

*

「おったまげー。乗り遅れたのに一番乗りでホグワーツに着くなんて……………」

ロンの言う通り、私達は列車組より一足…………いや、ふた足先にホグワーツへ到着していた。現在午前十一時五十分。ホグワーツ特急が着くのは午後五時頃、ホグワーツに到着するのは午後六時頃なので、かなりの時間を持て余すことになる。

私達はホグワーツの教員と共に昼食をとった後（少人数なので全員ハッフルパフのテーブルについて）、私達は騒ぎを起こさない限り自由で過ごすことになった。

「こんな時には――」

「図書館ですよね♪」

何か言おうとしたロンの言葉を遮り、私は二人を引きずって図書館へ向かった。

「図書館で何をするんだ？　宿題どころか授業も始まってないのに」

「魔法生物について調べようと思うんです。ほら、ハグリッドとの話題作りにもなっただろうと良いでしょ」

ちなみに去年のうちにハグリッドとは接触済みである。『ふんわりしてる♪簡単ロックケーキ』のレシピを教え、実物を贈呈したのが好感度UPに繋がったらしい。あと、『怪物的な怪物の本』を紹介してみた。ハグリッドは知らなかったようだが、原作ハグリッドはどうやってこの本の存在を知ったのだろう。……ダンブルドアの紹介？

ありそう。

今度、巨人の歯でも砕けないクッキーのレシピを仕込んでおくか。

第30話 友達

ようやくホグワーツ生が到着した。マクゴナガル先生は新入生歓迎会のための注意事項を簡単に述べた後、新入生を出迎えに大広間から出て行った。

「リズ！　ホグワーツ特急にいなかったからどうしたのかと思ったわ」

スーザンが隣の座りながら言う。

「すみません。何故か九と四分の三番線に入るためのゲートが閉じてしまっていたので、乗り遅れてしまったんです」

「原因はわかったのですか？」

ジャステインが向かい側の席に着きながら聞く。

「いえ。私は聞いていません」

ジャステインの隣に座りながらザカリアスが呟く。

「リズならわかってそうだが」

彼の言葉は笑顔でスルーさせてもらう。

お互いに夏休みにあった出来事を話しているうちに、歓迎会の準備が整ったようだった。

新入生が並んで大広間に入ってくる中に、ジニーの姿を見つける。さらに、去年頑張って習得した『超直感呪文』を使いながらルーナの姿を探す。あ、いたいた。興味津々に魔法が掛けられた天井を見つめている。

コリン・クリービーの姿を確認したところで組分けが始まった。

ジニーはグリフィンドール（ウィーズリー兄弟が歓声を上げた）。

コリンもジニーと同様。ルーナは原作通りレイブンクローに入った。

最後の生徒まで組分けが終わったところで歓迎の宴が始まった。

*

新学期が始まって一週間。既にルーナはレイブンクローで孤立し、いじめを受けていた。

失くしたものが無いかと学校中をウロウロしているルーナに、私は『呼び寄せ呪文』を使って回収していた教科書を差し出した。

「ん？ ……ああ、ありがとう。あんた、優しいんだね」

「優しくかったらレイブンクロー生に制裁を加えていると思いますが。見解の相違というやつですね」

「じゃあ何で加えないの？」

彼女は一ミリたりとも私が制裁を加えられないとは思っていないようだった。

私は少し考えて答える。

「……私は神じゃないんです」

「あんた、面白いね」

「どうしてですか？」

「普通はこう言うとき「私には出来ないから」とか言うけど、あんたは

「神じゃない」って答えたから」

「……あなたは面白いですね」

「ここに来てから初めて言われたよ」

「そうですね。噂によると、あなたの持ち物は度々どこかへ行ってしまうと聞いたのですが」

「うん。いつか戻ってくるよ」

「まるでちよつと持ち物が一人旅に出ちゃったんだみたいな軽さで言うのはやめてもらえますか。授業に教科書を持って行かないつもりだったんですか」

「大丈夫。いつか戻って来るから。これも戻って来たし」

呪文学の教科書を指し、カバンにしまう。

「あなた、そのままだといつか裸足で森を歩く羽目になりますよ」

「随分具体的だね」

「あなたの場合忠告してもその通りに行動しそうで怖いです」

厨房で作って来たクッキーを入れた袋を差し出す。

「食べます？」

「うん」

二人でクッキーを食べながら、静かな廊下を歩く。

「あんた、面白い人だね」

「何故そう思うんですか？」

「私に話し掛けてくるから」

「おかしいですか？ 私、あなたのこと好きですよ」

「私もあなたのこと好きだよ」

「それはよかった」

程よくサクサクしているクッキーをかじる音が響く。

「あんだ、名前は？」

「リズ・フォーリー」

「私はルーナ・ラブグッド」

レイブンクロー寮の入り口にたどり着く。

驚のノッカーが出す問題を考え始めたルーナの背に、私は言う。

「私はあるあなたのことを友達だと思っています」

歩き始めた私の背後で、ルーナが言った。

「私もだよ」

静かにレイブンクロー寮への扉が開く音がした。

第31話 ひたすら点数を稼ぎまくる授業

ロックハートという名前は、本当に彼のことを示していると思う。岩ロックの心ハートなのだ。心が固まっている。何が言いたいかと言うと、ロックハート、お前は人の気持ちかわからないのか。

机の上に置かれているペーパーテストを見て、私はため息をつく。こんなの授業を一年間受けるなんて耐えられない。前にも言ったかもしれないが、敢えてもう一度言おう。私には耐えられない。

と言うわけで、闇の魔術に対する防衛術の授業はひたすら点数を稼ぎまくる授業だと割り切ろう。『闇ひたすらの魔術点数を稼ぎまくるに対する防衛術の授業』。うん、これなら我慢出来る。

全てのクイズ(これが問題だとは認めない)に模範的な(ロックハート基準)解答を書き込み、残り時間はさらに原作ロックハートが答えを付け足していた内容を思い出して書き込みを加える。はい、出来上がり。

「チツチツチ。私の好きな色がライラックだと覚えている人は少ないようですね。『雪男とゆつくり一年』でそう言っているのに。……私の誕生日の理想的な贈り物は、魔法界と非魔法界のハーモニーですよ——もつともオグデンのオールド・ファイア・ウイスキーの大瓶でも構いませんがね」

それも書いた。自伝にも書いてあったし。

「——ミス・フォーリーは満点です。文句のつけようがない解答でした。ミス・フォーリーはどこにいますか?」

私はさっと手を挙げる。

「素晴らしい。ハツフルパフに二十点上げましょう! ウイスキーのことまで書いてあったのでグリフィンドールより十点多いですよ」
そう言つてウィンクしてくる。

「何でこんなのに真面目に答えたんだ?」

ザカリアスの問いに、きっぱり返す。

「あんなのが与えたとしても、点数は点数。今年こそハツフルパフが優勝するのですから、そのための努力は惜しみません」

ハツフルパフ生達に納得の雰囲気広がった。

ハリー達なら納得出来ないだろうが、我らがハツフルパフ生は基本的に穏やかなので、ロックハートのことも受け入れることが出来たようだ。気合い十分にロックハートの次の言葉を待っている。

少しロックハートの前置きを聞き逃してしまっただが、大したことは言っていないので問題ない。

「――捕らえたばかりのコーンウォール地方のピクシー小妖精」
原作通り。

「では、手始めに君達がどのように対処するのか見てみましょう」
そう言って、ピクシーの入っているカゴを開け放った。

上等。ロックハートの目の前で片付けてみせよう。

『イモービラス』！」

部屋中に散らばったピクシーが、備品に悪戯を仕掛ける前に不動呪文で金縛りを掛ける。そして、杖を振るって、拾い上げたカゴの中に回収する。カゴはロックハートに進呈した。

「……お、お見事です！　ハツフルパフに二十点！　これで授業は終わりです」

そう言って、生徒達を教室から追い出した。生徒達が混乱しているうちに自分が華麗に……とか考えていたのだろう。まあいい。点は稼げた。

「リズ、凄いわ！　あの呪文は何？」

呪文について解説しながら、私はジニーの姿を見かけてハッと気付いた。

日記、ホグワーツに着いてからじゃなくても、ウィーズリー家で回収出来た。

日記はホグワーツで、という先入観があったからこそそのミスに、私はその場に立ち尽くした。

第32話 ハロウィーンの悲劇

『アクション、日記よ来い！ ……来るわけないか』

必要の部屋で、私は日記を回収する手段を探していた。

机には山ほどの分霊箱に関する本が積み重なっているが、作り方や壊し方は書いてあるにも関わらず、呼び寄せ方は書かれていない。当たり前前か。分霊箱を誰が呼び寄せるといふのだ。私は呼び寄せるが。

「人のいないタイミングを見計らってグリフィンドール寮を『悪霊の火』で全て焼き払うわけにもいかないし……。ジニーに頼む？ 怪しまれるだけか……」

悪霊の火ではなく、『悪霊の光』的な呪文を作ってジニーの部屋でピカッてさせる？ 生き物じゃないから無理か。『悪霊の水』で浸すのもいいかもしれない。でも、それにジニーやルームメイトが触ってしまったらと思うと難しい。

「ハリーが日記を手に入れるタイミングで何とかするしかないか……」

私の思考に反応したのか、机の上に卓上カレンダーが現れる。

「ハロウィーンまであと一週間……。ミセス・ノリスに光の操作の呪文を掛けに行こう」

*
結果。失敗した。

呪文を掛けたミセス・ノリスの前に蛇を出現させてみたら、一瞬蛇に反応した後にはキョロキョロしただけだ。たぶん、呪文が蛇を認識してから効果を発動するのに時差があるのだろう。しかし、今の所これ以外に手段はないので、気休めだが呪文を二重に掛けてからミセス・ノリスを解放した。バジリスクの目を見る前に呪文が作動してくれることを願うしかない。

当日、マートルのトイレから水が漏れているかを確認しておかなければ。マンドレイクを用意して置けなかったのが悔しくてたまらない。

*

「大変だ！」

ハロウィーン当日。必死な気持ちで十字架を切り、信じてもない神様にパンプキンパイを丸々一個捧げてから夕食をとっていたのだが、ザカリアスが叫びながら飛び込んで来た。

いつも厄介ごとを持つて来る彼の言葉にスーザンとジャステインは目を向けたただけだが、私は素早く反応した。

「何かあったんですか？」

「ミセス・ノリスが殺された」

嘘だ！ 今朝確認したときは、マートルのトイレから水が漏れていたのに！

大広間を飛び出し、ガヤガヤと声のする方角を目指して走る。人をかき分け、私はぼつかりと空いた空間に出た。

「ミセス・ノリス……」

呆然とハリー達が何かを見つめている中、私はミセス・ノリスの体に杖を向けた。見せしめのようにぶら下げられている彼女をゆっくりと下ろし、そつと体に触れる。

「あったかい……」

彼女の体は、固まってはいるものの暖かった。ミセス・ノリスは死んではいなかった。生きていた。

思わず涙が流れるのを感じる。私はミセス・ノリスの体を抱き締め、壁を見た。

『秘密に部屋は開かれたり』

継承者の敵よ、気をつけよ』

秘密の部屋は、開かれてしまった。

第33話 ミセス・ノリス

・ハリサイド

「継承者の敵よ、気をつけよ。次はお前だ、グレンジャー！」

ドラコ・マルフォイがハーマイオニーに対して指を突きつけた時、先生方が到着した。

フィルチは僕がミセス・ノリスを殺したと思っているようだが、僕は違う。必死に反論する。

「フィルチさん」

ずっと黙っていたリズが、やっと口を開く。

「ミセス・ノリスは死んではいません。石化しています」

顔を上げたリズの顔を見て、僕は驚いた。リズが、泣いている。

リズはその場にいたダンブルドアに顔を向けた。

「……ミス・フォーリー、ミセス・ノリスを」

固まった猫を受け取り、何かを確かめるように触れる。

「……彼女の言う通りじゃ。ミセス・ノリスは死んではおらん。体温もある」

ダンブルドアは辺りを見回した。

「場所を変えよう。ミスター・ポッター、ミスター・ウィーズリー、ミス・グレンジャーはついて来なさい。ミス・フォーリーも来てくれると助かる」

リズは頷いた。

「では、すぐ上にある私の部屋がちょうどいいでしょう」

ロックハートがいつもの調子で言い、僕らは移動した。

*

・ハリサイド

フィルチはずっと僕が犯人だと言い張ったが、僕がやったわけじゃない。ダンブルドアは、マンドレイクをスプラウト先生が育てているのでまた戻ると言うが、フィルチは何が何でも罰するつもりの方だった。

「ミス・フォーリーはどう思う？」

「……え？ ええと、何でしょう」

ダンブルドアの言葉を聞いていなかったようで、リズははつとして聞き返す。

「ミス・フォーリーも、ハリー達が犯人だと思うかね？」

「何とも申し上げられません」

「リズ——！」

「最後まで聞きなさい」

僕らの味方だと思っていたリズの予想外の言葉に声を上げたが、今までにない真剣な口調で遮られた。

「まず、これは単純な石化呪文ではないでしょう。現に、あの場で私が反対呪文を掛けてみたにも関わらず効果がなかったこと、そしてダンブルドア先生ですら解呪出来なかったことから、高度な闇の魔術ではないかと考えられます。私は詳しくはわかりませんが、ハリーのようなまだ半人前の魔法使いが扱えるような呪文ではないのではないのでしょうか」

ダンブルドアに確認を取るような視線をやると、ダンブルドアはリズに向かって頷いてみせた。

「呪文ではない可能性もあります。こちらも詳しくはわかりませんが、そのような魔法薬が存在するのかもしれませんが、珍しい魔法生物の仕業の可能性もあります——存在するかどうかはわかりませんが、メドウーサとか。他にも私が知らないだけで、そのような効果をもたらす力を持った生物がいるかもしれません」

リズは僕の目を見た。

「先ほど、ハリー達に扱える魔法ではないと言いましたが、それだけでハリーが無罪かどうかは判断出来ません。もしかしたら共犯者がいて逃す手伝いをしたのかもしれませんが、もし関わりがなくても操られているのかもしれませんが。私には調べようがないので、結論は『わからない』となります。お力になれずすみません」

「いや、良いんじゃないよ。むしろ、この短時間でよくそこまで考えてくれた。魔法薬などという可能性も分かったの。どうじゃ、アーガス。ハリー達が悪いとは決まっておらん。納得してくれぬか」

「フィルチは不満げだったが、渋々頷いた。
「解散じゃ」

リズは、一目散に部屋を出て行った。

第34話 不思議な屋台

ミセス・ノリスが原作通りの方法で石にされたのかはわからない。だから私は、石化する魔法薬、バジリスク以外に石化の能力がある魔法生物が存在するかどうかなどを徹底的に調べ上げた。が、禁書の棚には手を出せないで調べ方は不十分と言えるだろう。

石化したミセス・ノリスに掛けた魔法は、不十分だった。やはり蛇を脳が認識してからそれに反応した呪文が効果を示すのは時間の問題だ。蛇を見えなくするという選択肢から離れた方が良いのかもしれない。

それはすなわち、石化を前提とした対処の仕方。となると……。

「コンタクトレンズ、いや、衛生面を考えると眼鏡が最適か……」

アレをするしかないようである。

*

・ジャステイン side

「リズ、どこで何をやっているのかしら……」

スーザンが呆れたように呟く。

「いくら純血、しかも聖二十八一族だからと言って、秘密の部屋が開かれたからには出歩くのは控えるべきだろう」

「そう、その通り」

ザカリアスの言葉に合いの手を入れる声。僕達が振り返ると――

「……何やってんだ、アイツは」

ザカリアスの言う通り。

明らかにリズと思われる人物が黄色と黒のレンズのサングラスを掛け、爆発したカラフルアフロのカツラをつけ、黒いローブを着てアフロの上にフードをかぶり、アルトの声で高らかに商品の宣伝をしていたのだ。

ソプラノなりズの声とは程遠いし、人見知りなりズの行動とは思えないが、あれはリズだ。確信を持ってリズだと断言出来る。……ちよつと不安だけど。ローブにホグワーツの校章は付いているもの

の、所属寮のバッジは付いていないし。ついでにフードの裏地は紫なので、さらにわからない。

「秘密の部屋が開かれたからには、そのハツフルパフの彼が言うように、誰しも対策を取るべき！　我が屋台では、スニーコスコープ機能付き伊達眼鏡や、気配を消して背後から近付くものに反応するサングラス、魔法生物避け護符などが売られているよ！　しかも価格は、全商品二クヌート!!　マグル生まれで心配だと言う方は、特別に二クヌート!!　安いよ安いよ！　是非買って行ってね！」

行動的なスーザンが人が集っている中に入って行き、リズ(仮)に話し掛けるのが見える。リズ(仮)はローブの内ポケットをガソゴソと探ると、一枚の薄い水色の小さなカードをスーザンに渡した。スーザンはお礼を言ってからすぐに戻ってくる。

「どうでしたか？」

「さつきもそうだったけど、口調が明らかにリズとは違うわね。けど……」

さつきの水色のカードを差し出してくる。

「名刺をもらってきたわ。見てちょうだい」

受け取ってみると、それは紙のカードかと思いきや、限りなく薄くて硬い氷だった。黒いインクで達筆に名前が記されている。

『Mysteliz Girl』

「ミステリズ・ガール……」

「リズ、よね」

「リズ、だろうな」

言いながらも、二人とも不安なようだ。

「とりあえず、リズとミステリズ・ガールは別にして考えましょうか」
僕の提案に、二人とも頷いた。

・ミステリズ・ガールside

破格の値段も手伝って、商品が飛ぶように売れていく。たまに私の正体を探ろうとする人がいるので、そんな人には氷で作った名刺を差し出しておく。寮を聞かれたら「穴熊寮(日本語)」と答えているので、

嘘はついていない。日本語がわかる人がいるとは思えないけど、嘘を
ついていないことには変わりない。

……さて。そろそろ先生方が来るだろうし（フレツジヨに借りた忍
びの地図を見つつ）、店じまいにしようか。

第35話 不思議ちゃんの商品

・ジャステインside

ミステリズ・ガールは羊皮紙を確認したかと思うと、さっさと残った商品をローブのポケットに詰め込み始めた。明らかにポケットの容量を超えているが、ミステリズ・ガールのやることなので特にツツコンだりはしない。

パチンと指を鳴らすと紫のテーブルクロスが浮き上がり、机が自動で折り畳まれる。コンパクトなサイズになった机はテーブルクロスに包まれ、ミステリズ・ガールの左ポケットに吸い込まれるようにして消えた。

ミステリズ・ガールは、紫に着色されたガラスのボールを取り出しながら言った。

「今日はおしまい！　また来てね！」

ボールを地面に叩きつけると紫の煙がもくもくと立ち上り、煙が晴れた頃にはミステリズ・ガールは消えていた。

「……何がしたかったんだ？」

「さあ？」

僕達は急いで寮に戻ることにした。

*

・ジャステインside

「あら？　皆さんお揃いでお出かけしていたんですか？」

寮に戻ると、何食わぬ顔でリズが本を読んでいた。僕達が近くの椅子を引いてきて座ると、リズは本を閉じる。そして、紅茶をどこからか持って来た。

「先ほど、ミステリズ・ガールなる人物にお会いしたのですが」

リズが言った瞬間、僕らは揃って紅茶を噴き出した。リズが杖を振るうと飛び出た液体は消える。

「中々面白い商品を取り扱ってしまして。思わず購入してしまいました」

リズがポケットから商品を取り出す。全部で十種類ほどあったが、

それが全て揃っているように見える。

「全て買ったなら、特典としてこんなものを頂いたのです」

そう言ってリズが取り出したのは……

「……コンタクトレンズ?」

マグル生まれの僕はわかったものの、魔法界育ちのスーザンとジャスティンはわからなかったようだ。

僕が簡単に説明すると、二人は興味深そうにケースに入ったコンタクトレンズを見つめていた。

「そういうことですので、コンタクト^そレンズはジャスティンにプレゼントです」

「はい?」

僕は思わず聞き返した。

「え? 何か私、おかしなことを言いました?」

「何で僕なんですか?」

「え、だって秘密の部屋ですよ? ジャスティンは気をつけた方がいいのでは?」

「確かにマグル生まれですけど……。それなら混血の方も気をつけるべきでは?」

「……ああ、なるほど。詳しくは知らないのか……」

リズは一人でブツブツ呟いた後、寮の部屋に戻っていく。そして、再び現れた時には一冊の本を手にしていった。

「これに全てが載っています。読んでおくといいいでしょう」

そう言って、寮を出て行ってしまった。

「……読んでみましょう」

『ホグワーツの歴史・決定版 1991〜1997年のホグワーツ生向け』

「めちやくちやピンポイントだな」

「需要あるのかしら……?」

『虎七味社出版 ミステリズ・ガール著』

「『ミステリズ・ガール!』?」

「と、とにかく目次を見てみましょう」

『一、ホグワーツ魔法魔術学校とは

二、ホグワーツ創設者について

三、ホグワーツ歴代校長一覧

四、ホグワーツのお茶目な仕掛け——

』
「関係なさそうなのが続くわね。飛ばしましょう」

二十四、スリザリン氏とその他創設者の対立

二十五、スリザリン氏の思想について

二十六、秘密の部屋

』
「これだな」

『第二十六章 秘密の部屋

第二十四章でお話しした通り、創設者達の対立の末、サラザール・スリザリン氏はホグワーツを出て行きましたが、その時にスリザリン氏が人知れず残したと言われるものが『秘密の部屋』です。第二十五章で述べた通り、スリザリン氏はマグル生まれがホグワーツで魔法を学ぶことに反対していました。スリザリン氏はホグワーツを去りましたが、いつかマグル生まれをホグワーツから排除しようと、秘密の部屋に『スリザリンの怪物』を遺したと言われています。

著者の調査によりますと、スリザリンの怪物はとある秘密の経路をたどって学校中を移動することが出来、それによってマグル生まれを殺す手筈となっているようです。秘密の部屋の入り口についてもわかりましたが、スリザリン氏の趣味がアレだということを暴露する結果となりますので、ここでは控えさせて頂きます。

スリザリンの怪物には『死』を与える力があります。たぶん、それは直接目に作用する力でしょう。これを読んでいるマグル生まれなあなた。サングラスや眼鏡、コンタクトレンズなどで怪物の力が死を引き起こすのを防ぎましょう。』

「……だからコンタクトレンズ、なのですね」

僕はリズに渡されたレンズを見る。

「つけておいた方がいいのかもしれないね」

第36話 クイディッチ ②—I

あ、クイディッチの試合、来週じゃん。

ズドドド、ガツシャーン！

……あーあ。

*

必要の部屋で起こった本の雪崩れを元通りにするのに、半日も掛かってしまった。来週のクイディッチの試合で、原作ドビーはハリーをダーズリー家に帰すためにブラッジャーに魔法を掛け、ハリーを追い掛け回す。何とかしなくては、下手するとハリーが死んでしまう。

魔法を強制終了させる魔法薬を上空からばら撒く？ スニッチや箒に影響が出るだろうし、何よりそんな魔法薬は禁書の棚にしか無いだろう。事前にブラッジャーに細工避けの魔法を掛けておく？

試合用のブラッジャーはマダム・フーチが管理しているし、屋敷しもべ妖精の魔法は強力だ。

研究室になっている必要の部屋をウロウロしながら分厚い本をめくり、棚に所狭しと並べた魔法薬の瓶を引っ掻き回す。手が一番奥の小瓶に触れ、そっと取り出した。

「……これで何とかするしか……」

金色の液体が一滴だけ入った小指ほどの大きさの小瓶をローブの内ポケットに入れ、私は研究室を出た。

*

クイディッチの試合が始まった。私はハリーをブラッジャーが追い掛け回すのを歯がゆい思いで見守りながら、こっそり腕時計を見た。そろそろウッドがタイムアウトを取る頃合いだろう。

観客席を下り、ザーザー降りの雨の中をグリフィンドールが話しかけている中に入っていく。ちょうどそこでは、ハリーが自分をブラッジャーから守っていたフレッジョに、もう守らなくてもいいことを告げたところだった。

「ハリー……」

パツとクイディッチ・チームのメンバーが振り返った。私は一瞬、

小瓶を取り出そうとしたが、やめた。

「ハリー、あのブラッジャーは何者かに操られています」

マダム・フーチが近付いて来ているのに気が付き、私は早口で言った。

「ですから、ハリー、あなたは操っている何者かの予想外の動きをする
といいでしょう。何でもいいですから、術者がギョツとするような動
きを。ただ、忘れないで下さい。あのブラッジャーは、あなたを殺す
ために動いているわけじゃないんです」

「何でわかるんだ？」

「……あなたには、犯人がわかると思いますよ」

それだけ言うと、私は走って観客席に戻った。

思い描くのは、あの小瓶。フェリックス・フェリシスの不完全な複製だ。

これを使わなくて良かったのか、自分ではわからない。ドビーはハリーを殺すつもりはないとはいえ、事故が起きる可能性はある。

「これだから、転生者は嫌なんだ……」

日本語でぼつりと呟くと、私は深呼吸をし、濡れている顔をタオルで拭ってスーザン達の座る席へと向かった。

*

・ダンブルドア side

泣いているのか、それとも雨に濡れているだけなのか……。濡れた顔を拭い、去って行ったミス・フォーリーを見送りながら思う。彼女は、何を考え、何を行動に移しているのか。そして、最後に彼女が呟いた意味不明な言語。彼女の正体についての謎は深まるばかりだ。

しかし、少なくとも彼女は自分から進んで闇に染まることは無いだろうとは思っていた。確かにトムと同じように優等生ではあるが、何か根本的にトムとは違うのだ。

リス・フォーリーは、何を目指しているのじやろうか。

*

ハリーは、予想外の行動を取っていた。

超高速でクイディッチ・ピットを飛び回りながらスニッチを探した

り、スリザリンの選手の中に突っ込んで行ってブラッジャーを撒こうとしたり、マルフォイの周囲をグルグルと回ったりしているのだ。

「彼は一体何がしたいのよ……」

スーザンが呆れたように呟く。

「リズ、何か彼らに助言して来たんですよね？　何て言ったんですか？」

「たぶん、あのブラッジャーは誰かに操られているだろうから、術者の予想外の行動を取るように、と」

「……でも、ブラッジャーに強力な細工魔法避けの呪文が掛けられているはずだろ。何であんなに簡単に操られてるんだ？」

「リズはどう思うのよ」

スーザンがズバリと切り込んできた。おいおい、私は万能型の天才じゃないんだよ？　答えはわかるけど。

「……もともと、魔法界の中では魔法使いの魔力は弱いです。それは知ってますよね？　なら話は簡単です。さらに強力な魔力の持ち主が、魔法を掛けてしまえばいい」

「つまり、どういうことなんです？」

「魔法生物の可能性がある、という話です」

「あり得ないだろ。魔法生物は魔力を持っていたとしても、自由に魔法として使うのは困難なはずだぞ」

「あなたがたはニフラーやボウトラックルなどを思い浮かべて言っているのですが、自由に魔法を使う事が出来る魔法生物は存在しますし、そこまで希少なわけでもありません。この城にだって何百といえますよ」

「何なんです、それは？」

ジャステインの問いに、簡潔に答える。

「屋敷しもべ妖精です」

第37話 クイディッチ ②—II

ハリーがスニッチを見つけたらしく、一直線に突っ込んで行く。そして、小さな何かを掴もうと腕を伸ばしたところで、ブラッジャーが横から飛び出し、ハリーの腕に直撃した。ハリーは気にせず、もう片方の手を差し出しながら箒からジャンプし、スニッチをキャッチしたと同時に地面に転げ落ちた。

なおもハリーを襲おうとするブラッジャーに向かって杖をまつすぐに向けた。

『「フィニート・インカンターテム」!』

ブラッジャーは一瞬その場に停止したかと思うと、次の瞬間、軽く爆発し、粉々に砕け散った。

五分後には、たくさんの心配そうながらも嬉しそうなグリフィンドール生、心配してオロオロしているハツフルパフ生、そして悔しがるスリザリン生がクイディッチ・ピットに集まっていた。

「ハリーは大丈夫ですか?」

「ああ、リズ。骨が折れたみたい。動かすとても痛そうなの」
振り返りもせずにハーマイオニーが答えた。

「気休め程度ですが、治療に影響のない痛み止めくらいなら出来ますよ。どうします、ハリー?」

「具体的にはどんなことをするんだ?」

「一時的に腕の神経を麻痺させます。後遺症などは皆無です」

「お願いするよ」

「おやおや、そんな魔法を使うくらいなら、私が治しますよ」

ロックハートが颯爽と現れた。私は念のため、ハリーが聞いたのと同じようにロックハートに尋ねた。

「具体的にはどうするんです?」

「こうするんですよ」

特大のウインクをかましたロックハートは杖を振り上げる。ロックハートの杖から魔法が発動する直前、私は素早く動いた。

ドーン! と派手な音がして、ロックハートが吹き飛ばされた。

私はハリーの腕に痛み止めの魔法を掛けると、ロックハートの元に駆け寄った。

「えー、なんと。かの偉大で有名なロックハート先生は、自分の杖の向きを逆さまに持って魔法を掛けたため、自分の腕に治療の魔法を掛けてしまったようですねー。おやー？　なんと、ロックハート先生の杖腕の骨が無くなっていきますね。ロックハート先生は、ハリーに骨抜ききの呪文を掛けるつもりだったんでしようかー。謎ですねー」

「棒読みで何言ってるのよ。リズ、ロックハート先生はどうするのよ」「え？　放っておきますが？」

「駄目でしょー！」

「いやー、だって、あんな本出してる人ですよ？　あれほどのことを本当にやっているとしたら、こんなちっぽけな怪我なんてどうにでも出来ますよねー？」

「リズー！」

怒られた。仕方がないので、杖を振ってロックハート（気絶Ver.）を浮かし、超高速で医務室に飛ばす。普通は怪我人にやることではないが、ハリーを骨抜きにしようとした相手だ、問題ない。

「大有りよー！」

……解せぬ。

*

・ハリー side

マダム・ポンフリーの安全な治療により腕は元通りになったが、念のため一晩入院することになり、僕はげんなりしていた。

さつきリズに、なぜ強力な細工呪文避けの魔法が掛かっていたにも関わらず、操られていたブラッジャーを簡単に止めることが出来たのか聞くと、リズはあっさり答えた。「私はブラッジャーを操っていた呪文を解除したわけではありません。魔法具であるブラッジャー本体の魔法を抜くことによって、ブラッジャーを魔法具からただのポールにただけです」と。ロックハートについては、「杖の向きを間違えたのでしょーね」と言い張っていたが、声をひそめて「実際のところは？」と聞いてみると、超小声で「こっそり前後を差し替えました」と

返ってきた。やっぱりリズムのせいお陰だったらしい。
十分後。

突然の訪問者により、僕はリズムの言っていた犯人がわかった。

第38話 協力の申し出

コリン・クリービーが襲われた。

翌朝、城中はこの噂でもちきりだった。

しまった、忘れていた。ハリーが死なないようにと考えていたら、コリンのことを忘れていた。

次……。次は、誰だっけ……？

記憶を探ろうとするが、慌てていて思い出すことが出来ない。思わず泣きそうになる。

「リズー！」

最初に気が付いたのは、ザカリアスだった。

その声にスーザンとジャステイン、アーニーとハンナに、ハツフルパフの頼れる先輩であるセドリックまでもが集まってくる。

「リズ、落ち着いて！　あなた、コリン・クリービーと知り合いだったわけじゃないわよね？」

知り合いではなかった。知り合いではなかったが……。

遂に我慢出来ずに、涙が溢れ出す。

「大丈夫。コリンは元に戻るから。泣かなくてもいいんだよ」

セドリックが優しく声を掛けてくるが、私の涙は止まらなかった。次の犠牲者を早く思い出さないと……。

入学したての頃、大広間への地図をくれたりした女子の監督生も来て、私を抱き締め、背中を優しくさすってくれた。

「大丈夫よ。落ち着いて。大丈夫だから」

少しずつ落ち着いて来た私は、頭の中で原作での犠牲者を思い浮かべる。ミセス・ノリス、コリン、『ほとんど首無しニック』にペネロピー・クリアウオーター、ハーマイオニー、……ジャステイン。そうだ、次はニックとジャステインだ！

「ありがとう。私……、ううん、何でもない。ごめんなさい」

私は取り繕うようにそう言うと、寮を飛び出した。

・スーザン side

私達は、リズが出て行った扉を見つめ、しばらく固まっていた。

「リズが……」

「僕達に……」

「タメ口……!」

「よっぽどショックだったってこと?」

セドリツクの問いに「たぶん」と答える。

「あの子、どうしてあそこまで……」

監督生が呟く。

ジャステインが言った。

「最近、リズは切羽詰まっているような感じで忙しくしてるんです。もしかしたら、秘密の部屋について調べているんじゃないでしょうか」

「その可能性は高いな」

「君達も知らないの?」

不本意ながら頷く。

「もっと、相談してくればいいのに……」

「そうだわ!」

私はひらめいて、ジャステインとザカリアスに言った。

「私、リズのことをずっと見守るわ。あんな状態なんだから、いつ倒れてもおかしくないわ。私、探して来る!」

「待てよ。僕も行く」

「僕もついて行きます」

「私も行くわ」

「僕も」

リズ。悪いけど、あなたが心配なの。だから、許してね。

*

『ほとんど首無しニツク』には、バジリスクの方に何かしないと救う手立てはない。犯人がバジリスクを使っていない可能性もあるが……。……ああもう、頭がごちゃごちゃして来た。私は何をすればいいの!?

図書館であてもなくウロウロしていると、目の前にこの夏休みで見慣れた長い赤毛があった。

「ジニー！」

ジニーはパツと振り返った。手には……日記、が。

「リズ！　お願いがあるの。何も言わずに、これを、これを！」

そう言つて、ジニーは日記を差し出して来た。ジニーの目の下にはくつきりとクマが出来ている。

「……わかりました。何も言わずに受け取ればいいのですね。それでジニー、あなたは私が、日記をどうすることを望みますか？」

「……………何もしなくていい。しなくていいから、お願い、それを持つていて」

「わかりました」

ジニーが立ち去ると、私はハンカチで日記を包み、ローブの内ポケットに突っ込んだ。日記を破壊する。それが私に出来る一番のことだ。

バジリスクの毒は手に入らない。ならば、悪霊の火を使うしかない。

私は図書館の、呪文などの本が置いてあるコーナーまで行くと本を何冊か抜き出し、猛スピードでめくり始める。

「リズ」

振り返ると、スーザン達三人と、セドリツク、そして監督生が立っていた。

「手伝うわ」

そう言つて、本を手を取った。

第39話 相談

スーザン達が協力してくれるらしい。しかし、素直に「悪霊の火の呪文を調べています、手伝って下さい」なんて言えるわけがない。

なら。別のことを頼もう。

「スーザン、あなたが一度決めたら引かない性格だということはおわかっています。なら、石化の能力を持つ魔法生物と、その対処法について調べて頂けませんか？」

「わかったわ」

「僕達はどうすればいい？」

「スーザンと同じものを調べて下さい。そっちの方が、断然時間が掛かるものですから」

魔法生物のコーナーに向かって歩き出した彼らの背に、ふと思い出したことを投げ掛ける。

「ああ、『虎七味社』の本があっても、それは調べなくて大丈夫ですよ」

「どうしてですか？」

「私が把握していますから」

・スーザン side

「やつぱり、教えてはくれないみたいね」

「どういうこと？ 調べ物を手伝えたじゃないか」

セドリツクの言葉に、私達三人は首を横に振る。

「リズは優先順位の高いものを先に調べるから、今リズが調べていることこそが一番重要なものなの。たぶん、私達には知られたくないのでしょうね」

はあ、とため息をつきつつ、魔法生物図鑑をパラパラとめくっている。

「スーザン、見つかりました？」

振り返ると、一冊の本を持ったリズが立っていた。私は首を横に振る。

「石化能力だなんて珍しい能力の魔法生物なんて、そうそういないわよ」

「でしようね。一つだけ可能性がある魔法生物がいるのですが――」

「なんですって?」

驚いたように監督生がリズを見る。その視線を受け止め、リズはザカリアスが見ていた『珍しい魔法生物百選』を取り上げ、ページをめくる。

「バジリスク。その魔眼を直接見たものは、瞬時に死に至ると言われています。ですが、それは直視した場合だけ。何かを通して見れば、例えば鏡やガラスなどですが、石化に留まるだけと言われています」

「何か弱点はないんですか?」

「鏡に映った自分の姿、雄鶏の鳴き声などですかね。退治の仕方は、簡単。首を刺せば死ぬでしょう。――バジリスクの牙にある毒に気を付ければの話ですが」

何も見ずに、スラスラと答えるリズ。

セドリツクが聞いた。

「バジリスクの毒は、解毒出来ないのですか?」

「出来ますよ。不死鳥の涙があれば一瞬で解毒出来ます」

リズの顔は無表情だった。

「手伝ってくれてありがとうございます。私の方も調べ物にひと段落したので、解散にしましょうか」

それだけ言うと、リズは図書館から出て行った。

*

「ふーん。バジリスクかあ」

ルーナは呟いた。

「あんたのことだし、何か対策は思いついたんでしょ?」

「信頼してもらえるのはありがたいけど、私は万能じゃないですよ」

言いながら、ポケットから小さなピンバツジを出す。

鷲のモチーフのそれを受け取り、ルーナは首を傾げた。

「何これ」

「バジリスク対策です。寮内及び、寮内から半径二メートル以内に蛇が出現したら大音量で雄鶏の鳴き声が流れるようになっていきます。」

これを、あなたの部屋のカーテンに付けておいて欲しいのです」

「談話室じゃないんだ」

「あなたがやると怪しまれそうでしょ。どこに付けても寮全体に効果があるんだから、あなたの部屋が一番リスクが低いと思ったんです」

「グリフィンドールとスリザリンは大丈夫なの？」

「グリフィンドールは、悪戯道具として双子に渡せば何とかしてくれるでしょう。問題はスリザリンなんですよね……」

「寮の場所がわかんないもんね」

「わかりますよ？ クリスマスの時期の合言葉も知っています」

「忍び込むんだ？」

「ハイリスク・ローリターンですがね」

ルーナがシフォンケーキを食べ終え、三つ目に手を出す。

「やっぱり、継承者はスリザリンは狙わないんだ」

「可能性は少ないでしょうね。スリザリン寮所属のマグル生まれや混血なら、狙われてもおかしくないですけど」

「継承者は誰なの？」

ルーナは平然と聞いてくる。だから、私も平然と答えた。

「スリザリン生じゃありませんよ」

「何でわかるの？」

「さあ、何ででしょうね？」

私はポケットの中で杖を握り、元から掛けてあった防音呪文を三重にまで掛け直した。それから口を開く。

「継承者は、ホグワーツ生を操っていました」

「今は違うんだ」

「ええ。操られていた本人から、その原因を差し出されましたから」

一瞬、ポケットから日記を出して見せ、そしてすぐにしまう。

「ルーナ。私はどうすればいいんでしょう？」

第40話 解決策

「あんた、未来がわかるんだ」

「……どうしてそう思うんです？」

「だって、原因が手元にあるのに、表向きに解決させた方がいいのか迷ってる。未来を知ってるから、それを変えたら悪い方向に変わってしまうんじゃないかって心配してる。未来を知らないなら、そんなこと考えない。あんたに見えてる未来は、ハッピーエンドなんだ」

レイブクロウ生の推理力には脱帽だ。私は少し脚色しつつ話すことにした。

「私には未来が見えます。しかし、それは全てではありません。十年後の世界なんてわかりませんし、逆にあなたの明日の朝食だとかの細かいこともわかりません。ですが、これは知っています。これがハリーの手に渡れば、学年末には事件は綺麗に解決する」

「何か問題があるんだ？」

「私の知る未来では、あと四人の犠牲者が出ます。もちろん石化に留まりますが、その時間は返って来ません。ミセス・ノリスは対策が不十分だったために石化しました。コリン・クリービーは私の不注意です。次の犠牲者を出さか出さないかは、ある意味私の手に掛かっているんです」

「次の犠牲者は、誰なの？」

「……ジャステインと『ほとんど首無しニック』です」

声が震えた。

「最後は、ハーマイオニーとペネロピー・クリアウオーター。そして、ジニー・ウィーズリーが秘密の部屋に連れ去られます」

「なんで？」

「ジニーが操られていた人だからですよ」

「連れて行って、どうするの？」

「ジニーの魂を吸収し、継承者は肉体を持った人間になるのでしょうね」

「未来って、結構細かく見えるんだね」

「未来は不確定です。些細な行動で、少し先の未来もまったく違うものになってしまう。私にはたった一つのルートしか見えません。どこかで脇道にそれた時点で、私は普通の人になります」

「あなたは脇道にそれて欲しいんだね」

「……」

「あなたは、普通の人になりたいんだ」

私は、何も答えない。

「けど、それで悪い未来になるのはもつと嫌なんだ。ハッピーエンドになって欲しい。けど、それが犠牲者達の時間を奪うことに繋がる。だから、あなたは迷ってるんだ」

ルーナは最後のシフォンケーキを食べ切った。

「それなら——」

ルーナは自分の考えを述べた。

私は紅茶を飲むと、ふっと息をはく。

「ありがとうございます。ルーナ。あなたに相談して良かった」
「当たり前でしょ。あなた、友達だもん」

ルーナも紅茶を全て飲み切り、カップを返して来た。

立ち去ろうとするルーナの背に、私はそういえば、と言った。

「あなたの新しい羊皮紙の束、どうやらルームメイトのベッドの下にあるようですよ」

「……そっか」

私達の関係は、浅いようで深く、深いようで浅い。

*

……さて。

決闘クラブ、どうしようかな。

第41話 決闘クラブ

決闘クラブの知らせが各寮に掲示された。私はいつもの三人と共にそれを見る。

「決闘クラブか……。どうしようかな」

「主催者は誰なのかしら」

「リズはどうします?」

「私は行きます」

ハリーがパーセルマウスだということがわかるイベントだ。ハリーはかわいそうだが、念のため行っておいた方がいいだろう。

三人も行くことにしたらしく、クラブが行われるという大広間へ向かう。

待つこと数分。ロックハートが華やかに登場した。

「皆さん、集まって。さあ、(中略)——詳しくは、私の著書を読んで下さい」

ロックハートの言葉を聞くと疲れることが経験上わかっているの
で、さらっと聞き流す。

「では、助手のスネイプ先生をご紹介しましょう」

ロックハートは満面の笑みで言った。

「スネイプ先生が(中略)さてきて、お若い皆さんにご心配をお掛けしたくありません——私が彼と手合わせしたあとでも、皆さんの魔法薬学の先生はちゃんと存在します。ご心配めさるな!」

つまり、私達の闇ひたすら点数を稼ぎまくる授業の魔術にたいする防衛術の先生が消える可能性はあるというわけだ。

「作法に従い、まずは礼をします」

ロックハートは大袈裟に礼をしてみせた。スネイプ先生は不機嫌に少し頭を下げただけ。そして、杖を構えた。

「三つ数えて、最初の術を掛けます。もちろん、どちらも相手を殺す気はありません」

そうか? ロックハートの言うことが正しいなら、スネイプ先生が相手を殺す気満々に見える私の目は異常ということになる。

「行きます。一、二、三——」

『『エクスペリアームス』!』

目がくらむような紅の閃光がロックハートの胸に突き刺さり、吹き飛ばした。男子勢から歓声上がる。

私? もちろん特大の拍手を送っておいた。

ロックハートがよれよれしながら立ち上がり、舞台に戻った。

「あれが、『武装解除の術』です。スネイプ先生、確かに生徒にあの術を見せようとしたのは素晴らしいお考えです。ですが、遠慮なく一言申し上げれば、先生が何をなさろうとしたかがあまりにも見え透いていましたね。それを止めようと思えば、いとも簡単だったでしょう。しかし、生徒に見せた方が教育的に良いと思ひましてね……」

「負け惜しみにも程があるだろ」

ザカリアスの眩きに、私達は激しく頷いた。

「模範演技はこれで十分! これから皆さんを二人ずつ組にします。スネイプ先生、お手伝い願えますか?」

まずこちらにロックハートが寄って来た。

「ミス・フォーリー、あなたはミス・ボーンズと。ミスター・フレッチリーはミスター・スミスとでいいでしょう」

よかった。

「相手と向き合って! 礼!」

私はスーザンに向かって礼をする。

「私が合図を出したら、武器を取り上げる術を掛けなさい。いいですね? 一、二、三——」

(『『エクスペリアームス』!』)

無言呪文で術を発動させ、スーザンの手から杖が離れた。

「いかがですか?」

「……リズ、手加減してちょうだいよ」

私はスーザンの杖を投げ返すと、お先にどうぞと手で示した。

『『エクスペリアームス、武器よ去れ』!』

遅い。

『『プロテゴ』』

盾を展開して呪文を防ぐ。その隙に、スーザンは再び武装解除呪文を掛けてきた。

杖を大きく一振りし、大きな氷の塊を創り出すことで回避する。

『インセンディオ！』

スーザンの炎が氷を溶かし、水蒸気をあげる。私は水蒸気を魔法で増やし、目くらましに使った。

スーザンが水蒸気を消そうとしている間に後ろに回り込み、武装解除呪文を掛けた。

「完敗だわ」

スーザンが氷に杖を向けるが、氷は消えなかった。

「……どうやったの？」

「氷に薄く盾の呪文を張っておいたんです」

「でも、炎は効いたわよ」

「目くらましに使えると思ったので、その時だけ解除しておきました」
スーザンがため息をついた。私は決闘の後片付けをして、引き分けに終わったジャステインとザカリアスの元へ向かう。

それからなんやかんやあって、ハリーとドラコ・マルフォイが見本になることになった。

「では行きますよ。一、二、三——」

『サーペンソーティア、蛇出でよ！』

マルフォイの杖の先から長くて黒い蛇が飛び出し、ハリーがギョツとするのが見えた。

「私にお任せ下さい！」

ロックハートが蛇に向かって杖を大袈裟に振ると、蛇は数メートル上空に飛び上がり、再び着地した。

蛇がジャステインに向かって威嚇する。

私が杖を出したとき、ハリーが叫んだ。

「！——」

パーセルタングだ。

『デリトリウス、消えよ！』

蛇がハリーの言葉に従う前に、私は蛇を消した。

今回やりたかったことは、パーセルマウスだとハリーに自覚させることだ。ジャステインを襲う気配を見せる前に消したから、たぶん大丈夫だろう。

そう思ったのだが、現実には甘くなかった。

みんなヒソヒソ話し始め、ハリーを遠巻きにし始める。ロンとハーマイオニーが駆け寄り、ハリーを引っ張っていくのが見えた。

……どうしよう。

第42話 材料提供

決闘クラブの翌日、私達は宿題を終わらせるために図書館へ来ていた。

と言っても、私とジャステインは既に終わらせてあるため、専らスーザンとザカリアスを手伝うだけだが。

「リズ、ちよつと良いかな」

背後から声が聞こえ、振り返ると、そこにはハリーが立っていた。ザカリアスがあからさまに警戒した表情を浮かべる。

「おい、リズ——」

「大丈夫ですから。ちよつと行ってきます」

そう言い残し、私はロン、ハーマイオニーの待つ本棚の陰へ向かった。

「リズ、私達、マルフォイが継承者なんじゃないかと思うの」

「証拠は？」

「これから掴むわ」

あ、まだなのね。

「で、ポリジューズ薬を使って、スリザリン寮に忍び込もうと思うの」
「なるほど。そこまで決まっているのに、なぜ私に声を掛けたんですか？」

「決まってるだろ？ リズがいれば百人力じゃないか」

過大評価し過ぎだよ、ロニー坊や。

それに、私は巻き込まれたくない。

「私は実行犯にはなりませんからね」

「「えー！」」

見事なハモリを披露したH^{ハリー}・R^{ロニー坊や}・H^{ハーマイオニー}。君ら仲良いね。

「えーじゃないです。私はドラコ・マルフォイのこと疑ってませんし、第一、私は薬が嫌いなんです」

「薬といっても、マグルの薬局に売ってるような苦い薬じゃないよ」

「知っていますか？ ポリジューズ薬は不味いですよ。それに私は、誰か人の一部分を入れた液体なんて真つ平御免ですから」

「そこを何とか!」

「グリフィンドールとスリザリンが仲良くなり、天と地がひっくり返り、太陽が西から昇って北に沈み、織田さんと明智さんが本能寺で仲良く杯を交わす関係になったら考えてあげます」

「つまり無理ってことね」

「はい」

織田さんと明智さん、もう死んでるし。

「ちなみに、オダサンとアケチサンって?」

ロンの言葉を笑顔でスルーし、私はハーマイオニーに言った。

「ただ、変身相手を教えて頂ければ、材料として必要な『相手の一部』は調達しますよ?」

「本当?　じゃあ、ハリーとロンの分なんだけど、クラブとゴイルの一部をお願い出来るかしら?」

「ハーマイオニーの分は?」

「ミリセント・ブルストロードの髪の毛があるわ」

「確実に本人のですか?」

「ええ」

「本当に?」

「逆に聞くけど、そうじゃなかったら誰の毛だっていうのよ」

「ミリセント・ブルストロードは猫を飼っていた気がするのよ」

「……確認しておくわ」

ハーマイオニー猫化事件は未遂に終わった。

「で、クラブとゴイルですね。了解しました。お任せ下さい」

*

アクシオ、クラブとゴイルの髪の毛(それぞれ一本ずつ)!

……来た来た。スコージファイ、清めよ!　こんなもんでいいかな。味がマシになっていることを願おう。私が飲むわけじゃないけど。

『クラブ』『ゴイル』というラベルを貼った小瓶にそれぞれの髪の毛を入れて……よし、完成。ハーマイオニーに渡しに行こう。

第43話 後悔

ジャステインが、襲われた。

決闘クラブの翌日に『ほとんど首無しニック』共々襲われなかったので安心していたのだが、今日になって石化していると発見された。『ほとんど首無しニック』はいないので、たぶんジャステインは窓ガラスに映ったバジリスクの目を見たか、コンタクトレンズ越しに魔眼を見たのだろう。

第一発見者はハリー。第二発見者はアーニーとザカリアスで、この件でハリー継承者説がほぼ間違いないという認識がホグワーツ中に広まった。

原作知識を持っているのに救えなかった。

原作知識を持っているからこそ、こんなにも悔しい。

私は日記を手放したことを、早くも後悔し始めていた。

ルーナに相談した結果、私は日記をハリーに渡すことにしたのだ。原作より早く日記を手にしたハリーは、たぶんハグリッドが継承者としてアズカバンに入れられたことを知るだろう。そして、ハグリッドに確かめに行くはず。ジニーの手には渡らないはずだった。

なのに、どうやってジニーは日記を手に入れたのだろうか。

ジニーに直接会うのは危険だ。ハリーに会って確かめよう。

*

次の日、変身術の授業を終えて寮へ戻るとき、ハリーと目が合った。その一瞬で開心術を使ってハリーの記憶を探ると、なんとハリーは談話室で教科書類と共に日記を出したようであった。たぶん、ハリーが余所見をしているうちに、慌てたジニーが日記を回収したのだろう。私のやることなすことが全て裏目に出ている状況だ。何とかしなくてはいけない。

けど……。

何をすれば良いんだろう？

*

・ハリー side

ジャステインが襲われてから、ますます僕を見る目が厳しくな
た。

廊下を移動している間にリズと目が合ったが、何か変な感覚になっ
た。リズも僕を疑っているということなんだろうか。

リズには信じてもらえらるうと思ひ、僕は図書館へ向かった。

スーザン・ボーンズ、ザカリアス・スミス、アーニー・マクミラン、
ハンナ・アボットが同じテーブルで羊皮紙を広げていたが、リズはい
なかった。僕はスーザンに声を掛けた。

「やあ。リズはどこ？」

言った瞬間、ザカリアス、アーニー、ハンナの三人の顔が変わった。
ザカリアスが低い声で言う。

「何だ？　次はリズを襲う気か？」

「違う。リズに話があるんだ」

「リズがお前と話すと思うのか？　お前はジャステインを襲っただ
ろう」

「僕じゃない！」

「静かにして。このままだとマダム・ピンスが来るわよ」

スーザンが言った。スーザンは無表情で僕を見、呟くように言う。

「リズは奥の本棚のところにいるわ」

「おい、スーザン！」

声を荒げたザカリアスに、スーザンが静かな声で言った。

「リズはポッターが継承者だとは思っていない。私にはそれで十分
よ」

僕は急いでその場を離れ、リズのところへ向かった。

「リズ、継承者のことなんだけど――」

「継承者がどうかしたのですか？」

心なしか、少し声が硬い。

「僕は継承者じゃないんだ。継承者はマルフォイだ」

「証拠はあるんですか？」

「ないけど――」

リズがパタンと本を閉じた。

「ハリー。あなたは自分がやられて嫌なことを人にやっているのに、この状況に文句は言えないんじゃないですか？」

「どういうこと？」

「たくさんの生徒が証拠もなくあなたを疑っているのと同じように、あなたもドラコ・マルフォイを根拠なく疑っているということですよ。というか、状況証拠ならあなたの方がありますし」

「でもマルフォイが、」

「彼は継承者じゃありません」

「証拠は！　あるのか？」

「思わず僕は声を荒げて聞いた。

「あります。けど、それを言ってもあなた方は信じないでしょうから、自力で調べればいいでしょう」

「リズ——」

「ごめんなさい。今、私、あなたと同じように気が立っているんです。また今度にして下さい」

リズは本を棚に戻すと、スーザン・ボーンズ達のところへ戻っていった。

第44話 目撃

クリスマス休暇が終わった。

私が警告したにも関わらず、ハーマイオニーは猫化したようだった。一度、お見舞いの品を持って訪ねてみたところ、私の差し出したものが気に入らなかつたらしく、拗ねてしまった。ちなみにお見舞いの品として持って行ったのは、猫じゃらしやキャットフードなどだ。

そういえば、ハリーが再び『リドルの日記』を手にしたらしい。ハーマイオニーによると、ハリーが『嘆きのマートル』のトイレで見つけて拾ってきたとのこと。前は全く調べることが出来ずに手放すことになってしまったため、今度こそ調べると息巻いていたそうだ。

失くさないように気をつけて下さいね、とだけ言つて、私は医務室から立ち去つたのだった。

時は変わつてバレンタインデー。

スーザン、ザカリアスと共に大広間に入った瞬間、私はようやく思ひ出した。——今日は、ロックハートが暴走する日だということ。

スーザンとザカリアスが揃つて自分の頬を引っ張り、目を開けてからこめかみをぐりぐりする。余程ショッキングな光景だつたんだろう。

大広間は、一言で言うところ、真っピンクだった。壁はピンクに塗られ、ピンク色の紙吹雪がヒラヒラと飛んでいる。ロックハート自身もショッキングピンクの格好で、私は精神がおかしくならないうちに、通路を挟んだ隣のレイブンクローのテーブルでのんびり朝食をとっているルーナに『ザ・クイブラー』の雑誌を借りた。

ザ・クイブラー片手に紅茶を飲み、トーストをかじる。その際、耳は一時的に活動を休止させ、全神経を左手の雑誌に注ぐ。そうすることで、私はロックハートの演説を全スルーすることに成功したのだった。

ロックハートの用意した醜いカード配達のキューピッド達は、廊下を駆け回つてカードを届けていた。一校時目の変身術の授業中、私は

ずっと不安に思っていたのだが、私の予感は見事的中した。

キューピッドが授業中にも関わらず、教室に乱入して来たのである。

私がコガネムシに向けていた杖をさつとキューピッドに向けた瞬間、キューピッド達は一瞬で硬直した。さつと杖を一振りすると、勢いよく扉に向かって吹っ飛んでいく。もちろん、キューピッド達もロックハートの犠牲者であるために手加減はしている。しているけれど、授業を妨害しようとしたことは許せない。

ちなみにマクゴナガル先生は、私が乱入者を処理している間、黒板の方を向いて見ないふりをしていてくれた。

変身術を終えて次の教室に移動しているとき、私は原作通りにハリーが呪文でドラコ・マルフォイから『リドルの日記』を奪い返すのを目撃してしまった。

第45話 再び後悔

「ハグリッドだったんだ。五十年前に『秘密の部屋』を開いたのは、ハグリッドだったんだ！」

ハリーの宣言を聞いて、私は慌てて『耳塞ぎ呪文』を辺りに掛けて回った。この会話を他人に聞かれたらまずいだろう。

そんな私の行動に関係なく、ハリーはロンとハーマイオニーに『日記』で知ったことを早口で伝えていた。

「……ハグリッドに直接聞いてみるしかないのかしら」

「そりゃいい。ハグリッド、最近毛むくじやらの怪物を誰かにけしかけたかい？ って聞いてみようか？」

ロンが皮肉で返した。

「ハリー、その怪物はどのくらいの高さだったんですか？」

「大きさ？ よくわからなかったけど……こんくらい、かな」

ハリーは手で三十センチほどの大きさを表した。

「おかしいですね」

「何が？」

「怪物の大きさです。私はバジリスクなのではないかと踏んでいたのですが……。一千年以上前から生きていたにしては、あまりにも小さすぎます。二代目バジリスクだったりするんでしょうか？」

「もしかしたら、それはスリザリンの怪物じゃないのかもしれないわ！」

ハーマイオニーが嬉しそうに言った。

「まず、ハグリッドはパーセルマウスなんでしょうか。そこを最初に確認すべきでは？」

「そうね。リズも一緒に行きましょう！」

「ちよつと待って。今日はクイディッチの練習があるんだ」

「私はスーザン達と宿題をやる約束があるので……」

「じゃあ、また今度行きましょう！」

マジかよ。『禁じられた森』には行きたくないんだけど。

何とか、森には行かずに済む方法を考えよう。

*

——『リドルの日記』がまた失くなった——
——グリフィンドール生か盗めないはずだわ——
——どうして盗まれたんだろう?——

*

「リズ、今日は珍しくお寝坊ね」

寮の自室で目がさめると、スーザンが朝の支度をしているところだった。

「あれ? 今日って何かありましたっけ?」

「忘れたの? 今日のはグリフィンドールとの試合じゃない」

——ああ、そうだった。中止になる試合だったか。

私は眠い目を擦りながら起き出すと、服を着替え、トランクから小さなハツフルパフの黄色い旗を取り出した。

「今日はそれだけなの?」

いつもは棚ひとつ分入っている応援グッズを引っ張り出して二人で持つて行くため、スーザンが不思議そうな顔をしている。

「今日はこれだけの気分なんです」

どうせ試合中止になるだろうし。——そこでハツと思い出した。

今日はハーマイオニーとペネロピー・クリアウオーターが石になるから試合中止になるんだった!

急に目覚めた私に、またもやスーザンが不思議な顔をする。

「どうしたの?」

「図書館に行かなきゃいけないんです! ちょっと先に行つてて下さい!」

私は慌てて寮を飛び出した。

三十分後。

石化した二人を見つけた私は、その場に座り込むしかなかった。誰も、助けられなかった……。

なぜ、私が原作知識を持って生まれたのだろう。未来を変えるような度胸がない臆病なのに、大して魔法の才能もないのに、ハリーのような勇気もないのに。

どうして、私が……。

一瞬、目の前が歪んだ。視界がぼやけ、景色が遠のく。そして、そのまま完全にブラックアウトした。

第46話 潜入

目を開けると、真っ白な天井が見えた。

「目が覚めた？」

目をこすり、声の主を見ると、校医のマダム・ポンフリーだった。ということは、ここは医務室なのか。

「あの、私、どうしてここにいますでしょうか？」

「覚えてない？ 『秘密の部屋』の被害者の横に倒れてたんですよ。たぶんショックと疲れがたまっていたからでしょうね」

確かに、ここ最近ろくに眠っていない気がする。

向かい側のベッドを見ると、ちょうどハーマイオニーが横たわっていた。

「襲われているところは見たの？」

私がぼーっとハーマイオニーを見つめていたからだろう。マダム・ポンフリーが聞いてくる。

「いえ……。石化した二人を見つけただけなので……」

「そう」

「あの、帰ってもいいでしょうか？」

原作ハリーは何があっても一晩入院していた気がするので、私は恐る恐る尋ねた。

「自己判断でいいでしょう。帰りたければ帰ってもいいし、体調が不安ならまだここにいなさい」

「帰ります」

マダム・ポンフリーの気が変わらないうちに帰ることにした。

*

あつという間に時が過ぎた。

私はずっとジニーから日記を取り返そうと画策していたのだが、ジニーの守りは堅く、失敗に終わっていた。

そして――

『彼女の白骨は永遠に『秘密の部屋』に横たわるであろう』

ジニーが秘密の部屋に連れ去られた。

*

私が『嘆きのマートル』のトイレの流し台を前に、どうやって入ればいいのか考えている最中、ハリー、ロン、そしてロックハートが登場した。

手早くハリーに蛇語で入り口を開いてもらい、パイプの中にロックハートを突き落として下見させる。

「じゃあ、行きましようか」

そういえば、ロンの杖が壊れていないから、ロックハートに逆噴射しないのか。ということ、ロンに背後から改良型錯乱呪文（錯乱時間は約三秒）を掛け、素早く偽物とすり替えた。逆噴射する優れものだ。

順番にパイプを降りて行くと、何かで埋め尽くされた場所に着地した。何かの正体は考えないようにする。

「骨だ……」

ハリーが一瞬で私の努力を打ち砕いた。悲しくなった私は、聞こえないふりをすることにした。

「見て下さい。バジリスクが脱皮した跡です」

「何メートルあるんだ？」

「どうでしょうね」

ロックハートが何かにつまづいて転ぶのが見えた。側にいたロンが呆れた顔をする。ロックハートは何気ない動作で立ち上がり――

「おいー！」

ロンの手からロンの杖（偽）を奪い取った。

ロックハートは私達三人に杖を向ける。

「さあ、冒険はここまでだ。今から君達の記憶を消す。先生方には、君達は蛇の脱け殻を見て、かわいそうなことに正気を失ってしまったと話せばいいだろう……」

「ジニーはどうするんだー！」

「手遅れだったと言えればいい。さあ、覚悟は出来たかな？」

ロックハートは大袈裟に杖を振りかぶった。

「『オブリエイト——っ!?!』」

バーンとロンの杖（偽）が逆噴射し、ロックハートは盛大に吹っ飛んだ。ロンの杖（偽）は、呪文の効果が三割増しになるようになってあつたから、ただでさえ強力な忘却術が凄いいことになっているだろう。

私はロックハートの手からロンの杖（偽）をもぎ取って言った。

「あれー、ロックハート先生が持っていた杖、偽物ですなー。おやー？

この杖、かの『魔法が必ず逆噴射する上に効果が三割増しになる騙し杖』じゃないですかー。ロックハート先生は自殺願望があつたんですねー（棒）」

「リズ、さすがに無表情で棒読みはやめないか？」

「笑顔の方が良かったですか？」

「……それも怖いけど」

「じゃあ私はどうすればいいんだ。」

「……僕の杖は？」

恐る恐るロンが尋ねてきたので、私は笑顔でロンの杖（真）を返した。「……なんでリズが僕の杖を持つてるの？」という声が聞こえたが、私は丁重にスルーさせて頂いた。

「……さて。そろそろ来るかな？」

私は何かを調べるふりをして奥の方へ進む。その瞬間、天井が崩れ落ちた。

ハリーはこちら側、ロンとロックハートはあちら側。二つを隔てる岩は、そう簡単には崩れない。なぜわかるのかって？ 私ら細工したからに決まってるじゃないか。

こうして、私とハリーがジニー奪還のため、『秘密の部屋』を進むことになった。

第47話 バジリスクの魔眼

『秘密の部屋』を進んでいくと、開けた場所に出た。真ん中には、ジニーが横たわっている。

「ジニー！」

私達は同時に叫ぶと、ジニーに駆け寄った。

ハリーがジニーを揺さぶるのを止めて、私は急いで脈を取った。大丈夫、まだ間に合う。

ジニーが抱きかかえている日記に手を伸ばそうとした瞬間、後ろから声を掛けられた。

「その子は目を覚ましはしない」

振り返ると、一人の青年が立っていた。リドルだ。

そう思った瞬間、私はジニーの手から日記をもぎ取り、杖を振りかざした。

「やめろ！」

「『ファインド・イグニス——！』」

「『ステューピファイ』！」

「『プロテゴ』！」

悪霊の火の呪文を完全に唱えきる前に妨害されてしまった。魔法でバリアを張って攻撃を防ぎつつ、私は立ち上がって応戦した。

「リズ、何を——」

「この人はヴォルデモートの『過去』です！　このままジニーを殺す気です！」

もう自分の知識を取り繕う気にもなれず、私はリドルと交戦しながらヴォルデモートの名の由来であるアナグラムのことを叫ぶように話した。

「じゃあ——」

「ハリー、君と話すのは後だ。まずは、邪魔者から片付けてやる！」

そう言うと、リドルはシューシューという息が漏れたような音で何かを言った。次の瞬間、パイプの入り口からバジリスクが飛び出して来る。

「リズを狙えって言ってる！」

ハリーが目を半分以上閉じてジニーを隅の方へ引つ張りながら叫んだ。

『通訳どうも！』『アグアメンテイ』！』

空中に水をばら撒き、

『『グレイシアス』！』

凍らせる。

秘密の部屋のど真ん中に背の高い氷のオブジェが出来た。その裏に逃げ込み、急いで自分の目に光の操作の呪文を掛ける。

「隠れても無駄だ。——！」

リドルがバジリスクに何かを言った。

バジリスクがオブジェに体当たりをして来た。バリアを張って氷の欠片が降って来るのを防ぎつつ、あちこちにある水溜まりに呪文を掛け、氷の槍をたくさん作り上げた。

『『フリペンド』！』

槍がバジリスクに降り注ぐ。その間に、私は地面に上向きにバリアを張った。

バリアに乗り、さらに盾の呪文でバリアを作って飛び移る。魔力を消費するのが問題だが、これで空中を移動すれば、高さの差が埋まるだろう。

ほぼ何の説明もされることなく戦闘が始まったために、途方に暮れているハリーと目が合う。私は開心術を応用し、ハリーにひとつのメッセージを伝えた。

『目を瞑って！！』

ハリーが目を閉じたか確認する間もなく、私はバジリスクの顔の前に飛び出し、杖から光の球体を出した。

球体は天井にぶつかると破裂し、目が受光量オーバーになるほどの光を出した——はずだ。目を閉じているからよくわからないが、呪文が正常通りの効果を発揮してくれば間違いなく目潰しになる。

ぱっと目を開けた瞬間、あらかじめ掛けておいた光の操作の呪文が効果を発揮し、私に見えている世界は薄暗い世界となった。一応コン

タクトレンズをしているから、石化はしても即死はしないはず。そう
思っ、バジリスクの顔をまっすぐ見て、空中のバリアを踏みしめな
がら、右手で杖を、左手で氷の槍を構えた。

バリアを蹴って宙を舞い、槍を片目に投げつける。ヒットしたか確
認するより先に、私はリベンジとばかりに呪文を唱えた。

『フイールド・イグニス、悪霊の火よ』っ!!!」

もう片方の目を呪われた炎が襲う直前、私はバジリスクの魔眼を見
た。自分の心臓がキュツと縮まったのを感じてから、口の中に仕込ん
でいた氷のボールを噛み砕くのに掛かった時間は、およそ0・67
秒。氷が砕け、歯と歯がカチリとなるのに0・31秒ほど。

その一秒にも満たない瞬間で、私はバジリスクの魔眼によって、石
化した。

第48話 日記の破壊

・ハリサイド

目の前で、リズが石化した。

目を閉じるようリズに言われた後、再び目を開けたのは、ちょうど氷で出来た槍がバジリスクの片目に吸い込まれるようにして突き刺さった時だった。そして、リズの杖から出た炎がもう片方の目を襲った瞬間、リズは石化したのだ。

その途端、リズが足場に使っていたバリアが消えたのか、リズの身体が地面に叩きつけられるようにして落ちた。駆け寄ると、リズは歯を食いしばり、杖を突き出した格好のまま固まっていた。まるで、最後の瞬間を切り抜いたような姿だ。

ふと、ポケットに覚えのないかさばりがあるのを感じた。僕は、リドルが何やら満足そうに話しているのを聞き流し、リズの作ったオブジェに隠れるようにしてそれを出した。

手紙だ。

『ハリー』

これを見てるってことは、私は石化したか死んだんですね。私の企みが成功していれば、無事バジリスクの目は潰れているでしょう。安心して戦って。

魔法が無事発動していれば、あなたのポケットにはポシエットが入っているはず。一年生のクリスマスに貸したのと同じものです。それに、たくさんの魔法を込めた氷のボールを作れるだけ作って入れておいたから、投げるなり割るなりして使って。

あと、リドルの本体は、『リドルの日記』だから、何とかしてそれを破壊すれば倒せるはず。一応断っておくと、氷のボールの魔法では日記は壊せないと思う。

封筒は、もし私が死んでいたら見て欲しいです。石化しただけなら、見ないで下さい。

健闘をお祈りしています。

リズ』

慌てて書きなぐったのか、かなり乱れた最後の字を読んでから、僕

はリドルの様子を伺った。何かを得意げに話していて、僕の様子はほとんど気にしていない。

封筒をポケットの奥の方にしまい、ポシエットを出して、中からボールをいくつも取り出す。とにかく投げまくって気をそらし、無造作に落ちている日記を拾わなければいけない。

リドルが息継ぎをし、また何かを言おうとした瞬間、僕はボールを思いつきり投げつけた。

大きな破裂音がし、同時に赤い閃光がリドルに向けて発射されたのを横目に見ながら、僕は走って日記を拾い上げた。

バジリスクが暴れる音が聞こえたので、五つほどボールを投げつけると、一つは赤、二つは黄色の閃光が飛び出し、残りの二つからは盾の呪文が展開された。色々な呪文がランダムで入っているみたいだ。

とりあえずひたすらボールを投げまくりながら、僕は日記を破壊できそうなものを探した。リズの魔法が効かないなら、岩で殴りつけても破壊は出来ないだろう。他は……。

バジリスクの牙が目にとまった。ハーマイオニーが握っていた紙には、バジリスクの牙には毒があると書かれていた。あれなら日記を破壊出来るだろう。

リドルに向かって、ふた掴みほどのボールを一気に投げてから、僕はバジリスクに向かって走り出した。

——僕も死ぬかもしれない。けど、リズだつて自分を犠牲にしてまでジニーを救おうとしたんだ。このくらい、なんてことない！

そう思った瞬間、僕の頭の上に何か落ちて来た。組分け帽子だ。頭上には、ダンブルドアのペットのフォークスがいる。

僕は無意識に帽子の中に手をやり、剣を引き抜いた。それを振りかざし、目の前にあるバジリスクの口内を斬り付けて閉まらないようにしてから、思いつきり下の牙に日記を突き刺した。

「やめろおおおおおおお!!」

リドルの叫び声を聞き、僕はもう一度剣を振りかぶってバジリスクの口内に突き刺した。その時に同時に自分の腕に牙が刺さった。

鈍い痛みを感じながら、僕はリドルが消滅していくのを見つめてい

た。

第49話 あちらの世界

・ハリサイド

バジリスクが死んだ後のことは、ぼんやりとしか覚えていない。

自分の腕に刺さったバジリスクの牙を抜いたとき、そのまま意識が遠のきそうになったが、癒しの力がある不死鳥の涙によって毒は解毒され、助かった。あの岩をどかしていたロンがすぐに駆けつけ、ジニーの様子を確認すると、すぐに目を覚ました。ジニーが何かを言っていたが、あまり聞いていなかった。

石化したリズを背負って来た道を戻り、信じられないほどの力を持つフォークスによって空を飛んで『嘆きのマートル』のトイレまで戻った後は、まず医務室に向かった。

医務室に入った途端、ボロボロな僕達と石化したリズを見て、その場にいたマダム・ポンフリーとマクゴナガル先生は一瞬固まっていたが、次の瞬間にはリズはマダム・ポンフリーの手に渡り、マクゴナガルは光の速さでどこかへ行ってしまった。

マクゴナガル先生が戻って来た時には、なんとダンブルドア先生も一緒だった。僕はロンと一緒に、『秘密の部屋』のことを突き止めたのか、そしてどのようにリズが石化したのかを説明すると、ダンブルドアは少し考え込んだ後、僕達三人にそれぞれ二百点をくれ、さらにホグワーツ特別功労賞をくれることになった。

あとは、石化した人達が戻れば解決だ。

*

ふと目を開けると、そこは真っ白な世界だった。

こぶし大の大きさの光の球となっている私は、前世の自分の姿形を頭の中でイメージする。次の瞬間には、私は私が想像した姿になっていた。

ここに来るのは、これで二度目。たぶん今は、石化真っ最中か、もとに戻ったばかりの状態なのだろう。死に掛けたために、この世界がとても心地よく感じる。

ジャステインやハーマイオニーも、ここに来たんだろうか。それと

も、私だけなんだろうか。わからないが、私は遠くに見える白い大きなベールのところまで飛んでいった。

ベールの向こうには、『生』の世界がある。このとてつもなく大きなベールが『生』と『死』の世界を分ける。『死』の世界から『生』の世界を見ることは出来るが、逆から見るとは不可能だ。

初めてベールに触れた時は、とても薄く見えるのに、どうやっても向こう側に行くことが出来なかった。その後、もう一度触った時はベールに吸い込まれるような感覚がして、次の瞬間には転生していた。今度はどうだろう。手を伸ばして触れてみると、ベールは最初と同じように優しく、しかし確かに私の手を押し返してきた。

『今のあなたには、行くことは出来ませんよ』

優しい女の人の声が聞こえ、私は久しぶりに日本語で聞いた。

『どうして?』

『あなたは、今は『リズ・フォーリー』ではないから』

確かにそうだ。今の私の姿は前世の私。心は『リズ・フォーリー』ではない。

『……私、今でもあの頃に未練があるんだ……』

我ながら呆れてしまうが、内心納得出来ていた。あちらの世界は、どんなに辛くても楽しいことではいっばいだし、美しさに溢れている。一度死んだ身としては、毎日がワクワクして、寝る間も惜しいほどだ。そこまで考えて、私はハッと気がついた。この前まで、私はまた命があることが当たり前のように考えていた。命の素晴らしさを忘れていた。

『リズ・フォーリー』であることを、小さい頃はあれだけ嬉しく思っていたのに……。

私の姿が、前世のものから『リズ・フォーリー』のものに変わる。

『……準備が出来たようですね』

『はい。……行ってきます』

再びベールに触れると、自分がベールをくぐったのがわかった。

目を覚ましたら、何をしよう。

自分の心がワクワクするのがわかった。

第50話 二度目の決意

目を開けると、まず最初に見えたのは天井だった。

数秒ほどぼんやりと真つ白な天井を眺め、ハツとして起き上がった。

「リズー！ 気がついたのね！」

スーザンが嬉しそうに駆け寄ってきた。

私は少し考え、スーザンに尋ねる。

「私が石になってから、何日経ちましたか？」

「数時間よ。マンドレイクの薬が出来ていたから、すぐに石化は解けたのよ。けど、少なくとも二時間は眠っていたわね」

「……石化が解けたってことは、事件は解決したんですね」

「そうよ。ポッターがリズにとても感謝していたわ」

感謝されるようなことをしただろうか。記憶を探るが、石化直前の記憶はどうも曖昧で、正確なことは思い出せない。

「大丈夫？」

考え込んでいた私の顔をスーザンが覗き込む。私は笑顔を作ると、ベッドを出た。どのように事件を解決したのか、ハリーに聞かなければいけない。

ハリーがどのようにリドル及びバジリスクを倒したのか聞いたとき。ハリーがどうにかして原作通りドビーを解放することに成功したことを知った。私達三人が大幅に加点されたのは医務室でだと思っていたからどうやったのか不思議だったが、疲れていたので聞くはやめた。また後日聞けばいいだろう。

今年一年は、やる事なす事が裏目に出る——とまではいえないが、あまり上手くいかなかったように思う。『ほとんど首無しニック』を除いて誰一人犠牲者を救うことは出来なかったし、日記をハリーに渡したらジニーの手に戻ってしまうなどのハプニングも起こった。原作でちゃんと犠牲者が出る日がわかっていたにも関わらず、直前まで忘れていたりした。

たぶん、私は焦り過ぎていたのだろう。焦るあまりに空いている時

間は『必要の部屋』にこもり、睡眠時間が減る。睡眠時間が減ったから、疲れが溜まって作業効率が落ち、さらにはミスが増える。だからまた『必要の部屋』にこもり——最悪の循環だったのだ。

私は転生者だし、原作知識も持っている。しかし、その前に私は一人の人間なのだ。いつかルーナに言ったように『私は神じゃない』のだ。何でもかんでも上手くいくわけではない。

自分のペースで、自分の出来ることを。

来年からは、それを忘れないようにしよう。

*

『秘密の部屋』に関する事件が無事解決したことにより、学年末試験は取り止めとなった。あとは得点発表などが行われ、午後にはホグワーツを発つ。

朝食をとり到大広間へ来たとき、私はふと思い出してグリフィンドールのテーブルへ向かった。

「おはようございます、ハリー。今いいですか？」

「ああ、リズ。どうしたの？」

「封筒を持っていきますか？」

一瞬ハリーはキョトンとしたあと、「ああ」と納得したようにポケットから封筒を出した。もし私が死んでいたら見てほしいといって預けてあったものだ。

「中身は見てませんよね？」

「見てないよ」

念のため、気が付かれないように開心術で真実か否かを確認めたあと、私はその場で杖を振って封筒に火をつけ、燃え尽きた灰を消し去った。

私の全てが書いてある手紙だ。生きているうちは誰にも見られるわけにはいかない。

「何が書いてあったの？」

ロンの問いには、

「秘密です」

ウイंकで誤魔化す。

今年の寮対抗戦を制したのは、なんとハツフルパフだった。獲得点数、なんと八百十二点。二位のグリフィンドールに大きく差をつけての優勝だ。

去年あれだけ悔しい思いをしたら、人間はここまで頑張ることが出来るのかと唾然としたが、真面目で努力家が多いハツフルパフだ。少しずつコツコツと点数をためていったのだろう。私もそれに貢献できたようでよかった。

来年の事件は、シリウス・ブラックについてがほとんどだろう。これは全く介入する必要がないと言っても過言ではない。というより、逆に介入のしようがない。だから、一年でたくさんの知識を身につけておこう。後々にきつと役に立つはずだ。

——魔法界が笑顔溢れるステキな場所になってほしい。そして、それに少しでも貢献したい。

一年生の頃の決意を、忘れずに生きていこう。

第3章 アズカバンの囚人 第51話 漏れ鍋

朝起きたら、まず日刊預言者新聞をチェックする。

その行動がすっかり定着した頃、大事件が起こった。

そう、大量殺人鬼シリウス・ブラックが、魔法使いの監獄アズカバンを脱獄したのだ。

まあ、私はそれが冤罪だと知っているので、私の中での認識は『大量殺人鬼（嘘）シリウス・ブラック』のようになっているのだが。多分、数日前のウィーズリー家がエジプトへ旅行に行ったときの記事に添えられた写真から、指が一本掛けたネズミ（仮）を見つけて脱獄を決意したのだろう。

その記事を見つけた瞬間、私は家を出て漏れ鍋に泊まることにした。

今年一年で私がやることは、様々な魔法を学び、出来るだけそう遠くはない未来に備えること。だが、原作に関わらないとはいえ、ちゃんと歯車が狂っていないかチェックはするつもりだ。

例えば、私が存在することによって、向かい側から来た人が避けた先にネズミ（仮）の尻尾があつたとしたら、たぶんネズミ（仮）は痛みあまりにネズミ（仮）からピーター・ペティグリューに戻ってしまうだろう。今のは極端過ぎる例だが、少しずつ色々なことが変わったことにより、ピーター・ペティグリューが変な気を起こしてハリーを殺そうとしたりだとか、そのようなことが起こらないように見守ってはおくべきだろう。

この世界が原作から外れた道を行くとしたら、その未来は私にはわからない。もしかしたら、その瞬間は悪く思えても、最終的に原作以上のハッピーエンドになるかもしれない。だが、それは私には知りようがないのだ。私は私がよかれと思ったことをする。それだけだ。

漏れ鍋に泊まり、ダイアゴン横丁を探検したり、書店に毎日のように通ったり、宿題をさっさと終わらせたご褒美に特大のチョコチップ

のアイスを食べたり、ロンドンまで出て美味しいものを食べたりして楽しい毎日を送る。

来年は、ムーディに化けた過激派死喰い人が一年間一つの屋根(?)の下にいるわけだし、再来年はガマガエル(真)がホグワーツで改革を起こそうとして暴走したりするから、今年のうちにたくさん楽しんでおかないといけない。ホグワーツに行ったらS・J・Zと一杯遊んでおこう。そう決意を固めた私は、飲み物でも貰おうかと宿泊部屋を出てパブに下りた。そこで、ここに来た本来の目的を発見する。

「あ、ハリー」

「リズー」

ハリーが駆け寄って来た。あれ、ハリー背が伸びた？　もともと私より高かったけど、さらに差がついたような……うん、気のせいだ。きっと気のせい。

「で、どうしたんです？　久しぶりに会ったおばさんを膨らませて家にいづらくなつたから飛び出して来たとかじゃないですよね？」
「違うよ、リズ。いづらくなつたんじゃないやなくて、いられなくなつたんだ。あのままあの家にいたら僕はきつと今頃死んでるよ」

おばさんを膨らませたことは否定しないだね。ていうか、ハリーは基本的に原作からブレないな。そういう補正でも掛かっているの？

既に魔法省大臣と会い、ここに宿泊することになったというハリーとチェスでもしようかと、私はハリーを連れて自室に戻った。

第52話 吸魂鬼

杖、OK。守護霊の呪文を入れた氷の球体、OK。チョコレート、OK。寒さ対策のマント、OK。

ホグワーツ特急に乗り込む準備は出来た。

「リズ、どうしてホグワーツ特急に乗る前にそんなに険しい顔をするの?」

「険しいですか? 無表情だと思ったんですけど」

「どつちにしろ怖いよ」

そうロンに言われてしまったので、私は仕方なく表情を和らげた。吸魂鬼が近寄ってくる可能性があるのだから、思わず私が顔をしかめてしまうのも仕方ないだろう。……そうだねロン、君はそんな未来が来るとは微塵も思っていないよね。

吸魂鬼に備えて辺りの気配を探っていたら、私はいつの間にかみんなと一緒にルーピン先生のいるコンパートメントに座っていた。

「……あれ、いつここに来たんだっけ」

「リズ、どうかした?」

ジニーが心配そうに聞いてくるが、私は誤魔化した。

吸魂鬼が来ないかが気になって始終上の空だった私は、シリウス・ブラックについてハリーが何か言っているのを聞き逃したが、たぶん大丈夫だ。ハリーは（原作知識の）期待を裏切らない。きつと原作通りのことを話しているだろう。

「あ」

少しだけ寒気がした。

来る。奴が、来る。

ポケットの中の杖を握り締めた瞬間、今度はかなりの冷気がコンパートメントを満たした。

「何なの、これ……」

コンパートメントの扉がゆっくり開かれ、吸魂鬼が顔を覗かせた瞬間、恐怖が私を襲った。あの時のことを。つらかった時のことを。

『『エクスペクト・パトローナム』っ!!!』

練習した時、最終的にスムーズに出せるようになったはずの守護霊が、霞となつて出てくる。焦ってしまう上に、手がかじかみ始めて杖を力強く握れない。

「リズー」

ハリーの声で我に返り、私はポケットから氷を取り出すと、全て投げつけた。

今の私の状態を示しているのか、全て霞の状態で出てくる。

『エクスペクト・パトローナム』!! お願ひ、出て! 『エクスペクト・パトローナム』!!』

吸魂鬼が少しずつ迫ってくる。杖を必死に振っても霞しか出ない。恐怖で心が一杯になったその時。

『エクスペクト・パトローナム』

初めて聴く、低い声が背後からした。振り返るとルーピン先生が杖を構えていて、その杖先から出た霞が勢いよく吸魂鬼を追い出す。

歯を鳴らしながらハーマイオニーが扉を閉めると、ようやく室温が戻つて来た。

私はかじかむ手で包装を破り取ると、板チョコを割つて全員に配つた。

「よく対処法を知ってるね」

ルーピン先生の言葉には、

「そんなことより、もっと早く対処して欲しかったです」

素っ気なく返す。初対面の新人教師に言うことではないが、紛れもない本音だ。

「私は車掌と話してくる。板チョコをちゃんと食べておくんだ。いいね」

渡された板チョコを持って震えている一同を見てルーピン先生は言うど、コンパートメントを出て行つた。

守護霊の劣化版とも言える霞のお陰で気絶はしなかったようだが、ハリーは真っ青だった。

「大丈夫ですか?」

「ああ。……でも、何か悲鳴のようなものが……。いや、何でもない」

やはり防ぎきれなかったか。

「そんなことより、リズは大丈夫なのか？」

ロンの問いに、首を傾げる。

「どういう意味ですか？」

「君、ハリーに負けず劣らず真つ青だよ」

「不可抗力、ですから」

私はそれだけ答えると、マントに包まってチョコをかじった。

第53話 過去

私は転生によって魔法使いに生まれ変わった。転生ということはつまり、一度『死』を迎えていることを意味する。

私が死んだのは、十四歳の時だった。

死因はただ単純に、友達といざこざがあつて、ちよんつと押された拍子に窓から落ちた。生まれて初めて喧嘩したことがそのまま死因に繋がるなんて、笑えない。

まあそんなわけで、私は高所恐怖症なのです。あと、争いごとも基本的に嫌いです。自分の死因なんでもん。好きになる方がおかしいよね。

肉体年齢十二歳、精神年齢二十六歳。今年で十三歳になり、生前の年齢に近付いている最近。よく、生前の頃の夢を見るが、さらに追い討ちを掛けるように吸魂鬼からの恐怖。……もう今年は生きていける気がしないよね、うん。

と、言うわけで。

『私の感情の影響を受けないよう設定した守護霊を氷の中に仕込もうプロジェクト（略して『プロジェクトS』）』くくく！

ちなみに『S』は、せっついてい、しゅごれい、しこもう、のSだ。

念のため言っておくと、これは脳内での出来事であり、実際に声に出してはいない。だってホグズミード駅からの馬車の中で突然意味不明のことを叫び出したら変人だもんね。

でも、どうやったら良いんだろう。パツと考えてみると、何かプラスのエネルギーを発するものを媒体として守護霊を作り、それを氷に閉じ込めるのが最適なのだが――。

「あ」

「どうしたの、リス？」

「宴会、抜けちゃダメですかね？」

「……そんなに気分が悪いの？」

ハーマイオニーが深刻な顔で尋ねてきたので、私は慌てて誤解を解いた。

「いえ。あの吸魂鬼に然るべき報いを受けてもらおうと思うので、すぐにでも図書館に行きたかったのですが……」

「……ダメでしょうね」

「やっぱりか。がつくし。アレが使えるかもしれないから、早く試したいんだけどなー……」

「しょうがない。脳内で勝手に考えておこう。」

「私が思いついたのは、フェリックス・フェリスだ。」

「去年作った試作品は、もともとフェリックス・フェリスの調査には六ヶ月掛かるので「そんな待てねえよ！」という心の声に従い、出来るだけ効果を落とさないようにと自分なりに頑張つて考えた時短レシピを使ったものである。知恵熱出すほど頑張つたわりには、六ヶ月の調査期間を一ヶ月に縮めた上に、材料費を惜しんで出来る限り似た効果を持つ材料を正規のものに変えて作ったために、時間は一分程度、効果はじゃんけん三回勝負をしたら、なんとか全勝出来る程度である。私の脳内には、幸運↓幸福↓幸せという連想ゲームが出来ているので、試してみようというわけだ。」

「ホグワーツに着いたら、早速やってみよう。」

第54話 新学期

ホグワーツに到着した瞬間、ハリーとハーマイオニーがマクゴナガル先生に誘拐されていった。

ぼんやりと記憶を探ると、確か吸魂鬼によって気絶した原作ハリーと『逆転時計』を使うハーマイオニーがマクゴナガルの事務室に連れて行かれるんだったか。ハリーは気絶しなかったが、大事をとってルーピン先生が連絡したのだろう。

組分けが全て終わり、少ししたところで二人は帰ってきた。大方原作通りの出来事があったんだろう。

「新学期にあたっての注意事項じゃ。ホグワーツ特急での捜査で知っている人も多いじやろうが、我が校は現在、アズカバンの看守である^{ディメンター}吸魂鬼を受け入れておる。魔法省からの依頼で来ているのじゃ」

ダンブルドアは一度言葉を切った。

「吸魂鬼は城の入り口という入り口を固めておる。彼らがここにいる限り、何があっても誰も許可なしに学校を離れてはならん。吸魂鬼は悪戯や変装程度で騙せれるような存在ではない。『透明マント』でさえ無駄じゃ」

ハリーとロンが、チラツと目を合わせるのが見えた。

「言い訳などを聞いてもらおうとしたって無駄じゃ。吸魂鬼には気をつけるように」

ダンブルドアのその言葉を聞いてから、やっぱり原作とは大差ないのだろうと考え、早速実験のために必要なものややるべきことをリストアップする。余計な雑念は全て脇に置いておき、脳内にディスプレイを出してリストアップしたことを打ち込む。最近、閉心術のハイレベルな応用として、余計な音や思考をシャットアウトすることが出来るようになってきた。デメリットは話し掛けられても気が付かないことだが、些細なことだ。

「リズ？　　おーい、リズ？」

些細なことだ。

ディスプレイの文字を保存し、現実世界に戻って来ると、既にテー

ブルの金の皿には料理が山盛りだった。

「お、おいしそう。いただきまーす」

両手を合わせ、ちゃんと挨拶をしてから、お皿にバランスよく野菜を取り分ける。

「……」

ザカリアスが睨んでいる気がするが、スルーしてサラダを食べ、次は肉類だ。ローストビーフやステーキなど、エネルギーとなるものを食べ、水を飲んで口の中の味をリセットし、私にとってのメインであるデザートに移る。

チョコレートムースやチョコレートケーキ、フォンダンシヨコラなど、テーブルの上に所狭しと並べられたデザートを一通り味わってから、私はザカリアスを見た。

「……リズ、何か僕に恨みでも?」

「ありましたっけね」

「あるの!?!」

ないっす。

「で、リズ、吸魂鬼のことなんだけど」

「吸魂鬼がどうかしましたか?」

「リズ、大丈夫なの?」

「大丈夫ですよ。今、対策を考えている途中です」

「なら良いんだけど」

……今年も、急がず焦らず、マイペースにやっつけていこう。

第55話 買収とフラグ

フェリックス・フェリシスを使った守護霊の呪文強化は、失敗に終わった。やっぱり幸運と幸せは、漢字は同じでも厳密には違うらしい。確かにラッキーとハッピーで違う言葉だし。

こうなったら、手はひとつしかあるまい。

「と、いうわけで、まね妖怪を貸して下さい」

「いや、貸して欲しいと言われても……」

私の前で困った顔をするのはルーピン先生。だが、ここはなんと少しでも先生の協力が必要なのだ。

「お願いです、守護霊の呪文はこのご時世で覚えておいて損はないじゃないですか。ちゃんと原型をとどめた状態でお返ししますから」

「いや、まね妖怪に原型があるのかすらわからないんだけど……」

「このままじゃ不安で勉強に専念出来ませんよ。もうまね妖怪の授業は終わってますし、あとは処理だけですよね？　ここはまね妖怪を助けるためと思って、私に貸して下さいませんか？」

「うーん、でも……」

「大丈夫です。リデイクラスはマスターしましたし、チョコレートは大量に買い込んであるので」

未だにうーんと唸って迷っているルーピン先生を見てあることを思い付き、それを実行に移すことにした。

「先生、三十分だけ待って下さい」

三十分後、ルーピン先生の前の机には、スタンダードな板チョコから始まり、マグル界製、チョコレートケーキ、ブラウニー、チョコレトカップケーキ、チョコチップクッキーなど、考えられる限りのチョコレート製品が所狭しと並べられていた。

ルーピン先生は、一瞬キョトンとした後に苦笑いを浮かべ、まね妖怪の貸し出し許可を出してくれた。

「ちなみに、なんで三十分でこれだけのチョコレート製品を用意できたんだい？」

「……吸魂鬼対策に決まってるじゃないですか」

最終手段^{賄略}として用意していたとは、口が裂けても言えない。

* 「と、いうわけで、ルーピン先生にまね妖怪^{ボガート}を借りてきたのですが、危険が予想されるので、今から二時間ほど寮の部屋にこもりたいのですが」

「ああ、いいわよ」

ルーピン先生に「危険だから、他に誰もいない部屋でやること。ルームメイトに頼んで、寮の部屋を使わせてもらうのがいいだろう」と言われてしまったら、当初の予定通りに必要の部屋でやることなど出来ない。

迷うことなく頷いてくれたスーザンに感謝しつつ、私は預かったトランクを引きずるように部屋へ向かった。

「……さて」

私はトランクをベッドの上に乗せ、油断なく杖を構えた。

*

・スーザン side

「……何やってるのよ、リズ」

「見ての通り、守護霊の呪文の練習です」

私は目の前の光景に呆然としていた。

まず、ベットの上のガタガタ言っているトランクには、まね妖怪^{ボガート}が入っているのだろう。その脇には、大きな吸魂鬼^{デイメンター}の写真が。そして、リズは机の上に所狭しと並べられたチョコレート製品を次々に口の中に放り込んでいた。

「あ、スーザンも食べます？　今紅茶を用意しますから」

「あ、うん、頂くわ」

つい、いつも通りに答えてしまったが、これほどの量のチョコレートを取扱しなければならぬほどの事をリズは行なっていたのだろうか。

「どうぞ」と出された紅茶に口をつけつつ、フォンダンシヨクラにいちごを添えた小皿を丸テーブルまで持って来たリズに聞く。

「守護霊の呪文の練習って、どうやってやるの？」

リズは一瞬キョトンとした後、教えてくれた。

「まず、一番はまね妖怪ポガートを吸魂鬼デイメンターの姿に変えさせることですね。これが一番苦労しました。なにせ、中々姿を変えてくれないので」

「どうやったの?」

「最初は吸魂鬼デイメンターの姿をとにかくイメージしたり、怖い思い出を思い返したりしてみたのですが、中々上手くいかなくて。次は説得ですね。守護霊の呪文はプラスの感情のエネルギーからなる呪文なので、食らったら絶対良い気分になれるとか言って写真を見せたり。最終的には買収しました」

「……どうやって?」

「これです」

勉強机に山積みになっているチョコレート製品を漁り、リズはバスケットを渡してくる。

「マカロンね」

「はい。まね妖怪ポガートも気に入ってくれたみたいで、快くお願い引き受けてくれました」

「ひとつ貰ってもいい?」

「どうぞ」

緑色のマカロンが気になったので、食べてみると。

「……何これ、凄く美味しい」

「ああ、抹茶ですね。日本という極東の島国のお茶です。気に入りましたか?」

「ええ!」

「では、また抹茶味のスイーツを作っておきますね」

嬉しそうな表情のリズの背後にある、山積みのチョコレート達を見て、私はようやく最初に気になった事を聞いた。

「リズ、守護霊の呪文って、こんなにたくさんチョコレートの無いと出来ないの?」

「……ああ、これは、調子に乗って作り過ぎた結果です。本当はこの二倍はあったんですけど、半分はルーピン先生にあげたので」

「どうして?」

「まね妖怪を借りるためのワイヤー……お願いの品として」

……ルーピン先生、お菓子でリズに買取されたのね。

「でも、こんなにたくさん、消費するのが大変ね。手作りなら賞味期限も早いでしょうし」

「大丈夫です。ハツフルパフ生達に協力してもらいますから」

……え？

*

と、いうことで、今夜のハツフルパフ寮内は突然始まったお菓子パーティーで大盛り上がりだ。

夕食前、忙しい中厨房にお邪魔し、チョコレート製品以外のスイーツを作ったり、紅茶やジュース類も調達しておいたから、味に飽きたり口が渴いてしまうこともない。もちろん、水も用意しておいたから安心して大丈夫。

そういえば、『アズカバンの囚人』、何か厄介な出来事ってあったっけ？

……多分、私に関わるようなことは無いよね。

……もしかして私、今フラグ立てちゃった？

第56話 ハロウィーンと罫

「リズ、許可証を持ってないけどホグズミードに行くにはどうすればいい?」

「許可証の捏造ですかね」

真顔で聞いて来たハリーに真顔で返すと、ハリーとロンは揃ってガツクリと項垂れた。

それだけで全てを察した私は、意地悪とは知りつつも追いうちをかける。

「何なら、私が字を変えて許可証にサインしてあげましょうか? いくらマクゴナガル先生でも、あなたの叔父さんと叔母さんがサインしたのかどうかはわからないでしょう」

「それがわかっちゃうんだよ……」

「許可証にサインが貰えなかったこと、言っちゃったんだ……」と咳くハリーに心の中で謝りつつ、代案を述べる。

「図書室の娯楽コーナー、一番奥の棚の一番下の段、一番左端。著者は――」

「ミステリズ・ガール、出版社は『虎七味社』、だろ?」

「残念ながら、自費出版のようで出版社からは出ていません。著者は『悪戯仕掛け人』です。が、役に立つ内容とは言えませんね」

「リズ、ありがとう!」

「いえいえ。これ、お詫びの品です」

そう言つて差し出したのは、『グリフィンドール・クッキー』である。いちごジャム、プレーンの生地を使って市松模様を作ったアイスボックスクッキー。食紅は使いたくなかったので、濃いピンクと小麦色だが、まあこれもグリフィンドールカラーだと強引に自分を納得させる。

「お詫びの品?」

「はい。あの本を読んだ後に納得して頂けると思います」

……だつて、あの本に書かれているのは、学校中に悪戯を仕掛け、先生方の注意がそちらにいつているうちに抜け出すという方法なのだ

から。

(あなたたちには、別の手段があったでしょうけどね)

心の中で呟きながら見た方向には、もちろん、闇の魔術に対する防衛術の先生がいた。

*

ハロウィーンの朝。

七時に談話室に戻ると、既にS・J・Z・がテーブルを囲み、今日の予定を話し合っていた。

「おはようございます、リズ。リズもホグズミードに行きますよね?」「もちろんです。気になるところもありますしね」

特にハニーデュークスは。すっぱいペロペロ酸飴とか、超気になる。今度溶かしてザカリアスのドリンクに混ぜてやろうか。

「で、ちなみに何をしてたんだ?」

ザカリアスの問いには、

「気の毒な居残り組と、とあるご婦人に差し入れを」

*

結論から言うと、ホグズミードはとても楽しかった。

ハニーデュークスのお菓子は、試食できる限り試食した。ここで売っているものは基本的に手作り出来ないようなものなので、気に入ったものは買っておく。ルーナへのお土産も忘れずに購入。

『ゾンコの悪戯専門店』は、一度入ったものの、あまりの人の多さに人酔い。耐え切れずにすぐに出て来たのだが、気を遣ったジャステインも一緒だ。一人で待っているから大丈夫だと言ったのだが、人の良いジャステインも一緒に居てくれるという。申し訳ないが、ここは甘えさせてもらうことにした。

次に、ザカリアスの提案で『叫びの屋敷』へ。『大量殺人鬼(嘘)シリウス・ブラック』の拠点だと知っている私は、さりげなく「怖いので中に入るのはやめましょう」と言っ、大量殺人鬼(嘘)との対面を避ける。外から見ての感想は、ボロ屋敷。中も似たようなもんだらうと納得した三人とともにその場を後にし、ホグズミードで有名のパブ『三本の箒』でバタービールを飲み、ホグワーツへと戻った。

さあ、次は待ちに待った夕食だ。

*

・ハリースide

今日はホグズミード行きの日だが、居残り組の僕は、城の中をウロウロしていた。途中、ルーピン先生に会ってお茶に誘われ、暇だった僕はお邪魔することにする。

「……凄いですね」

「……ある生徒にとあるものを貸したんだが、そのお礼にと貰ってね。毎日のように食べているから、太りそうだよ」

机に山積みのお菓子。ほとんど……というか、全てがチョコレート製品だった。

「全部手作り……もしかして、リズが？」

「よくわかったね」

「よく貰うんです」

出て来た紅茶を飲みながら、ルーピン先生が紙箱を持って来る。

「リズが、もし君に会ったら一緒に食べて欲しいと言っていたんだ。一人でいると思うからって」

紙箱を開けると、一口サイズのパイのようなものが。たぶん、そこまで量が多くないのは、今日の夕食が豪華だからだろう。リズらしい気遣いだ。

お茶会の最後、スネイプが持って来たゴブレットからルーピン先生が薬を飲んでいたことを、帰って来たロンとハーマイオニーに忘れずに伝えるのだった。

*

夕食前、ハリーにお菓子のお礼を言われた。

ロンとハーマイオニーがどっさりお土産を持って帰って来るだろうし、今日はハロウィーンの御馳走があるので、軽くつまめる『パイ○実』擬きを作ってルーピン先生に差し入れたのだが、好評だったようだ。また作って欲しいと言われたので、今度はロンとハーマイオニーにもご馳走しよう。主な材料はパイシートとチョコくらいだから、手軽に作れるし。

楽しみだった夕食は、期待を裏切らなかつた。近いうちに屋敷しもべ妖精にお礼を言おう。彼らは見返りを認めているわけではないが、料理の感想を伝えたり、リクエストしたりすると、とても嬉しそうな顔をするのだ。

で、だ。

寮に戻ったところ、すぐに全員大広間に呼び出された。やはり、シリウス・ブラックが侵入したか。

ダンブルドアが今日は全員が大広間で寝ることを伝え、大広間を後にすると、生徒達は次々にしゃべり始める。

「何があったのかしら」

「私、聞いて来ます。私の分の寝袋を確保しておいて貰えますか」

「わかつたわ」

もちろん、事情はハリー達に尋ねる。

「何があったんですか?」

「シリウス・ブラックがグリフィンドールに侵入しようとしたんだ」

『太った婦人^{レディ}』を刃物で斬りつけようとしたらしいけど、彼女、防護装置を持っていたみたいで、それで身を守ったらしいわ。ダンブルドア先生が、それが無ければズタズタに斬り裂かれてただろうって」「トラウマになっちゃったみたいだけどな」

三人が口々に説明してくれたお陰で、原作通りの展開だということがわかつた。

「それにしても、リズ、防護装置を渡すタイミングが良かったみたいだな」

「本当ですね。間に合つてよか——っ!？」

当たり前のようにロンが言うもんだから、普通に返してしまった。慌てる私に、三人が顔を見合わせる。

「やっぱりリズだったのね。どうして防護装置を渡したの?」

「前に、濡れるのを嫌がってたし、その、役に立つかと思つて、えっと、あの、」

あらかじめ『太った婦人^{レディ}』に言ったのと同じ理由をつつかえつつかえ話すが、三人は苦笑い。身長差もあつて、小さい子に対するお兄さ

んお姉さんな雰囲気を出してやがる。

もう！ だから不意打ちされるのは嫌いなんだよ！

「つまり！ おやすみなさいっ!!」

もう何を言ってもダメな感じだったので、捨てゼリフとしてそれだけ言つて、スーザン達の元に帰るのだった。

・ハリー side

「やっぱりリズだったのね」

ロンがさりげなくカマをかけたのだが、あつさり引つ掛かったりズ。いつもこちらを驚かせる反面、予想外の事態は苦手らしい。赤くなったり青くなったりしながら視線を泳がせ、最終的には拗ねたリズを思い出し、苦笑い。身長差もあつて、なんだか小さい子みたいだった。

「本当にタイミングが良いよな。『超直感呪文』でも使つてるのか？」「とりあえず、パーシーが怒り出しそうだから寝よう」

・ジャステイン side

グリフィンドル三人組から事情を聞いて来たリズは、ちよつと不機嫌になりながら聞いて来た話を教えてくれた。その顔は若干赤い。

「リズ、どうかしましたか？ 顔が赤いですけど」

尋ねると、リズはふいつと視線を反らせてしまう。

「あんなわかりやすい罠にまんまと引つ掛かった自分が恥ずかしいだけです！ おやすみなさいっ!」

三人組に何かされたらしいが、リズが寝てしまったのでよくわからない。スーザン、ザカリアスと顔を見合わせ、僕達も寝ることにした。

第57話 クイドイツ③—I

ハロウィーンが終わった後は、嫌な天気が続いた。

談話室で宿題をしていると、慌てた様子でセドリックが飛び込んで来た。

「クイドイツだ。スリザリンの代わりにグリフィンドールと戦うことになった！」

一瞬で寮内が騒がしくなった。

飛び交う疑問の声に答えるべく、今年キャプテンとなったセドリックが大きな声を上げる。

「スリザリンのシーカーが怪我をしているから、代わりに僕達がグリフィンドールと第一試合で戦うことになったんだ！」

ああ、ヒツポグリフ事件か。そういえばH・R・Hハリー・ロン・ハーマイオニーが何か言っていた気がする。

で、ハリーが箒から落ちる試合だったか。

うーん、三巻が一番イベントが少なかったから、記憶も曖昧だ。

そうだ、『逆転時計』タイムターナーを使ってるハーマイオニーは、普通よりお腹が空くはずだから、ちよこちよこつまめるものを差し入れておこう。

この前ハリーにも好評だったし、例の『パイ〇実』擬きがちょうど良いだろう。

考え事をしているうちに、話はまとまったらしい。クイドイツ・チームのメンバー達は、急遽練習することにしたらしく、着替えて箒を担いで出て行った。

ああ、こつちも差し入れだな、と思いつつ、私は宿題を片付けるのだった。

*

雨の中、クイドイツのコートに向かっているのは私だけでなく、ジャスティンも一緒にいる。いつもならスーザンなのだが、急遽『闇の魔術に対する防衛術』の授業で出された人狼のレポートから手が離せないため、代わりに一緒に来てくれたのだ。

ザカリアス？ もちろんレポートと睨めっこ中だ。

あのレポート、提出しなくても良くなるんだけどね。頑張れ、スーザン、ザカリアス。

ちようど練習を中断したチームのメンバーに、ペットボトルとタオルを渡す。全員ずぶ濡れなのだが、それが汗のせいか雨のせいかわからない。

「この天気で冷たい飲み物はやめた方がよかったですか？」

「いや、暑かったしちようどいいよ。タオルもありがとう」

念のためセドリックに聞いてみるが、大丈夫そうだ。ペットボトルもキンキンにしているわけでもなく、適度な温度だし。

「試合、明日ですよ。大丈夫ですか？」

ジャスティンがセドリックに声を掛けるのを聞いて、

「あの、こんな短期間の練習で無茶言うなっていうなら、ドラコ・マルフォイが仮病だって暴いてきますけど」

思わず提案してしまった。

「大丈夫だよ」

大丈夫らしい。すごいなこのキャプテンは。

「リズ、試合の結果はどうなると思います？　いつもの勘で」

「……勝つ、と、思いますけど……」

モヤモヤが残る試合になるんだろうなあとぼんやり思う。

守護の呪文、念のため復習しておこう。

第58話 クイドイツ③——I I

「……試合、始まったわね」

「……そうですね」

目の前で繰り広げられるクイドイツの試合。その全貌は、誰にもわからない。

「この天気で選手達は大丈夫でしょうか。風邪とか引きませんよね？」

選手じゃなくても、私が風邪を引きそうさだ。

「そろそろタイムアウトだろうな」

ザカリアスが言うんだから間違いないだろう。

「スーザン、行きますよ」

「え？ どこに？」

「選手のところ」

・スーザン side

タイムアウトでグラウンドに下りてきている選手に向かって声を張り上げる。

「あのー、タオル持って来ました！」

もともと人見知りのリズだ。たぶんこの天気の中で声を張り上げても相手には届かないだろう。

こちらに向かって両手を合わせているリズの代わりに、選手達に向かって叫ぶ。

「タオルには防水呪文が掛かっているので使えます！ 手、凍えている人居ませんか!? リズが呪文であつためてくれます!!」

順番にリズが呪文を掛けて回る。セドリックが何かをリズに言っているようだが、対するリズの声はセドリックに届いていないようだ。

タイムアウトが終わり、観客席に戻ってから、私はリズになんて言われていたのかを聞いてみた。

「この呪文、違反じゃないのか確認されたんです」

「そういえば、反則じゃないの？」

「昨日確認しましたけど、大丈夫でした」

「……この子は七百もある反則を確認したのか！」

＊

試合の終盤、吸魂鬼デイメンターがやってきた。

「『エクスペクト・パトロナム』!!」

腕試し&ハリーの安全のため、吸魂鬼デイメンターの姿がハッキリ確認された瞬間、杖を向ける。

大丈夫。吸魂鬼デイメンターに化けたまね妖怪ホガートと仲良くなれたじゃないか。迫り来るバジリスクなんかより怖くない！

霞のような守護霊が杖先から飛び出し、白銀の尾を引きながら吸魂鬼デイメンターに向かつていった。不完全な守護霊は、吸魂鬼デイメンターと選手達の間に入り、両者の接近を防ごうとする。

ハリーがぐらりと揺れ、箒から体が滑り落ちると同時に、私のものより遥かに光を放つ守護霊が吸魂鬼デイメンターを追い払った。

「リズー・あの人、落ちてるわー!」

この天気で誰かはわからないのだろう。スーザンは焦ったように私の腕を掴む。

私が杖を向けるより先に、ハリーの落ちるスピードが緩んだ。たぶんダンブルドア先生だろう。もう、大丈夫なはずだ。

＊

「……結果は?」

「あなたの落下に気が付かなかったセドリック・ディゴリーがスニッチをキャッチ。本人はやり直しを要求したようですが、審判の判断によりハッフルパフの勝利となりました」

「……………そっか」

原作通りの結果。やはりハリーは落ち込んだような顔をしている。「ホットチョコレートを持って来ました。体が温まると思うので、飲んで下さい」

後ろで沈黙しているグリフィンドルのクイディッチ・チームのメンバー、そしてロンとハーマイオニーを前に押し出す。

これから始まるやりとりには、私は居ない方がいいだろう。

第59話 クリスマスの前日

原作では、ハリーが医務室での安静を言い渡されてから数日中に、オリバー・ウッドが死んだような顔でお見舞いに来る出来事があったはずだ。ハツフルパフの私にとっては居づらい雰囲気になること間違いないので、就寝時間直前にお見舞いのお菓子を渡すだけにしておいた。

もうすぐクリスマス。

たぶん、原作通りフレッドとジョージはハリーに『忍びの地図』を譲るだろう。ふくろう便で、『人に譲ろうと思うが構わないか』という旨の手紙が送られて来たので、大丈夫だと送っておいた。クリスマス休暇中は、ハリーに見られても嫌なので『必要の部屋』の使用は控えることにする。

さて、三年生以上の生徒にお待ちかね、ホグズミードへ行く日がやって来た。

「一旦解散して、待ち合わせにしましょう」

スーザンの提案に一瞬考え、すぐにその意図が掴めた。ジャステインとザカリアスにも通じているようで、二人も頷いている。

「では、二時間後に『三本の箒』で待ち合わせで構いませんね？」

ジャステインの言葉通りにすることが決まり、私達は一時解散することになった。

もちろん、その目的はクリスマス・プレゼントの購入だろう。スーザンはホグズミードで買うことに決めたようだ。私？ ホグズミードだとかぶるかもしれないから、手作りか他の場所での購入。

とまあこんなわけで暇になっちゃったので、ルーナへのお土産でも見て回りますか。

*

ハリーの父ジェームズ・ポッターとシリウス・ブラックは、学生時代に無二の親友であったこと。ハリーの名付け親はシリウスだということ。シリウスはハリーとジェームズ・ポッターの秘密を守り抜く『秘密の守り人』になったが、ヴォルデモートにその情報を売ったとい

うこと。シリウスを追い詰めたピーター・ペティグリューは、吹き飛ばされ、死亡したこと。

魔法省大臣コーネリウス・ファッジ、マクゴナガル先生、フリットウィック先生、ハグリッド、そしてマダム・ロズメルタの会話の中で語られた内容はきつとハリーにとつては衝撃のものだろう。

大人達が立ち去った後、ハリーはノロノロと透明マントをかぶり、姿を消した。

「ロン、ハーマイオニー」

私が声を掛けると、二人はビクツとしながら振り返った。

「ハリーにブラックを追い掛けるなど言っても逆効果ですからね」

そう言うと、二人ははあ、とため息をついた。

「どうせ、ブラックを追い掛けるって言ったところで結果は一緒さ」

*

買い物を終えて集まったS・J・Zと共にバタービールを飲

み（私は二杯目だが）、帰路につく。

「リズは今年もホグワーツに残るのよね？」

「はい。家に帰っても特に何もありませんし」

「お土産持って来ますから、楽しみにして置いて下さいね」

「クリスマス・プレゼントもだけどね」

「もちろんです」

*

そろそろ、スキヤバーズにお目に掛かっておきたい。今度ロンに頼んでみよう。

第60話 バックビークとファイアボルト

「ハグリッド！ どうしたの？」

開かれたドアから入って来たのは、ハリー H・R・ロン H・ハーマイオニー H だった。

私は静かに立ち上がると、ハグリッドの小屋の棚を漁ってティーバッグを人数分引つ張り出し、紅茶を淹れる。

私がお茶の支度をしている間に、ハグリッドはしゃくり上げながら三人に事情を説明していた。

新学期最初の『魔法生物飼育学』で、今年から教授となったハグリッドはヒツポグリフについての授業を行なった。そこでなんやかんやがあり、注意を受けていたにも関わらずそれを聞き入れなかったドラコ・マルフォイがヒツポグリフによつて負傷。ドラコの父ルシウス・マルフォイは『危険生物処理委員会』に訴えた。

その委員会から送られて来た手紙には、ハグリッドには責任がないと認められたが、ヒツポグリフのバックビークは事情聴取を受けることになったのだ。

今朝、原作でのこの一連の流れを思い出した私は、急いで支度をしてハグリッドの元に駆け付けた。

原作では学年末にバックビークは自由の身になるとはいえ、この世界は、私という存在が居る時点で原作とは似て非なる。何かの間違いでバックビークは命を落とすかもしれない。いくらシリウス・ブラックの逃走の役に立つとは言えども、これは放っておける問題ではないのだ。

シリウスには悪いが、これだけは介入させてもらうことにした。

「ハグリッド、ちゃんとした弁護を打ち出さないといけないわ」

「そうだよ、ハグリッド、バックビークが安全だつて証明しないと」

「それに関しては私も協力します」

紅茶を運び、今朝焼いてきたアップルパイを出す。

「まずは甘いものを食べて落ち着きましょう。対策を考えるのはそれからです」

*

翌日、ハグリッドの小屋から帰った後にリストアップしておいた、動物による襲撃に関する事件が書かれた本を抱え、私達はグリフィンドールの談話室に入った。

「リズ、グリフィンドールの寮に入っているの？」

「二年生の時も入ったじゃないですか。それに、今はこちらの方が重要でしょう」

その日は丸一日掛けて、バックビークに有利になる記述を探したが、見つからなかった。

*

クリスマス。

「ハーマイオニーが、炎ファイアボルトの雷を！ 分解だよ、分解！ 世界最高峰の箒をだよ!?!」

大声で訴えるロンのお腹に本を強く押し付け（本当なら頭を叩はたきたかったが、身長差的にこちらの方が楽なのだ）、黙らせる。

クリスマス・プレゼントとして匿名で贈られてきた世界最高峰の箒、炎いかすちの雷・ファイアボルト。その値は、スリザリン・チームの箒を束にした値段よりも上回るといふ。それが匿名で贈られて来たことにハーマイオニーは不安を覚え、マクゴナガル先生に相談、その箒は取り上げられて調べられることになったのだ。

ハーマイオニーの心配は無用といえども、彼女の考えた通り贈り主はシリウス・ブラック。ハーマイオニーはハリーの身を心配しているのだから、私がロンに慰めの言葉を掛ける必要は皆無だ。

「ハーマイオニーの心配は最もです。もし、ハリーが箒に乗った瞬間、異変が起きたらどうするつもりなんですか。ファイアボルトに怪しい点が無ければ帰って来るのですから、ハーマイオニーを責めるのはやめるべきです」

それと、と付け加える。

「マダム・ピンスがこちらを見えています。図書室に出入り禁止になりますよ」